

山梨県韮崎市

中本田遺跡  
堂の前遺跡

県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1987

韮崎市教育委員会  
峡北土地改良事務所

山梨県韮崎市

# 中本田遺跡 堂の前遺跡

県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1987

韮崎市教育委員会  
峡北土地改良事務所

## 序 文

本報告書は、昭和61年度県営圃場整備事業に伴い、発掘調査された中本田遺跡・堂の前遺跡の報告であります。

県営圃場整備事業の推進されている塩川地区は、塩川右岸の沖積地にあたり、古来より藤井五千石として県内有数の穀倉地帯となっております。この通称藤井平には、肥沃な土地を背景として、古代より脈々と人々の生活が営まれて来ました。それは、やはり県営圃場整備事業に伴い、中田小学校遺跡・金山遺跡・下木戸遺跡・中道遺跡が発見され、発掘調査されたことから窺い知ることができると思います。

今回発掘調査を行った中本田遺跡は縄文時代後期を主体としており、堂の前遺跡は弥生時代・平安時代の遺跡であります。中本田遺跡は土器片が中心ですが、低地性という遺跡の立地と考え合わせ重要な資料が得られたと思います。また、堂の前遺跡は、弥生時代及び平安時代の集落址ととらえられ、藤井小学校を中心としてその周囲に大規模な、藤井平の歴史を解明するような集落址の存在を予想させます。これらのことを踏まえ本報告書が、地域の歴史の解明へのひとつの手がかりとして、また学問研究の一資料として、皆様に御活用していただければ幸いと存じます。


最後に、今回の発掘調査ならびに報告書作成に際し、多大なる御理解と御協力を頂いた関係者の方々に厚くお礼申し上げます。

昭和62年 3月31日

蕪崎市教育委員会

教育長 功 刀 幸 丸

# 例 言

1. 本書は、県営圃場整備事業に伴う、中本田遺跡・堂の前遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、峡北土地改良事業所負担金、文化庁・山梨県の補助金を受け、韮崎市教育委員会が実施した。
3. 本報告書の〔各説〕は、山下孝司を中心に小田切玲子・山寺保子・森本勝枝・平賀久二男・今福美由紀が作成し、〔総説〕〔総括〕は山下が執筆した。
4. 遺物・図面整理の参加者・協力者（敬称略）  
土橋きよみ・小田切玲子・山寺保子・清水由美子・平賀久二男・清水恵美子・森本勝枝・今福美由紀・中山千恵・宮沢公雄・広瀬千江美・大村昭三・河西学・野沢洋子・深沢真知子・小林巧・梶本宏・岡本康之・榎原功一・他
5. 遺物整理において、堂の前遺跡19号住居址出土の炭化材の同定に関しては、特に（財）山梨文化財研究所とパリノ・サーヴェイ株式会社高橋利彦氏の協力を得た。
6. 凡例
  - ① 挿図中の破線内乃至ドットは焼土を表わす。
  - ② 挿図断面図の  は石を表わす。
  - ③ 縮尺は各挿図ごとに示した。
  - ④ 歴史時代土器断面、白ヌキは土師器、黒は須恵器、スクリーントーンは陶器を表わす。
7. 発掘調査及び報告書作成に当り、次の方々から御指導・御協力をいただいた。厚く御礼を申し上げます次第である。（敬称略）  
新津健・米田明訓（山梨県教育庁文化課）、山路恭之助（須玉町教育委員会）、谷口一夫・萩原三雄・宮沢公雄・平野修・榎原功一・河西学（財団法人山梨文化財研究所）

## 調査組織

1. 調査主体 韮崎市教育委員会
2. 調査担当 山下孝司（韮崎市教育委員会社会教育課）
3. 調査参加者（敬称略）  
岡本嘉一・小田切絹枝・鈴木きく江・小沢高恵・小沢みよの・小沢久江・小沢千代子・保坂かつよ・志村冴子・岡本保枝・乙黒きくゑ・小沢栄子・小沢春代・五味ゆき子・長島昌子・小田切玲子・土橋きよみ・山寺保子・梶本宏・小野順・雨宮実・砂長完郎・苫米地高志・伊東千代美・小林巧・秋山健二・古屋勝・小池和仁・今福美由紀・三井健二・平賀久二男・五味正宏 他
4. 調査協力 韮崎市圃場整備室
5. 事務局 韮崎市教育委員会社会教育課  
教育長 功刀幸丸・岩下俊男（前任者）、課長 雨宮高、係長 真壁静夫、下村貞俊・野沢可祝

# 目 次

序 文  
例 言  
目 次  
挿 図 目 次  
図 版 目 次

## 〔総 説〕

- I 調査に至る経緯と概要 ..... 1
- II 遺跡の立地と環境 ..... 1
  - 1. 遺跡の立地
  - 2. 周辺の遺跡
- III 遺跡の地相概観 ..... 2

## 〔各 説〕

- I 中本田遺跡 ..... 6
- II 堂の前遺跡 ..... 15

## 〔総 括〕

- I 発掘調査の成果とまとめ ..... 68
  - 1. 中本田遺跡
  - 2. 堂の前遺跡
- II 藤井平の弥生時代後期の土器推移 ..... 69
  - 1. 器種分類
  - 2. 土器の時間的推移  
藤井平の弥生時代後期土器編年（試案）
  - 3. 編年的位置付け
  - 4. まとめ

## 〔引用・参考文献〕

註

図 版

## 挿 図 目 次

第1図	中本田遺跡①・堂の前遺跡②と 周辺遺跡……………	3	第31図	11号住居址……………	33
第2図	中本田遺跡位置図……………	4	第32図	11号住居址出土遺物……………	34
第3図	堂の前遺跡位置図……………	5	第33図	12号住居址……………	35
第4図	中本田遺跡……………	6	第34図	12号住居址出土遺物……………	36
第5図	中本田遺跡出土遺物……………	9	第35図	13号住居址……………	38
第6図	中本田遺跡出土遺物……………	10	第36図	13号住居址出土遺物……………	38
第7図	中本田遺跡出土遺物……………	11	第37図	14号住居址……………	39
第8図	中本田遺跡出土遺物……………	12	第38図	14号住居址出土遺物……………	39
第9図	中本田遺跡出土遺物……………	12	第39図	15号住居址……………	40
第10図	中本田遺跡出土遺物……………	13	第40図	15号住居址出土遺物……………	41
第11図	堂の前遺跡全体測量図……………	14	第41図	16号住居址……………	43
第12図	1号住居址……………	15	第42図	16号住居址出土遺物……………	43
第13図	1号住居址出土遺物……………	16	第43図	17号住居址……………	44
第14図	2号住居址……………	17	第44図	17号住居址出土遺物……………	45
第15図	2号住居址出土遺物……………	18	第45図	17号住居址出土遺物……………	47
第16図	3号住居址……………	19	第46図	18号住居址出土遺物……………	47
第17図	3号住居址出土遺物……………	20	第47図	18号住居址・カマド……………	48
第18図	4号住居址……………	20	第48図	19号住居址遺物出土状態……………	49
第19図	5号住居址……………	21	第49図	19号住居址……………	50
第20図	5号住居址出土遺物……………	22	第50図	19号住居址出土遺物……………	51
第21図	5号住居址出土遺物……………	23	第51図	19号住居址出土遺物……………	52
第22図	6号住居址……………	24	第52図	19号住居址出土遺物……………	53
第23図	6号住居址出土遺物……………	25	第53図	19号住居址出土遺物……………	54
第24図	7号住居址……………	26	第54図	20号住居址……………	61
第25図	7号住居址カマド……………	27	第55図	20号住居址出土遺物……………	62
第26図	7号住居址出土遺物……………	28	第56図	20号住居址出土遺物……………	63
第27図	幻の8号住居址出土遺物……………	30	第57図	水没住居址出土遺物……………	64
第28図	9号住居址……………	31	第58図	溝状遺構……………	65
第29図	9号住居址出土遺物……………	32	第59図	溝状遺構出土遺物……………	65
第30図	10号住居址……………	33	第60図	遺構外出土遺物……………	66
			第61図	遺構外出土遺物……………	67

## 図 版 目 次

- 図版 1 堂の前遺跡19号住居址出土炭化材顕微鏡写真
- 図版 2 堂の前遺跡19号住居址出土炭化材顕微鏡写真
- 図版 3 中本田遺跡遠景・発掘風景・全景
- 図版 4 中本田遺跡出土遺物
- 図版 5 堂の前遺跡風景・1号住居址・2号住居址
- 図版 6 堂の前遺跡3号住居址・4号住居址・5号住居址
- 図版 7 堂の前遺跡6号住居址・7号住居址・7号住居址カマド
- 図版 8 堂の前遺跡9号住居址・10号住居址・11号住居址
- 図版 9 堂の前遺跡12号住居址・13号住居址・14号住居址
- 図版10 堂の前遺跡15号住居址遺物・15号住居址・発掘風景
- 図版11 堂の前遺跡16号住居址・17号住居址・18号住居址
- 図版12 堂の前遺跡18号住居址カマド・発掘風景・19号住居址
- 図版13 堂の前遺跡19号住居址・20号住居址・溝状遺構
- 図版14 堂の前遺跡1・2・3・5号住居址出土遺物
- 図版15 堂の前遺跡6・7・幻の8・12号住居址出土遺物
- 図版16 堂の前遺跡11・13・14・15号住居址出土遺物
- 図版17 堂の前遺跡17・18・20・水没住居址出土遺物
- 図版18 堂の前遺跡19号住居址出土遺物

## 〔総 説〕

### I 調査に至る経緯と概要

昭和61年度県営圃場整備事業実施にともない、本市教育委員会では韭崎市圃場整備室から依頼を受け、事業予定地区を昭和60年度に試掘調査を行い、遺跡の存在を確認した。その結果をもとに、峡北土地改良事務所・山梨県教育庁文化課・市教育委員会で協議を行い、中本田・堂の前の二遺跡について、圃場整備事業に先立って、延面積約5000㎡を対象として発掘調査を行い、記録に留め永く後世に伝えることにした。

発掘調査は、昭和61年6月下旬から開始し、約3ヵ月間行った。引き続き、遺物等の整理作業を行い、報告書作成までの作業が完了したのは、昭和62年3月であった。

### II 遺跡の立地と環境(第1図)

#### 1. 遺跡の立地

中本田遺跡は、山梨県韭崎市穴山町字中本田地内、堂の前遺跡は、山梨県韭崎市藤井町坂井字堂ノ前地内に所在した。

韭崎市は山梨県の北西部に位置し、甲府盆地の北西端を占めている。市内を貫流する釜無川・塩川により、地形的に略山・台地・平地の3地域に分けられる。塩川右岸の氾濫源は、塩川の侵食によって造られた茅ヶ岳山麓西端の断崖と、七里ヶ岩台地東側の片山とにはさまれた低地性平地で、通称藤井平と呼ばれ、地内を貫流する黒沢川・藤井堰により水利がよく、肥沃で豊かな水田地帯となっている。また、『甲斐国志』には「穴山ヨリ南小田川、駒井、坂井、中條、下條、韭崎等ノ数村ヲ里人藤井ノ庄五千石ト云」と記載があり、古くから穀倉地帯であったことが窺える。当該地帯は平坦地の様相を呈してはいるが、地形を観察してみると、たび重なる氾濫によって自然堤防状の微高地が所々に発達していることがわかる。藤井平は、このような微高地上に遺跡が点在しており、中本田遺跡は標高約432m、堂の前遺跡は標高約384mの水田下に発見された。

#### 2. 周辺の遺跡

番号	遺 跡 名	時 代 区 分	備 考
①	中 本 田	縄 文	昭和61年度 韭崎市教育委員会調査
②	堂 の 前	弥生・奈良・平安	昭和61年度 韭崎市教育委員会調査
③	金 山	中 世 ~ 近 世	昭和60年度 韭崎市教育委員会調査



番号	遺 跡 名	時 代 区 分	備 考
④	中 道	縄文晩期 ・ 平 安	昭和60年度 葦崎市教育委員会調査
⑤	下 木 戸	平 安	昭和60年度 葦崎市教育委員会調査
⑥	中 田 小 学 校	縄文・弥生・奈良・平安	昭和59年度 葦崎市教育委員会調査
⑦	駒 井	平 安	昭和60年度 山梨県埋蔵文化財センター調査
⑧	坂 井 1	縄 文	
⑨	宮 の 前	縄 文 ・ 平 安	
⑩	坂 井	縄文前期 ～ 晩 期	志村滝蔵『坂井』 地方書院 昭和40年
⑪	坂 井 南	古墳前期 ・ 平 安	昭和60年度 葦崎市教育委員会第三次調査
⑫	後 田	縄 文 ・ 弥 生	
⑬	天 神 前	縄 文	
⑭	中 条 上 野 1	縄 文	
⑮	中 条 上 野 2	縄 文	
⑯	新 府 城 跡	中 世	国指定史跡

### III 遺跡の地相概観

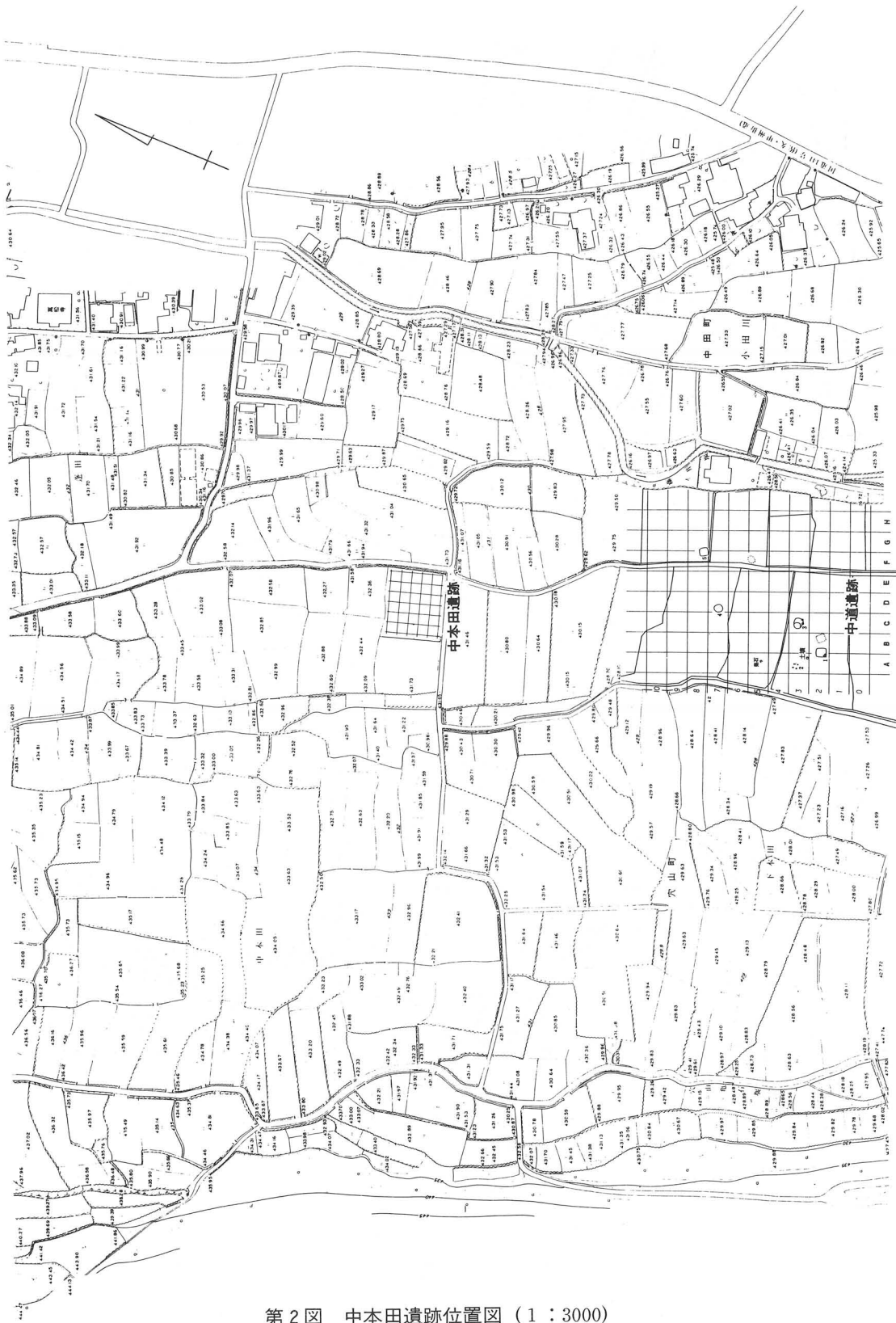
中本田遺跡は、山梨県緑化センター小田川緑化園から北西に約 300mの所に位置し、日当りのよい微高地で、東側は傾斜地で東方に藤井堰が南流し一段低く集落が形成されている。西側は小沢となり西方片山の麓を穴山亀石堰が南流する。調査区域内の土層は、耕作土・水田床土下は一様に暗褐色土であり、掘り下げるとれ石が多くなる傾向が窺われる。特に調査区中央から南側は顕著であった。遺物包含層と特定されるものはなく暗褐色土中から土器が出土した。

堂の前遺跡は、藤井小学校から約 200m北東方向の日当りのよい、南へ緩やかな傾斜をもつ微高地で、北側は集落、東側は沢、南側は新興の住宅地となっている。調査区域内は、元水田を畑地にしており、北側の2枚は土器の表面採集が行える程で、耕作土の直下の暗黄褐色土が遺構確認面・構築層であった。他に中央～南側の3枚もやはり耕作土・旧水田床土直下の暗黄



第1図 中本田遺跡①・堂の前遺跡②と周辺遺跡

褐色土乃至暗褐色土が遺構確認面・構築層であった。これらの区域の内、北から4枚、特に中の3枚は、遺構確認面とした土がかなりの水分を含んでおり、遺構内の発掘に際してはひどい住居址になると水が湧いて手がつけられない状態であった。しかし、南側の1枚は、調査区域内で最も低い地点にもかかわらず、水の湧出はまったくみられなかった。これは旧地形の状態に起因するものであろうか。



第2図 中本田遺跡位置図 (1 : 3000)



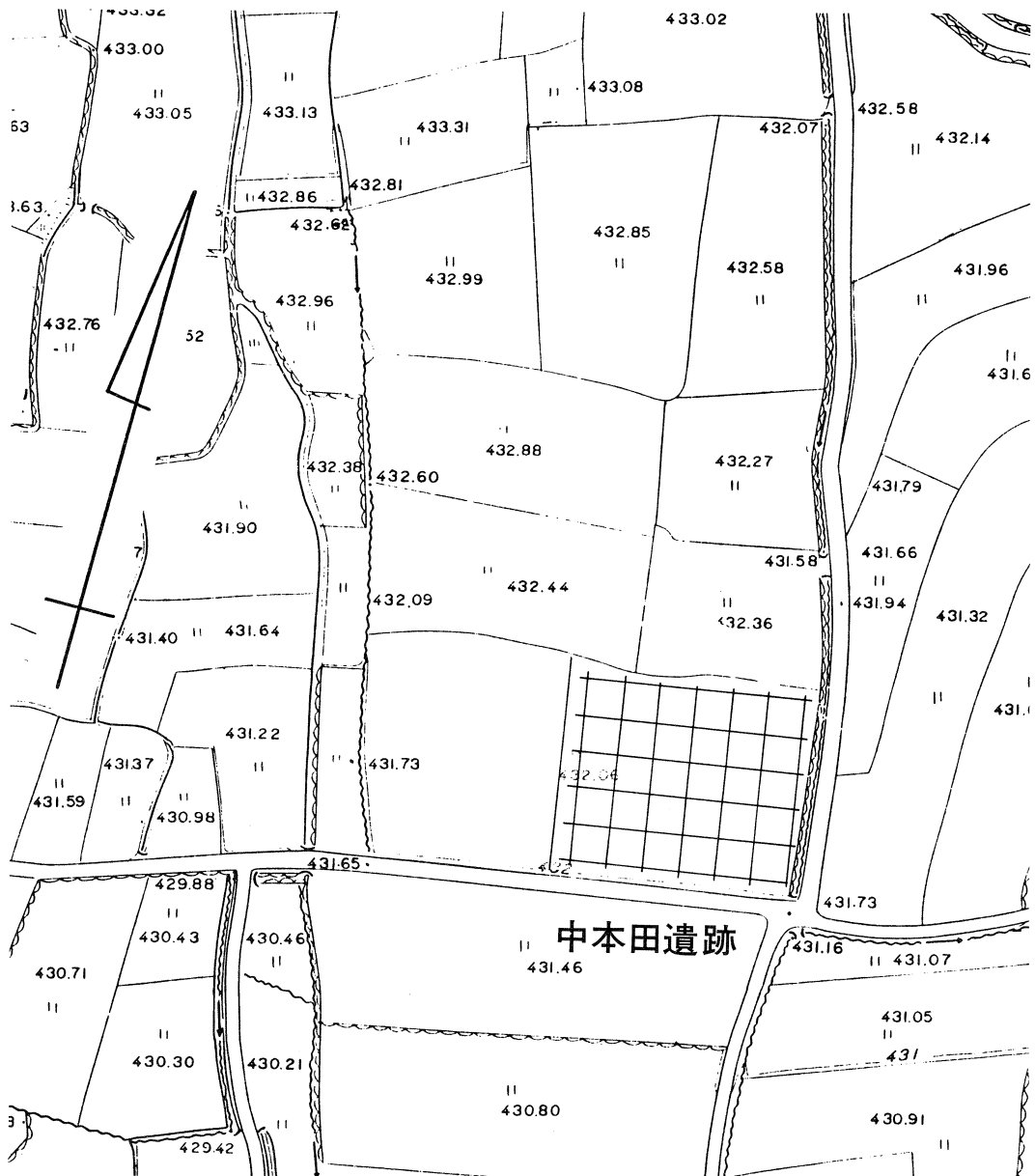
第3図 壺の前遺跡位置図 (1:3000)

# [各 説]

## I 中本田遺跡(第4図)

### 〈遺構・遺物〉

調査の結果、遺構は確認されなかった。しかしながら、縄文時代後期を中心とした土器片が黒褐色土中より多量に出土した。ここでは、それらのうちから何点かを抽出し、文様を中心として分類を行い、時間的経過をみていこう。



第4図 中本田遺跡 (1:1000)

**第1群** (第5図 1～4)

中期末葉に位置づけられるもの

1類 (1・2)

「八」の字状文がみられる。沈線による区画文も施される。

2類 (3・4)

縦位に細い条線が施される。

**第2群** (第5図 5～20)

中期末葉～後期初頭に位置づけられるもの。

1類 (5・6)

縄文のみのもの。

2類 (7)

口縁部に沈線がめぐり、無文帯と縄文を分け、沈線を垂下させるもの。

3類 (8)

沈線及びペン先状工具による刺突により、無文部と縄文を分けるもの。

4類 (9～12)

2本の平行沈線がめぐり、その間に充填縄文が施されている口縁部資料。

5類 (13～15)

沈線による曲線的な区画文が施され、その間に充填縄文が施されるもの。

6類 (16～19)

比較的太い沈線により曲線的な区画文が施され、磨消縄文の手法が施されるもの。

7類 (20)

刺突孔を有する円形の突帯を隆線で結び、三角形の地帯をつくりだし、その内側に沈線と縄文があるもの。

**第3群** (第5・6図 21～40)

後期前葉に位置づけられるもの。

1類 (21・22)

沈線文を列点状刺突で充填するもの。

2類 (23)

太い沈線文をめぐらし、縄文を充填するもの。「8」の字状文が貼付されるか。

3類 (24・25)

円・渦巻状の沈線文が施されるもの。

4類 (26～31)

刻目のある隆線をめぐらすもので、「8」の字状文が貼付される例もある。

5類 (32・33・36)

口縁部に刻目のある微隆線をめぐらし、胴部に沈線と縄文が施されるもの。

6類 (34・35)

沈線による「S」字状文がみられるもの。

7類 (37～40)

沈線文の施される鉢形土器の口縁部を一括した。底部資料も含む。

40は、2本越え1本潜り1本送りの網代痕。

#### 第4群 (第6・7図 41～45)

後期中葉に位置づけられるもの。

1類 (41)

口縁部内側に沈線がめぐる粗製土器

2類 (42～44)

いずれも注口土器の破片。沈線文と「S」字状文が施されるもの。

42は口縁部内側に沈線がめぐり、外面頸部に連続横「S」字状文がみられる。

3類 (45)

よく研磨された器面上の沈線に囲まれた隆帯に充填縄文が施されるもの。注口土器であろう。

#### 第5群 (第7図 46～52)

晩期後半～末葉に位置づけられるもの。

1類 (46)

肩部に沈線がめぐる小型の壺形土器。

2類 (47)

浮線網状文の施されるもの。

3類 (48～50)

条痕文土器である。48・49は、口縁から直に横位の条痕が施される。50は、口縁部に沈線がめぐり、胴部に条痕文を施し稲妻文を垂下させる。

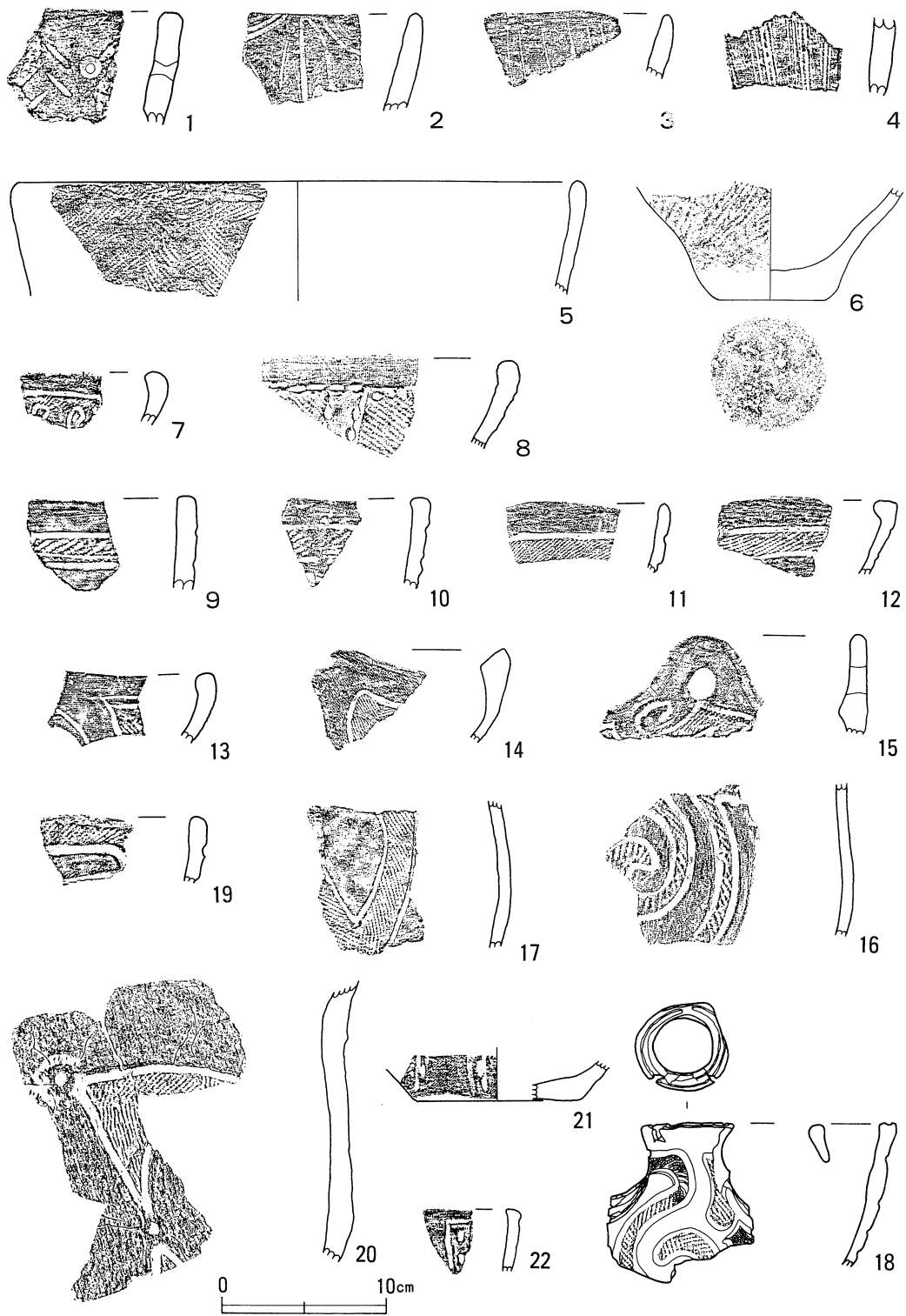
4類 (51・52)

条痕文の施される土器であるが、縦位の上に斜位の条痕をつけ、その手法が3類と異なるので分けておいた。

以上、簡単ではあるが、本遺跡出土の土器を五時期に分けてみて来たが、次にその他の土製品及び石器を紹介しよう。

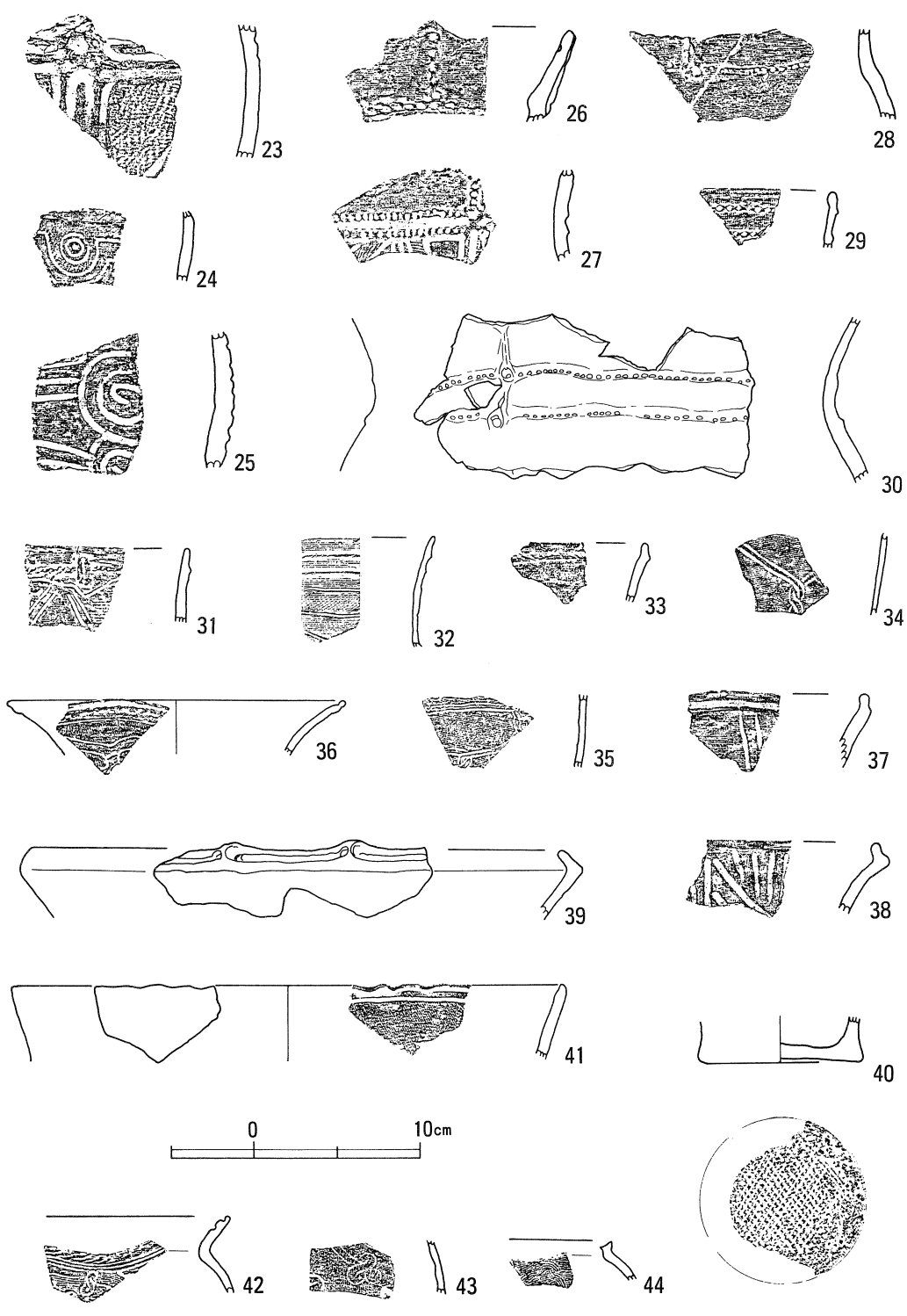
#### 土製品 (第8図)

1. 小さな刺突を列点状に並べてある。一ヵ所に単孔があく。把手とも思われるが不明白。
2. 棒状の土製品。土偶の一部とも考えられるが不詳。
3. 耳飾。断面白形。色調は褪褐色を呈する。若干剥落している。

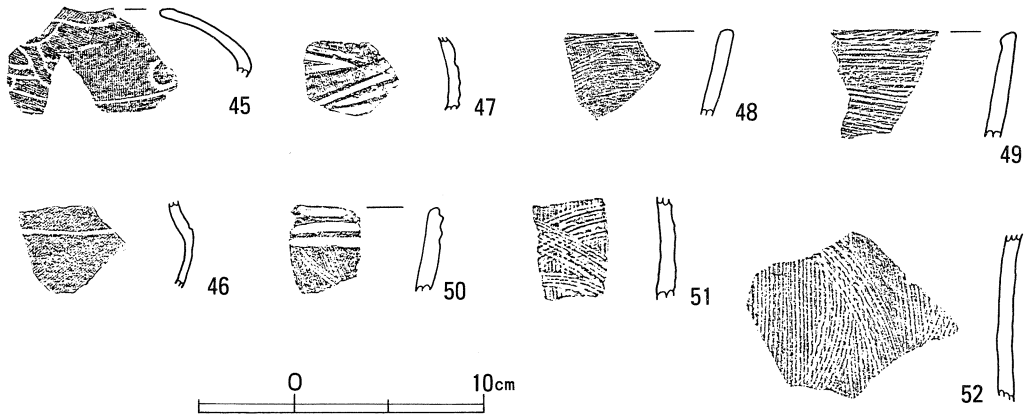


第5図 中本田遺跡出土遺物 (1/4)





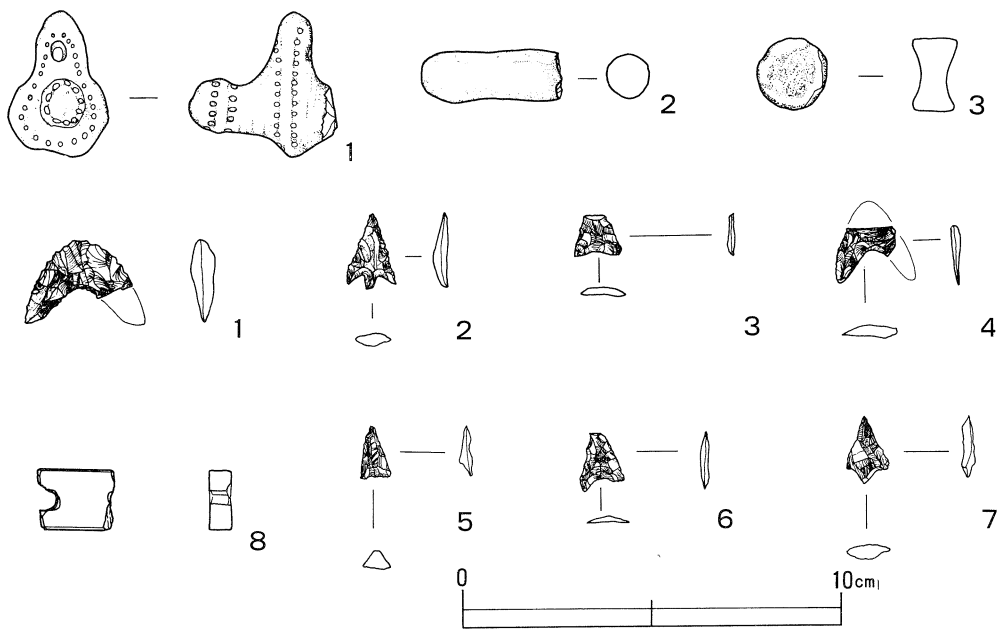
第6図 中本田遺跡出土遺物 (1/4)



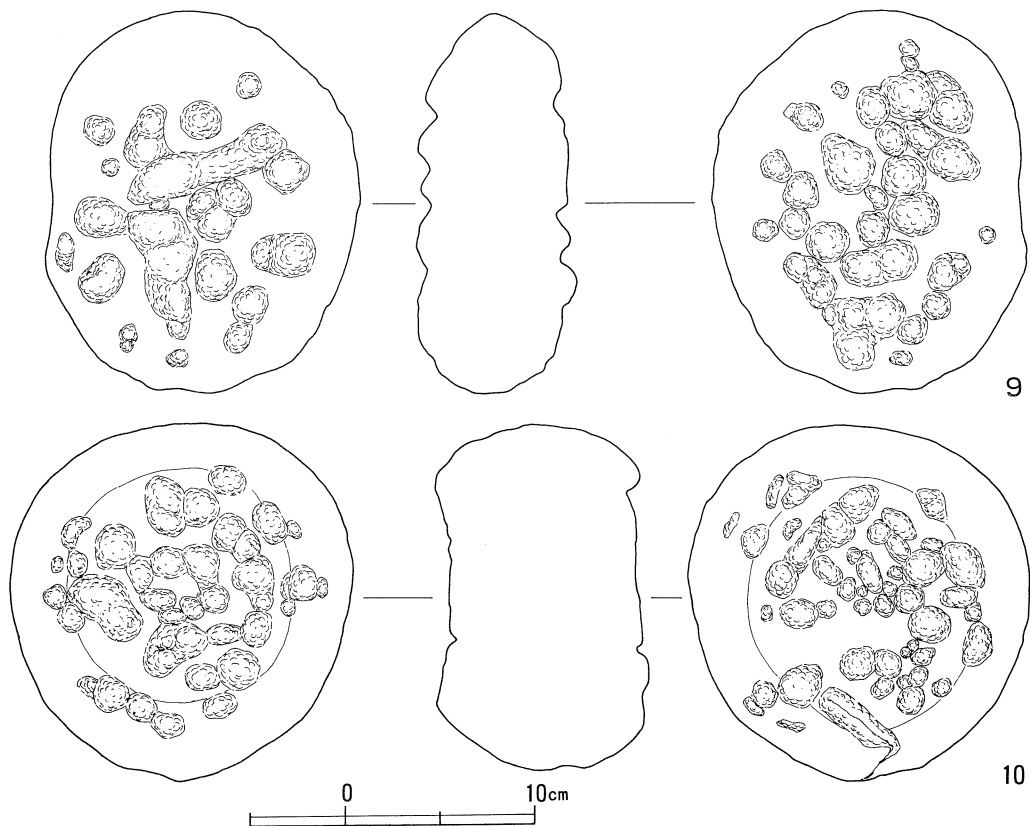
第7図 中本田遺跡出土遺物 (1/4)

石器一覧 (第8・9・10図)

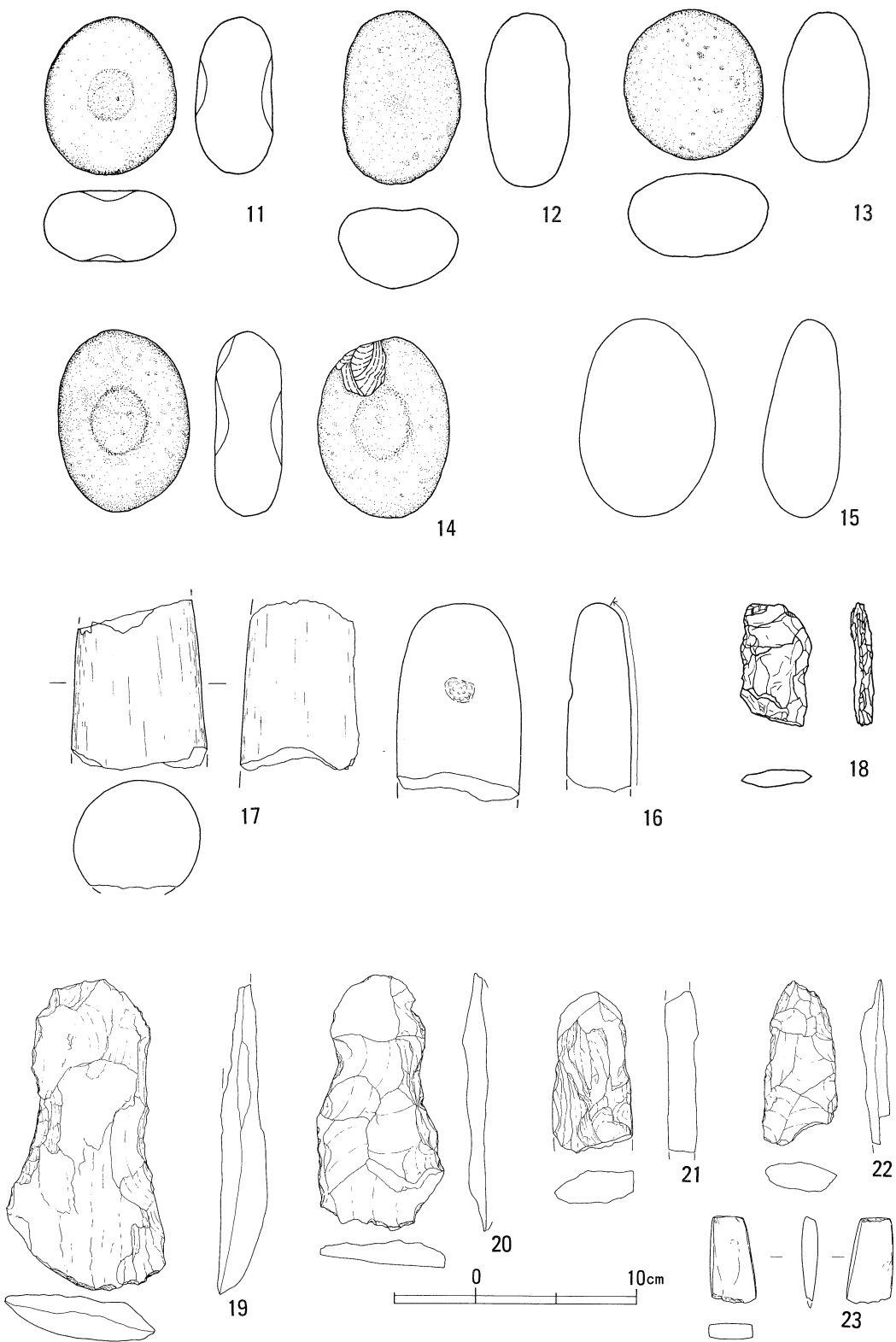
番号	特徴・その他	石質	番号	特徴・その他	石質
1	脚部欠損	黒曜石	13	凹み石 明瞭な凹みは見られない	安山岩
2	基部・脚部若干欠損	黒曜石	14	凹み石 表・裏各1	安山岩
3	頭部欠損	黒曜石	15	敲石か?	安山岩
4	頭部・脚部欠損	黒曜石	16	凹み石 1/3欠損	安山岩
5	脚部若干欠損	黒曜石	17	石棒	緑泥片岩
6	頭部・脚部欠損	黒曜石	18	短冊型石斧	粘板岩
7	脚部欠損	黒曜石	19	分銅型石斧	粘板岩
8	石銚か? 小孔が穿ってある。		20	分銅型石斧	粘板岩
9	蜂の巣石 表・裏に多くの凹みあり	安山岩	21	短冊型石斧	千枚岩
10	蜂の巣石 表・裏に多くの凹みあり	安山岩	22	短冊型石斧	粘板岩
11	凹み石・表・裏各1	安山岩	23	磨製石斧 使用により刃部剥落	
12	凹み石・表・裏各1	安山岩			



第8図 中本田遺跡出土遺物 (1/2)



第9図 中本田遺跡出土遺物 (1/4)



第10図 中本田遺跡出土遺物 (1/4)



第II図 堂の前遺跡全体測量図 (1 : 1000)

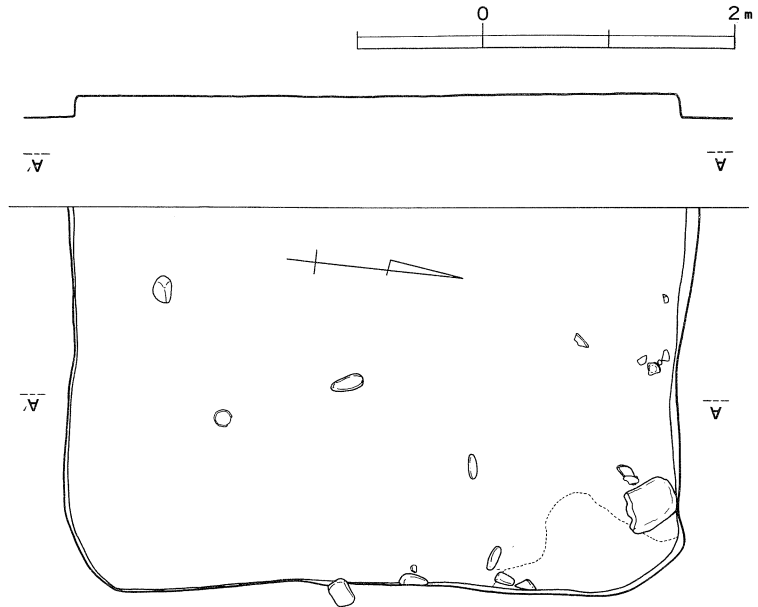
## II 堂の前遺跡 (第II図)

調査の結果、竪穴式住居址20軒・溝状遺構1基が発見された。以下、調査中に付けた住居址番号順に遺構と遺物についてみていこう。

### <1号住居址> (第12・13図)

#### 〔遺 構〕

調査区北辺西端に位置する。暗黄褐色土中に褐色土の落ち込みを発見し発掘する。西側は、調査区域外、水路で完掘できなかった。壁はやや外傾し、高さ20cm前後を測る。東壁は北から南へ流れる溝状遺構の為明瞭ではなかった。規模は南北約4.9mを測る。平面形は隅円方形と思



第12図 1号住居址 (1/60)

われるが不詳。床面は暗褐色土で平坦である。柱穴・周溝はない。カマドは発掘箇所には遺存していなかったが、北東隅に焼土が散在していた。

#### 〔遺 物〕

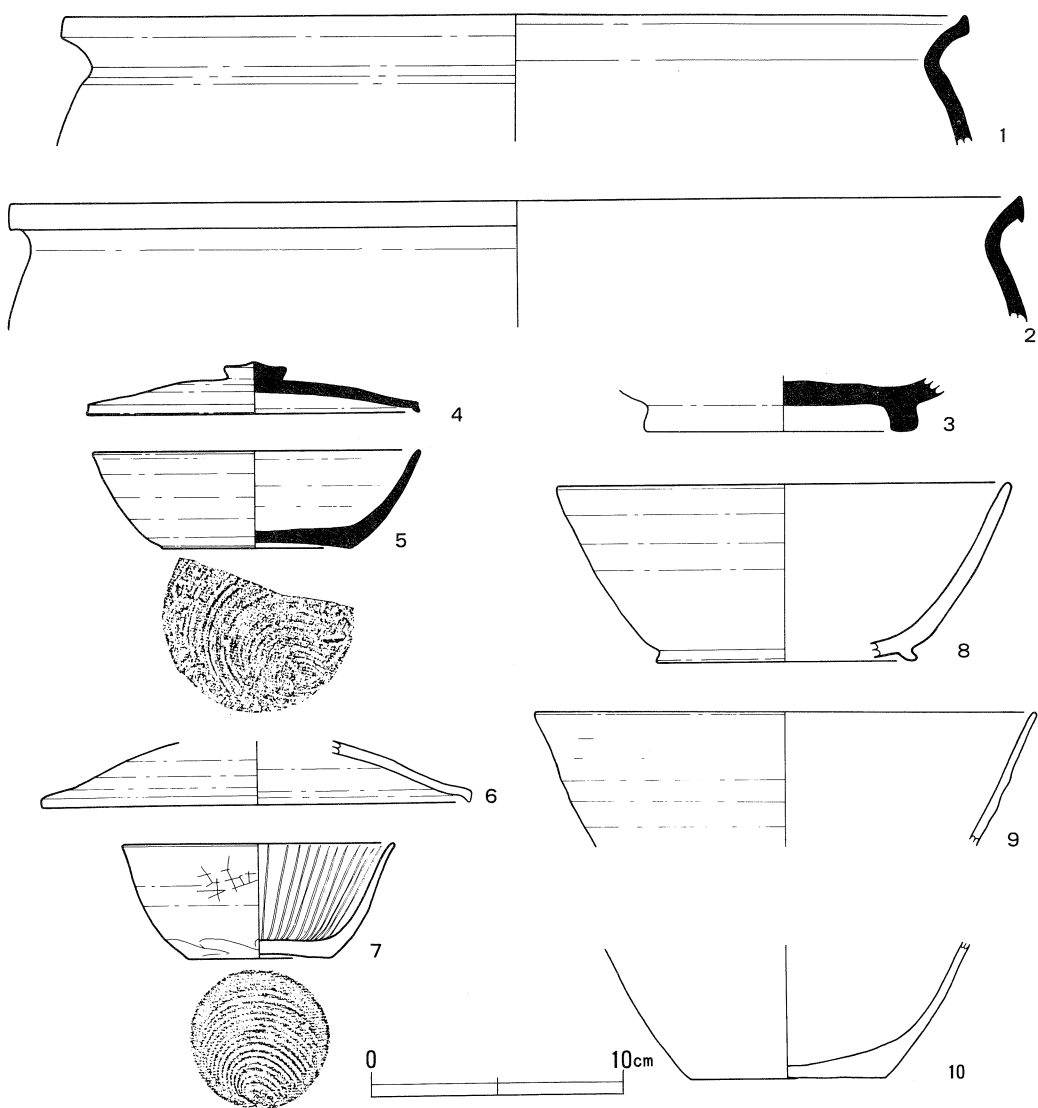
遺物の出土は少ないが、須恵器蓋・坏、土師器坏は良好な一括資料となろう。

#### 出土遺物一覧

(単位：cm)

番号	種 類	器形	法 量	胎 土	色 調 (外面 内面)	整形・特徴・その他
			器高・口径・底径			
1	須恵器	甕	—, 30.1, —	白色粒子を含む	白灰色	口縁部横撫で 破片
2	須恵器	甕	—, 39.8, —	砂粒を含む	黄白褐色	破片
3	須恵器	甕	—, —, 10.7	黒色粒子を含む	淡灰色 黄白褐色	付高台 破片
4	須恵器	蓋	2.0, 13.2, —	砂粒を含む	灰色	外面上半回転ヘラ削り 1/3欠損
5	須恵器	坏	3.9, 13.0, 7.5	砂粒を含む	灰白色	底部回転糸切り ロクロ水挽き 1/2欠損

番号	種類	器形	法 量		胎 土	色 調 (外面 内面)	整形・特徴・その他
			器高・口径・底径				
6	土師器	蓋	—, 16.0, —		精製 赤色粒子を 含む	淡赤褐色	破片
7	土師器	坏	4.6, 10.8, 5.7		砂粒を含む	淡赤褐色	底部回転糸切り後、外周及び体部 下端へら削り 内面暗文 体部外面線刻あり 1/3欠損
8	土師器	坏	7.0, 18.0, 10.4		砂粒を含む	赤褐色	磨滅により器面はザラつく 付高台 ロクロ整形か? 破片
9	土師器	坏	—, 19.9, —		砂粒を含む	淡赤褐色	ロクロ水挽き痕あり 磨滅により器面ザラつく 破片 内面に暗文がかすかにみられる
10	土師器	甕	—, —, 7.7		粗い砂粒を 含む	赤褐色 (一部黒い) 黒褐色	磨滅により器面はザラつく 外面はへら削り 内面はロクロ整形痕か? 破片

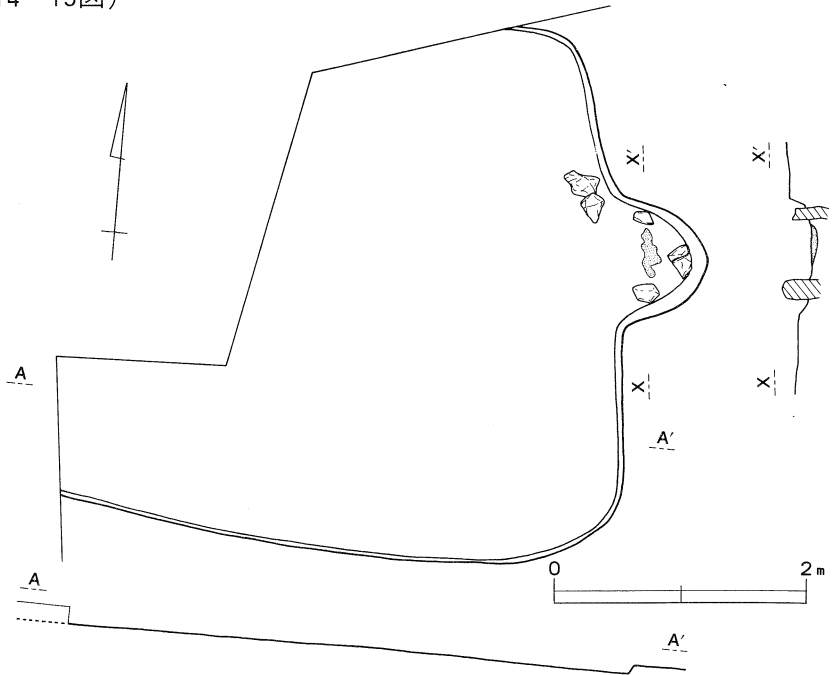


第13図 1号住居址出土遺物 (1/3)

〈2号住居址〉 (第14・15図)

〔遺構〕

調査区北辺西端に位置する。暗黄褐色土中に褐色土の落ち込みを発見し、発掘する。北西側は区域外で未調査。削平の著しい竪穴で、壁高は10cmに満たない。平面形は、隅円長方形と思われるが定かではない。規模は、東壁で南北約4.2mを測る。床面は、略平坦であるが堅い面は



第14図 2号住居址 (1/60)

明瞭ではなく、溝状遺構により若干の攪乱を受けている。カマドは、東壁中央に石組により構築されていたと思われるが、削平等により遺存状態は悪く、焼土と袖に使用された石が検出された。柱穴・周溝はない。

〔遺物〕

削平・攪乱等により、浅い竪穴となっており、遺物の出土は少なく、しかも破片が主となっている。

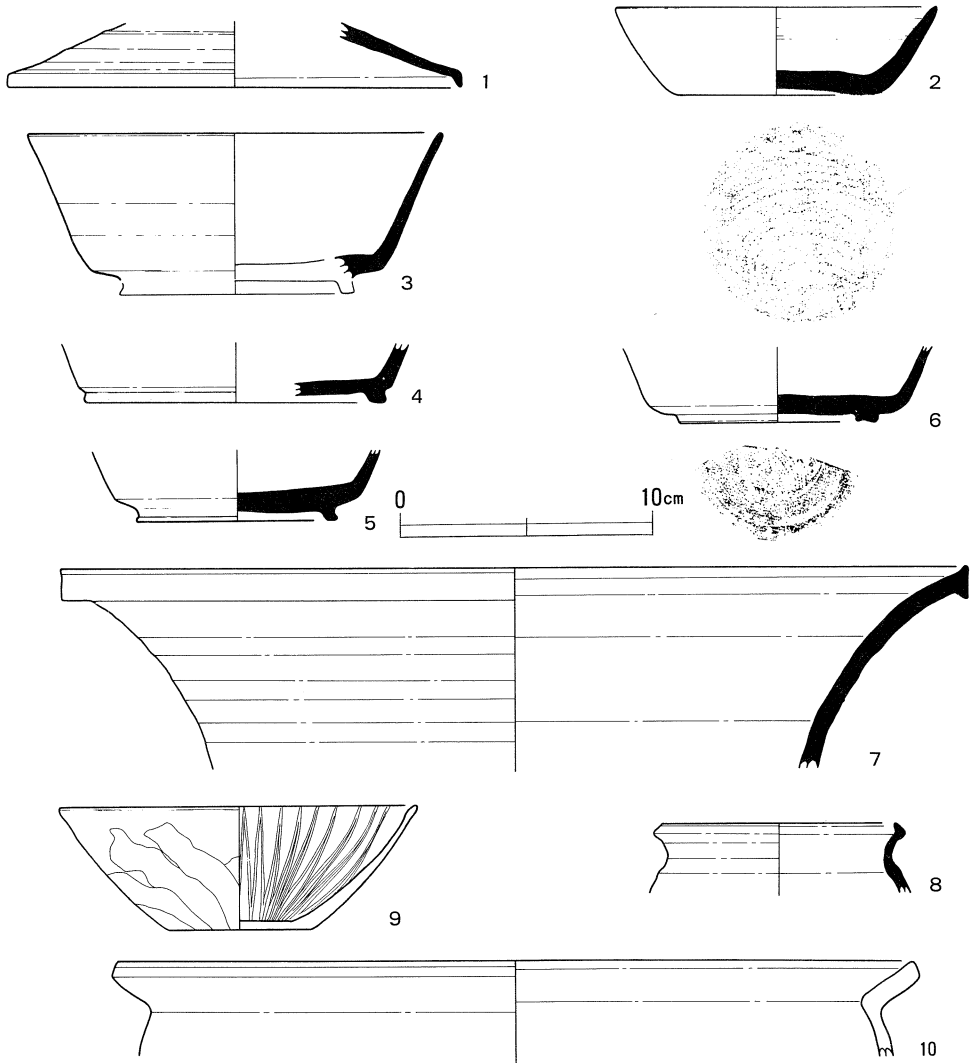
出土遺物一覧

(単位: cm)

番号	種類	器形	法量			胎土	色調 (外面 内面)	整形・特徴・その他
			器高	口径	底径			
1	須恵器	蓋	-	18.0	-	白色粒子を含む	青灰色	外面上部にへら削り痕あり 破片
2	須恵器	坏	3.6	12.7	7.0	白色粒子 赤褐色粒子を含む	灰白色	磨滅によりザラつく 底部回転糸切り離し後外周へら削りか? 体部下半~底部は赤灰褐色を呈する。 口縁部若干欠損
3	須恵器	坏	-	16.3	-	精製	青灰色	破片
4	須恵器	坏	-	-	11.9	砂粒を含む	暗灰色 茶灰色	付高台 破片
5	須恵器	坏	-	-	7.9	白色粒子を含む	淡灰色	破片
6	須恵器	坏	-	-	7.8	白色粒子を含む	青白灰色	底部糸切り痕あり 付高台 破片



番号	種類	器形	法 量			胎 土	色 調 (外面 内面)	整形・特徴・その他
			器高	口径	底径			
7	須恵器	甕	—	36.0	—	砂粒を含む	暗青灰色	内側に自然釉 破片
8	須恵器	甕	—	9.2	—	微砂粒を含む	淡 灰 色	小破片
9	土師器	坏	4.9	14.2	5.7	微 砂 粒 赤 褐 色 粒 を 含む	褪赤褐色	外面 体部～底部へラ削り 内面 花卉状暗文 2/3欠損
10	土師器	甕	—	31.6	—	砂粒を含む	赤 褐 色	磨滅により器面はザラつく 刷毛目痕かすかにあり 破片

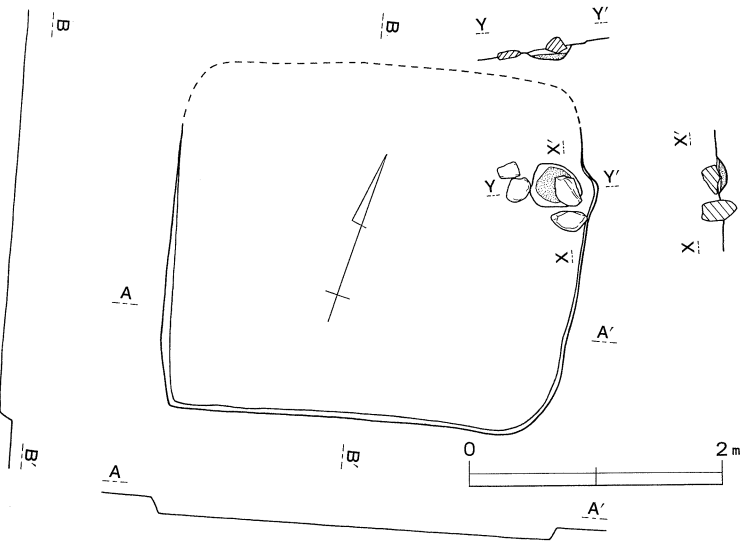


第15図 2号住居址出土遺物 (1/3)

〈3号住居址〉 (第16・17図)

〔遺 構〕

調査区北辺西側、2号住居址の東に位置する。排土作業に際し、カマドを構築する石が露呈し、住居址と判断、掘り下げる。削平により浅い竪穴となっており、北壁は遺存していない。壁高は10cm前後を測る。床面は平坦。柱穴・周溝はない。規模は、南壁で東西約3mを測り、平面形は隅円



第16図 3号住居址 (1/60)

る。カマドは、東壁北よりに袖部に石を用い構築されるが、破壊が著しい。

〔遺物〕

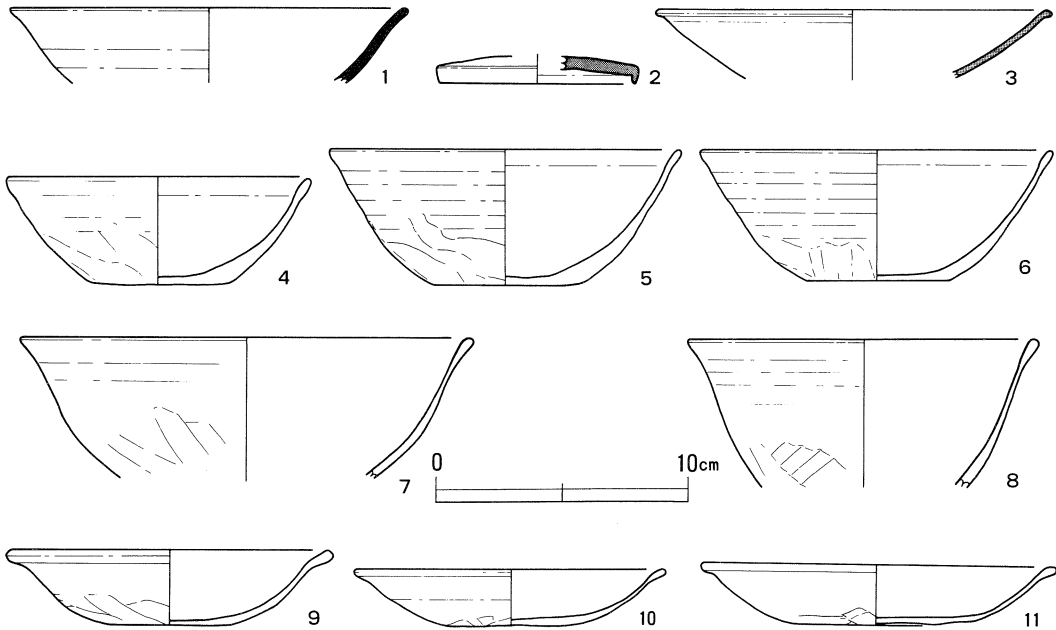
浅い竪穴であり、遺物の出土も比較的少ないが、坏類を主体に良好な資料が得られた。破片ではあるが、須恵器坏と灰釉陶器蓋・皿が共伴している。

出土遺物一覧

(単位：cm)

番号	種類	器形	法 量		胎 土	色 調 (外面 内面)	整形・特徴・その他
			器高・口径・底径				
1	須恵器	坏	—	15.7, —	白色粒子を含む	青白灰色	破片
2	灰釉陶器	蓋	—	7.8, —	白色粒子砂粒を含む		破片
3	灰釉陶器	皿	—	15.6, —	精製		破片
4	土師器	坏	4.3, 12.0,	5.4	砂粒を含む	白褐色系	体部下半・底部へラ削り 磨滅により器面はザラつく 1/3欠損
5	土師器	坏	5.4, 13.9,	5.5	白色粒子砂粒を含む	黒色 褪赤褐色	体部下半～底部へラ削り 磨滅により器面はザラつく 1/2欠損
6	土師器	坏	5.2, 14.0,	5.6	白色粒子砂粒を含む	黒色 褪赤褐色	体部下端へラ削り 底部は回転糸切り後、へラ削り 磨滅により器面はザラつく 2/3欠損
7	土師器	坏	—	17.9, —	赤色粒子砂粒を含む	赤褐色	体部下半へラ削り 破片
8	土師器	坏	—	13.8, —	赤色粒子砂粒を含む	赤褐色	体部下半へラ削り 破片
9	土師器	皿	3.0, 12.8,	4.8	赤色粒子砂粒を含む	白褐色系	体部下半～底部へラ削り 破片

番号	種類	器形	法 量	胎 土	色 (外面 内面)	整形・特徴・その他
			器高・口径・底径			
10	土師器	皿	2.3, 12.3, 5.0	赤色粒子 砂粒を含む	赤 褐 色	体部下端～底部へラ削り 2/3欠損
11	土師器	皿	2.4, 14.0, 7.0	赤色粒子 砂粒を含む	赤 褐 色	体部下半～底部へラ削り 2/3欠損



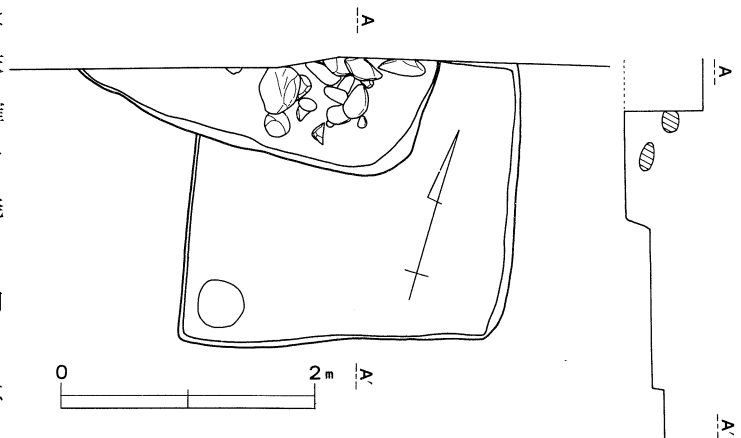
第17図 3号住居址出土遺物 (1/3)

#### <4号住居址> (第18図)

##### 〔遺構・遺物〕

調査区北端に位置する。暗黄褐色土中に、褐色の染みを発見し、約2m四方の試掘グリッドを設定し掘り下げた所、10cm位の深さで北側に暗褐色土の落ち込みを確認した。さらに、この落ち込みを掘り下げ、床面が検出されたので住居址とした。北側の大部分は調査区域外であり、完掘できなかった。平面形は隅円方形であろうか。発掘部の床面は略平坦で、周溝・柱穴等は確認されない。規模は不明。カマドは東壁に構築されたと思われ、発掘部から石が出、余分な石を取り除いた所、焼土があり袖部に使用されたように石が並んでいた。

遺物の出土は少なく、須恵器坏などは、底部に糸切り痕がある。



第18図 4号住居址 (1/60)

〈5号住居址〉 (第19・20・21図)

〔遺構〕

調査区北辺中央付近に位置する。暗黄褐色土中に暗褐色土の落ち込みを発見し、発掘する。規模は、東西約3.5m、南北約2.9mを測り、平面形は隅円長方形を呈する。壁高は25cm前後を測る。床面は平坦。柱穴・周溝はない。カマドそのものはないが、床面北東側に焼土が検出された。

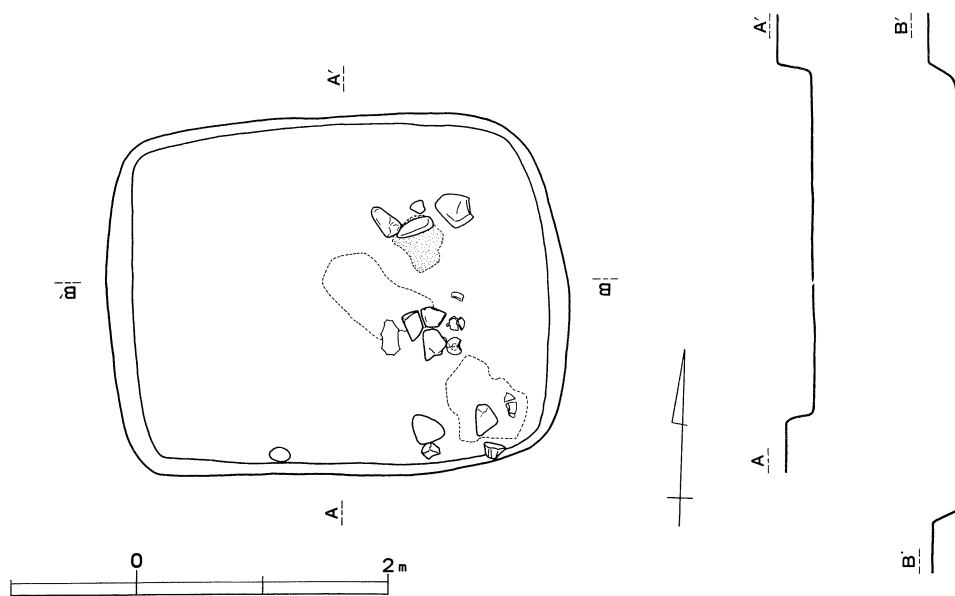
〔遺物〕

床面南東側、略床面直上から坏類の出土が目立った。

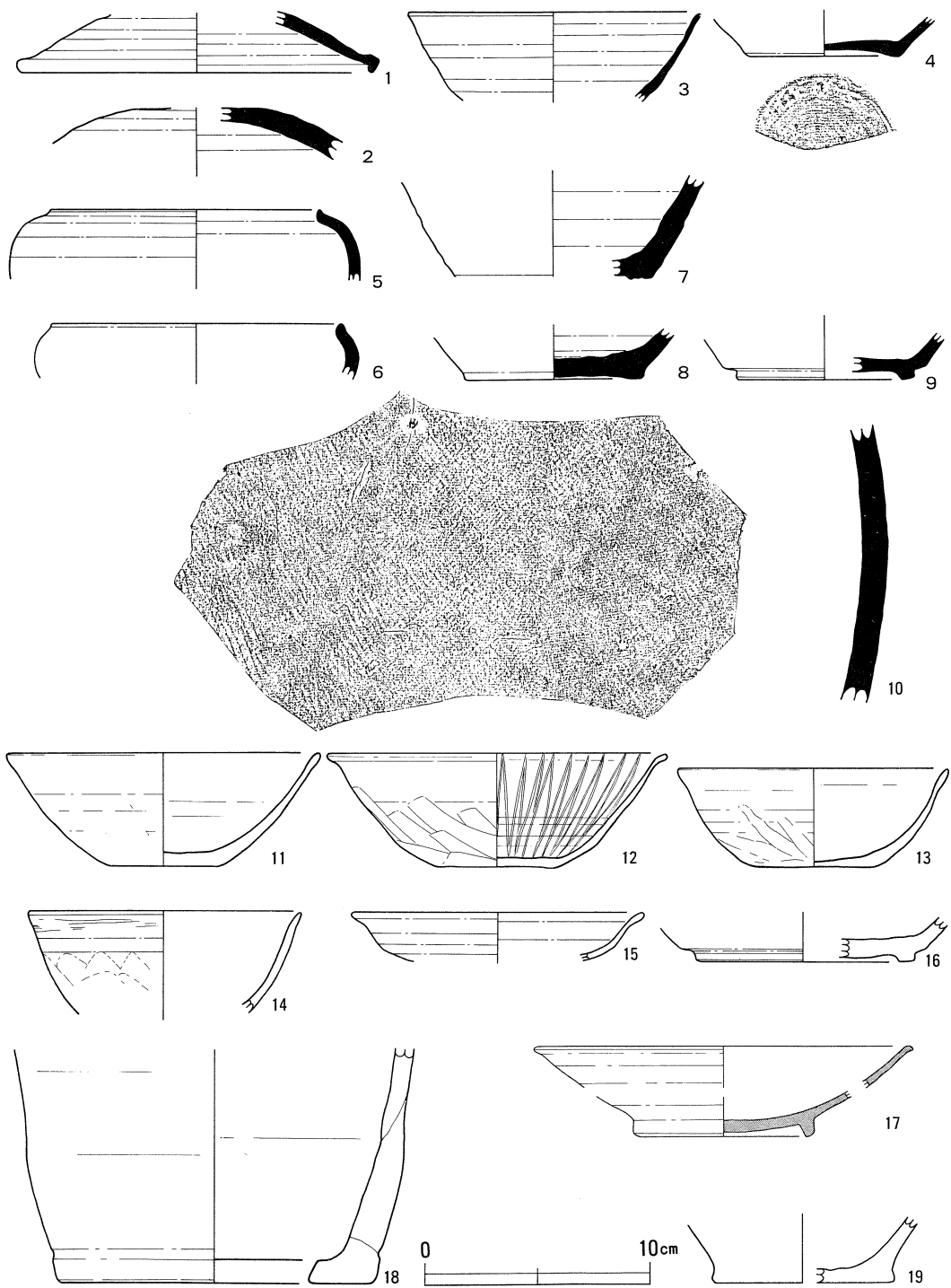
出土遺物一覧

(単位：cm)

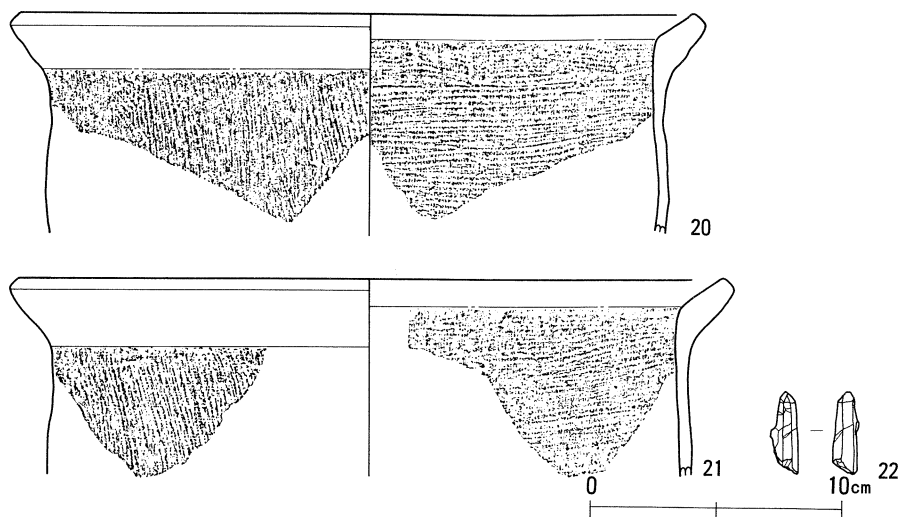
番号	種類	器形	法量		胎土	色調 (外面 内面)	整形・特徴・その他
			器高	口径・底径			
1	須恵器	蓋	—	15.5, —	白色粒子を含む	赤灰色 青灰色	破片
2	須恵器	蓋	—	—, —	砂粒を含む	灰青色 青灰色	破片
3	須恵器	坏	—	12.9, —	砂粒を含む	淡灰色	口縁部破片
4	須恵器	坏	—	—, 6.7	細かい粒子を含む	灰色	底部回転糸切り 破片
5	須恵器	鉢	—	11.9, —	白色粒子を含む	暗灰色	破片
6	須恵器	鉢	—	12.8, —	粗い白色粒子を含む	暗灰色	破片
7	須恵器	甕	—	—, 8.6	粗い砂粒を含む	黒灰色 灰色	外面胴部下半に自然釉 付高台部欠損 破片



第19図 5号住居址 (1/60)



第20图 5号住居址出土遺物 (1/3)



第21図 5号住居址出土遺物 (1/3)

番号	種類	器形	法 量		胎 土	色 調 (外面 内面)	整形・特徴・その他
			器高・口径・底径				
8	須恵器	甕	—, —, 7.8		粗い白色粒子を含む	灰 色 淡 灰 色	破片
9	須恵器	坏	—, —, 7.8		白色粒子を含む	暗 褐 色	焼成があまく、赤味がある 付高台 破片
10	須恵器	甕	—, —, —		白色粒子 砂粒を含む	赤 褐 色 青 灰 色	外面 叩目 内面 へら撫で 破片
11	土師器	坏	5.0, 13.8, 4.9		白色粒子を含む	黄 褐 色 黒 色	磨滅により器面はザラつき、整形 が不明であるが、体部下～底 部はへら削りか？ 1/3欠損
12	土師器	坏	5.0, 15.0, 5.1		砂粒を含む	黄 褐 色 黒 色	外面 体部下～底部へら削り 内面 花卉状暗文 1/2欠損
13	土師器	坏	4.4, 12.0, 5.0		砂粒を含む	褐 色	磨滅により器面はザラつく 外面体部下～底部へら削り 1/3欠損
14	土師器	坏	—, 12.0, —		赤色粒子を含む	明 褐 色	外面体部下～底部へら削り 破片
15	土師器	皿	—, 12.9, —		砂粒を含む	明 褐 色	体部下～底部へら削り 破片
16	土師器	坏	—, —, 9.5		精 製	褪赤褐色	付高台？ 破片
17	灰 釉 陶 器	皿	4.0, 16.7, 8.0		精 製	灰 白 色	破片
18	土師器	甗	—, —, 13.5		粗い砂粒を含む	褪 褐 色	破片
19	土師器	甕	—, —, 7.7		金雲母、 砂粒を含む	茶 褐 色	内面 横ハケ整形 破片

番号	種類	器形	法 量	胎 土	色 調 (外面 内面)	整形・特徴・その他
			器高・口径・底径			
20	土師器	甕	—, 26.7, —	金雲母、 やや粗い砂 粒を含む	暗茶褐色	外面 縦ハケ整形 内面 横ハケ整形 破片
21	土師器	甕	—, 28.0, —	金雲母、 砂粒を含む	暗茶褐色	外面 縦ハケ整形 内面 横ハケ整形 破片
22	水 晶					

〈6号住居址〉 (第22・23図)

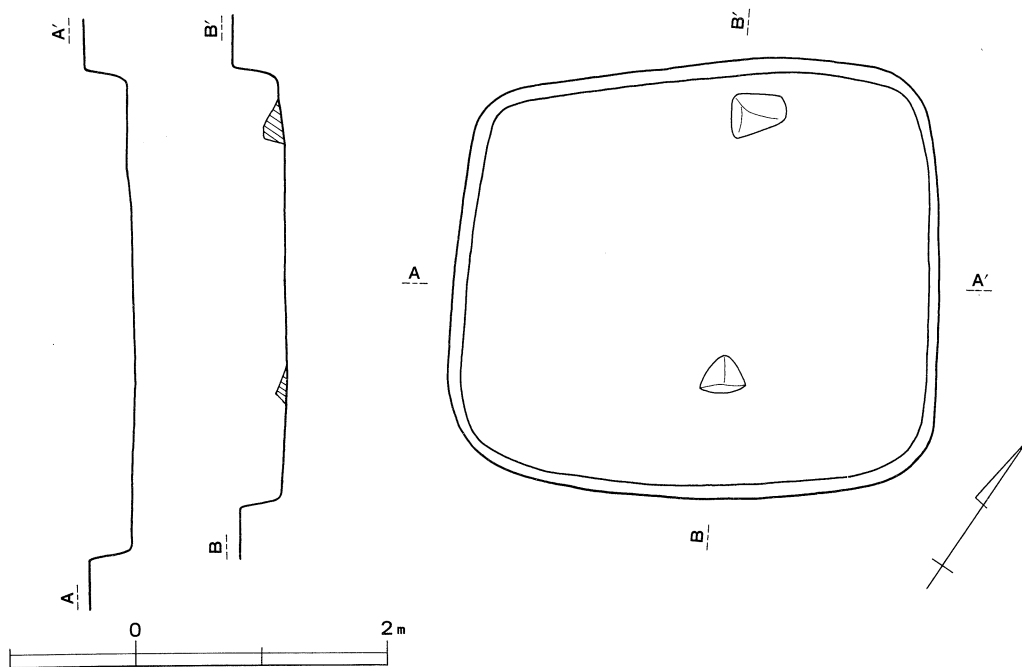
〔遺 構〕

調査区北半部南西側に位置する。暗黄褐色土中に暗褐色土の落ち込みを発見し、発掘する。規模は、東西約3.8m、南北約3.5mを測り、平面形は不整の隅円長方形を呈する。壁は比較的直に立ち上がり、壁高は35cm前後を測る。床面は暗褐色土で、堅く平坦であったが、小石が目立った。柱穴・周溝は検出されなかった。本竪穴は、隣りの水没住居址と同様、掘り下げていくにつれて土層中に水分を多く含み、床面を検出した段階で、その床から水が湧いてきた。炉址は明瞭でなかった。

〔遺 物〕

住居址中央部に、床面より若干浮上して甕形土器4が出土したが、他は破片ばかりであった。  
壺形土器

1. 口縁部破片。色調は白灰褐色を呈する。胎土には雲母小粒・小砂粒を含む。器面は、撫で乃至磨きにより仕上げられる。



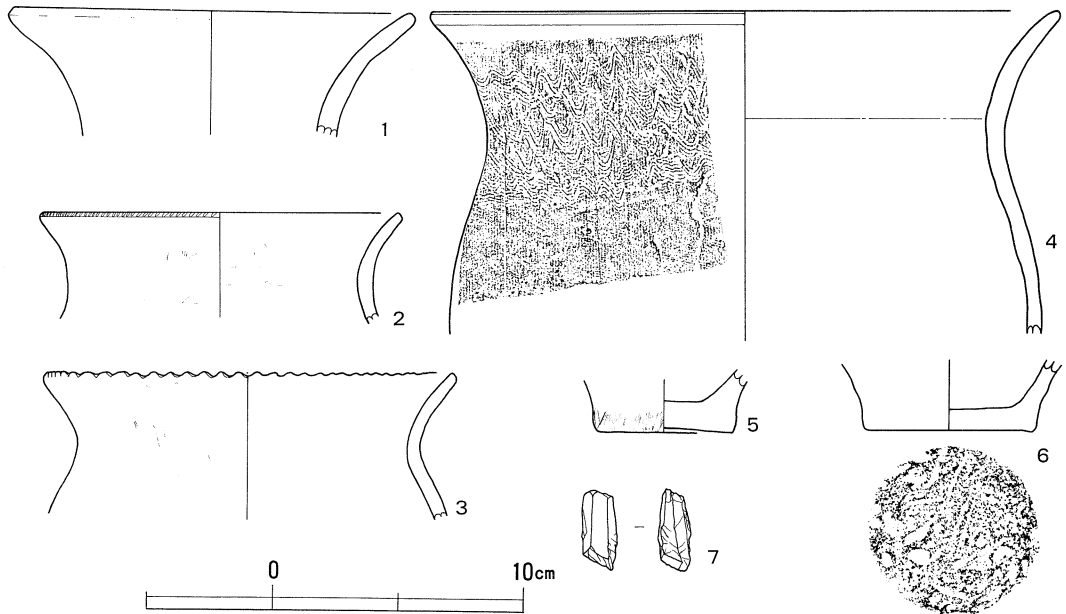
第22図 6号住居址 (1/60)

甕形土器

2. 口縁部破片。色調は暗褐色を呈する。胎土には金色小粒・砂粒を含む。口縁部は横撫でされ、刻目が連続する。内外面に刷毛状工具による整形痕が認められる。
3. 口縁部～頸部破片。色調は白褐色を呈する。胎土には雲母小粒・小砂粒を含む。磨滅により器面はザラつく。口縁部に刻目が連続する。外面頸部に刷毛目痕がみられる。
4. 口縁部～胴部上半の破片。色調は白黄褐色を呈する。胎土には小砂粒、赤色小粒を含む。口縁部は横撫で。内外面とも横位の細かい刷毛目がみられる。外面口縁部～頸部にかけて、櫛描波状文が施される。
5. 底部破片。色調は、内面赤褐色、外面暗褐色を呈する。胎土には砂粒を含む。外面に刷毛目痕あり。
6. 底部破片。色調は、内面黒色、外面白黄褐色を呈する。胎土には白色小砂粒を含む。内面は撫で整形。底部には何らかの圧痕がある。

石

7. 水晶



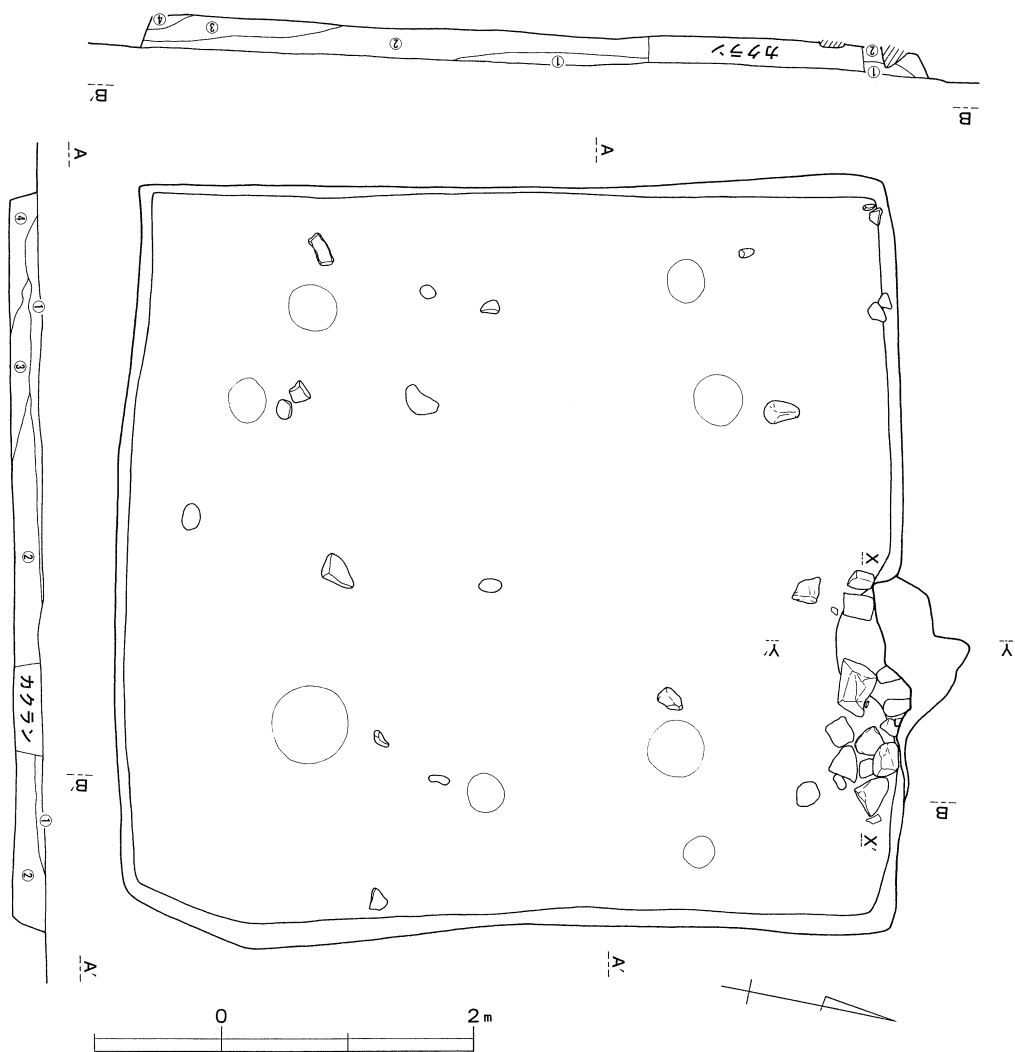
第23図 6号住居址出土遺物 (1/3)

<7号住居址> (第24・25・26図)

〔遺構〕

調査区北半部中央に位置する。暗褐色土中に暗褐色土の落ち込みを発見し、東西・南北に、十字に土層観察用土手を残し掘り下げた。堆積状況は、床面上から、端に鉄分を多く沈着する暗褐色土⑤・砂質黒褐色土層④・鉄分を含む黒褐色土③・黒褐色土②・暗褐色土①の順であった。規模は、一辺約6mを測り、平面形は正方形を呈する。壁は外傾し、高さ25cm前後を測る。床





第24図 7号住居址 (1/60)

面は暗褐色で、平坦。本址は6号住居址と同様に、床面から水が湧出する傾向があり、柱穴等の穴を何ヶ所か検出したが、掘下げを断念した。周溝はない。カマドは北壁に構築される。規模は長さ約 1.6m、幅約 1.3mで、石を用い築かれる。燃烧部は明瞭でなく、焼土と褐色土の混合した土層が検出された。

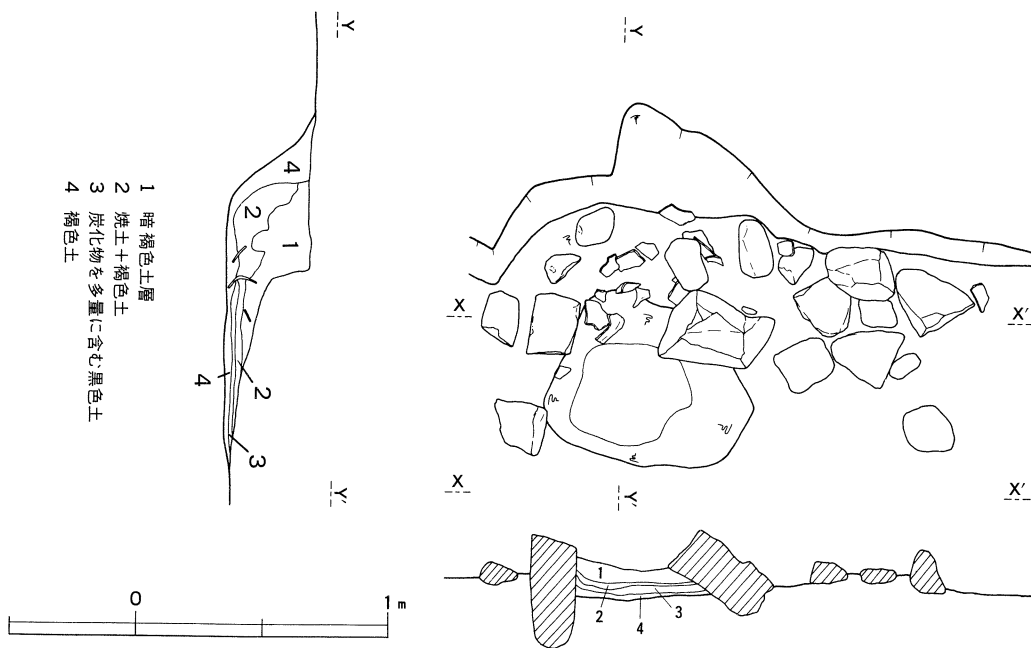
〔遺物〕

大型の住居址ではあるが、遺物の出土は極少量で、しかも破片ばかりで本住居址にともなうものか疑問が残る。ただし、11の甕はカマド内から出土している。

出土遺物一覧

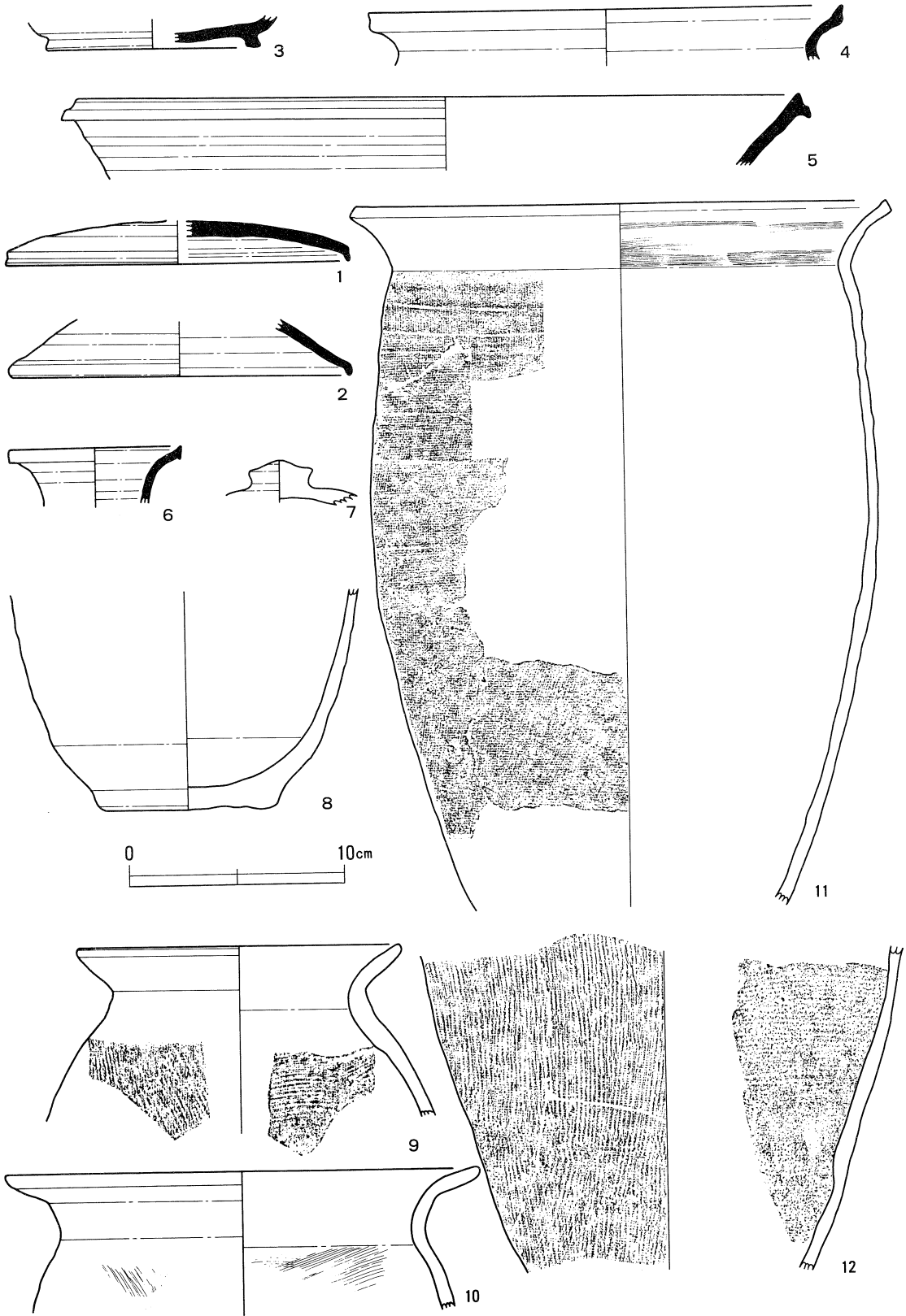
(単位：cm)

番号	種類	器形	法量	胎土	色調 (外面 内面)	整形・特徴・その他
			器高・口径・底径			
1	須恵器	蓋	—, 15.9, —	白色粒子を含む	暗灰色	上部回転ヘラ削り 破片



第25図 7号住居址カマド (1/30)

番号	種類	器形	法量		胎土	色調 (外面 内面)	整形・特徴・その他
			器高・口径・底径				
2	須恵器	蓋	—, 15.8, —	白色粒子を含む	灰色	破片	
3	須恵器	坏	—, —, 10.0	白色粒子を含む	青灰色	付高台 破片	
4	須恵器	甕	—, 22.1, —	粗い砂粒を含む	白灰色	口縁部横撫で 破片	
5	須恵器	甕	—, 33.3, —	白色粒子を含む	暗灰色 灰色	口縁部破片	
6	須恵器	壺	—, 8.0, —	精製	暗灰褐色 緑灰色	口縁部破片	
7	土師器	蓋	2.1, —, —	赤色粒子を含む	明橙褐色	破片	
8	土師器	甕	—, —, 7.8	金雲母 粗い砂粒を含む	茶褐色 赤褐色	外面 へら削り 内面 粗いへら磨き 胴部下端～底部破片	
9	土師器	甕	—, 14.8, —	赤色粒子 砂粒を含む	赤褐色	口縁部横撫で 外面 縦ハケ目整形 内面 横ハケ目整形 破片	
10	土師器	甕	—, 21.9, —	赤色粒子を含む	淡黄褐色	外面 ハケ目整形 内面 横ハケ目整形 口縁部横撫で 破片	
11	土師器	甕	—, 24.6, —	赤色粒子 砂粒を含む	茶褐色	外面 縦ハケ目整形 内面 横撫で 口縁部 横撫で、刷毛目痕あり 口縁部～胴部破片 ロゴ整形のような 茶痕がある	
12	土師器	甕	—, —, —	赤褐色粒子 粗い砂粒を 多量に含む	白黄褐色 肌色系	外面 縦ハケ目 内面 横ハケ目 胴部破片	



第26图 7号住居址出土遺物 (1/3)

〈幻の 8 号住居址〉（第27図）

〔遺 構〕

調査区北半部 7 号住居址の南東に、暗黄褐色土中に暗褐色の染みを発見し、8 号住居址として東西・南北の十字に土層観察用土手を残し掘り下げを行った。しかし、床面等は検出されず遺構として認めることが出来なくなったので、幻の 8 号住居址となった。

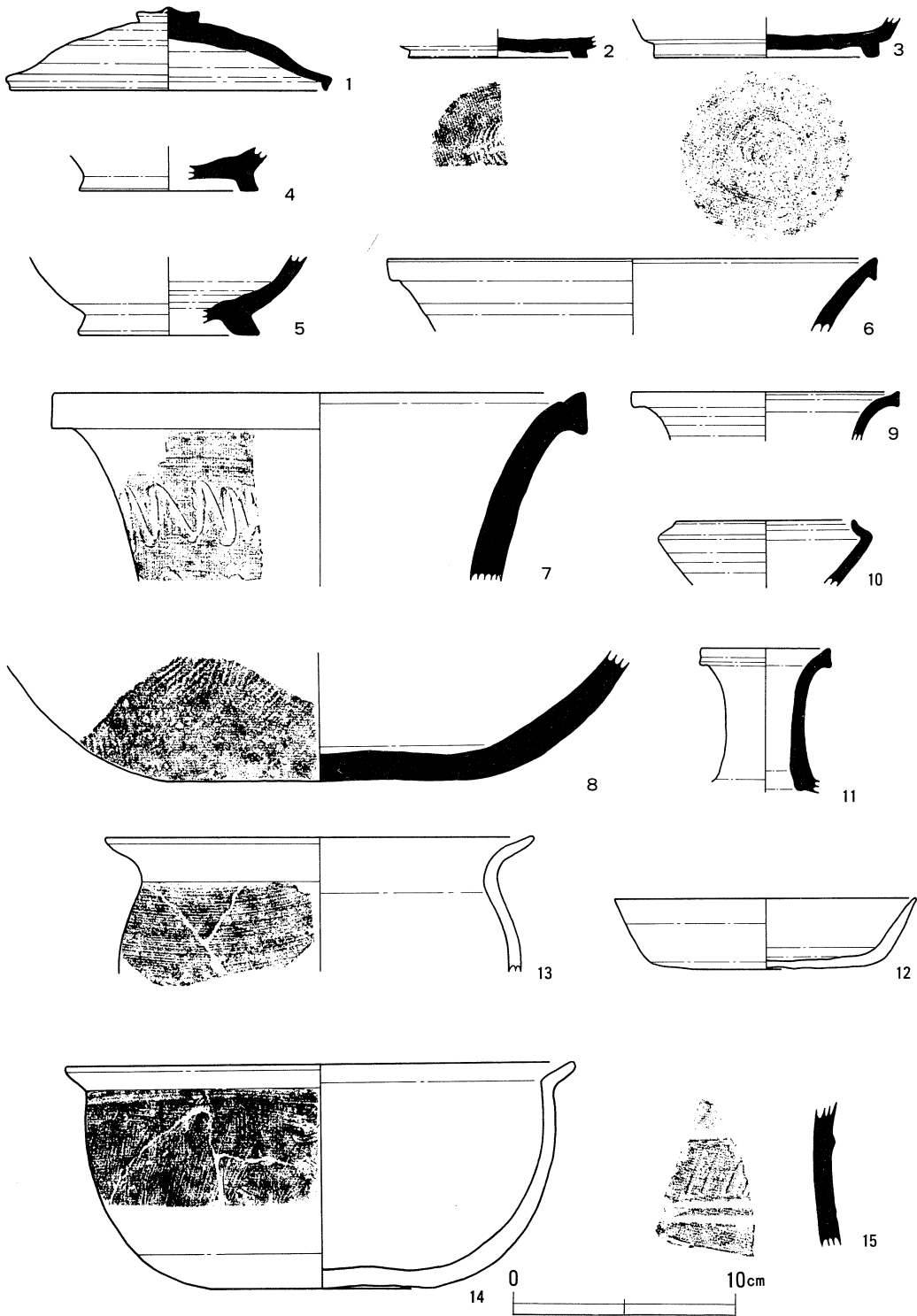
〔遺 物〕

竪穴式住居址ではなかったが、暗褐色土中より土器等が出土したので、何点かを図化し資料として掲げておこう。

出土遺物一覧

(単位：cm)

番号	種 類	器形	法 量	胎 土	色 調 (外面 内面)	整形・特徴・その他
			器高・口径・底径			
1	須恵器	蓋	3.7, 14.2, —	白色粒子を含む	淡 灰 色	上部回転ヘラ削り 1/2欠損
2	須恵器	坏	—, —, 8.0	白色粒子を含む	白 灰 色	底部回転糸切り痕あり 破片
3	須恵器	坏	—, —, 10.0	やや粗い 白色粒子を含む	明 灰 色	底部回転ヘラ削り 破片
4	須恵器	甕	—, —, 8.0	砂粒を含む	緑 灰 色 白 灰 色	内面 自然釉 底部破片
5	須恵器	壺	—, —, 8.0	砂粒を含む	暗 灰 色 淡 灰 色	外内面 自然釉 底部破片
6	須恵器	甕	—, 22.0, —	やや粗い 砂粒を含む	灰 赤 色 緑 灰 色	内面 自然釉 破片
7	須恵器	甕	—, 23.7, —	砂粒を含む	青 灰 色	外面 波状文あり 破片
8	須恵器	甕	—, —, 13.6	赤褐色 白色粒子を含む	灰 色	叩目整形 底部破片
9	須恵器	壺	—, 11.9, —	細い砂粒を含む	緑 灰 色	自然釉 破片
10	須恵器	鉢	—, 8.0, —	砂粒を含む	青 灰 色	破片
11	須恵器	壺	—, 5.7, —	砂粒を含む	緑 灰 色	自然釉 破片
12	土師器	坏	3.2, 13.5, 9.0	赤褐色粒子を含む	白黄褐色	底部ヘラ削り 口縁部横撫で 1/2欠損
13	土師器	甕	—, 19.1, —	砂粒を含む	灰 褐 色 茶 褐 色	外面・口縁部内側横ハケ整形 ロクロ整形甕か? 破片
14	土師器	鉢	10.0, 22.8, 10.0	白色粒子を含む	黄 褐 色	口縁部横撫で ハケ目痕あり 1/3欠損
15	須恵器	甕	—, —, —	精 製	灰 色	ハケ状工具による刺突あり 破片



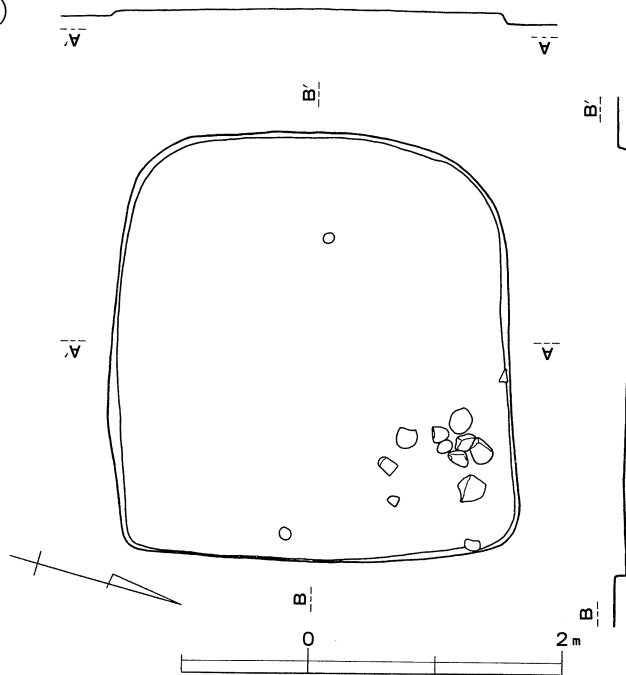
第27図 幻の8号住居址出土遺物 (1/3)

〈9号住居址〉（第28・29図）

〔遺構〕

調査区北半部東側に位置する。規模は、一辺約3.2mで、平面形は不整の隅円方形を呈する。削平等によるものか、浅い竖穴となっており、壁高は低い所で約5cm、高い所で約10cmを測るのみであった。床面は略平坦。柱穴・周溝はない。カマドはない。

なお、本址北西辺から南へ向って床面直上には、礫及び砂利層が形成されていたので、住居廃絶後に、水の流路が走ったと思われる。



第28図 9号住居址 (1/60)

〔遺物〕

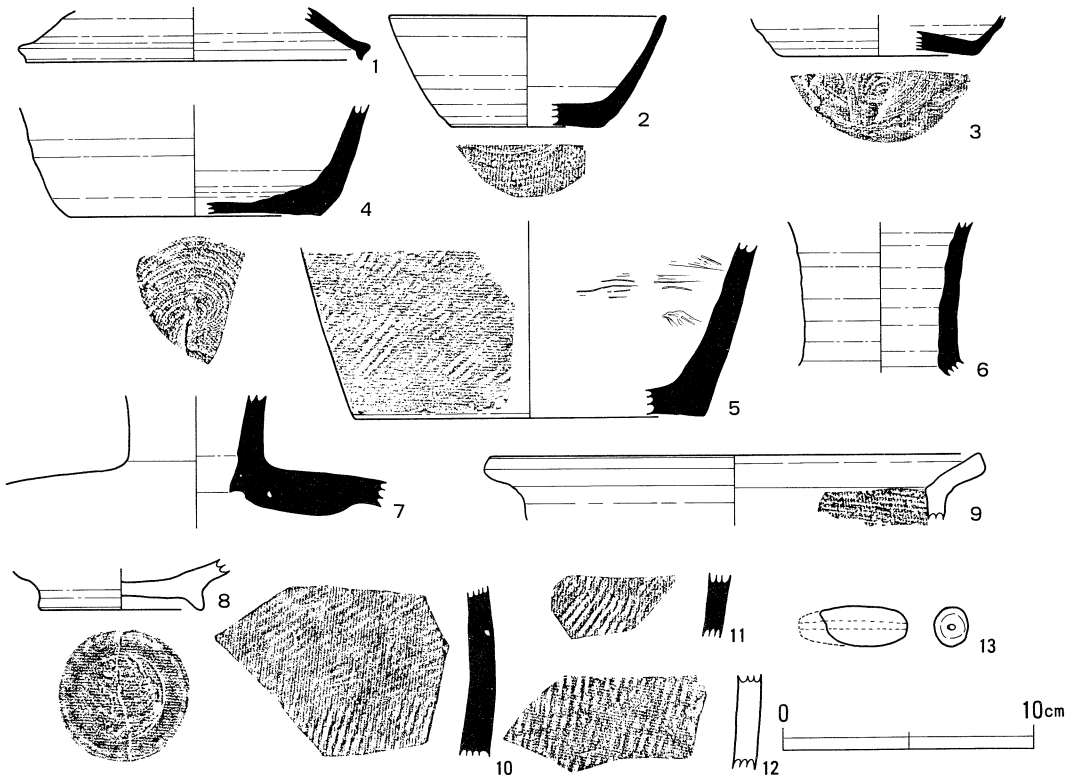
遺物の出土は少なく、土器片が多かった。

出土遺物一覧

(単位：cm)

番号	種類	器形	法量		胎土	色調 (外面 内面)	整形・特徴・その他
			器高・口径・底径				
1	須恵器	蓋	—, 13.3, —		砂粒を含む	明灰色	破片
2	須恵器	坏	4.4, 11.0, 6.0		微砂粒を含む	白灰色	底部回転糸切り 1/3欠損
3	須恵器	坏	—, —, 7.8		白色粒子 砂粒を含む	灰色	底部回転糸切り 破片
4	須恵器	壺	—, —, 10.0		微砂粒を含む	青灰色 白灰色	底部回転糸切り 破片
5	須恵器	甕	—, —, 13.9		白色粒子を 含む	青灰色	叩目 破片
6	須恵器	壺	—, —, —		精製	灰色	自然釉がかかる 破片
7	須恵器	壺	—, —, —		黒色粒子 砂粒を含む	緑灰色 灰色	外面肩部に自然釉 破片
8	土師器	坏	—, —, 6.5		砂粒を含む	黄白褐色 黒色	底部回転糸切り 付高台 底部破片
9	土師器	甕	—, 19.4, —		やや粗い 砂粒を含む	茶褐色	口縁部横撫で 破片

番号	種類	器形	法 量	胎 土	色 調 (外面 内面)	整形・特徴・その他
			器高・口径・底径			
10	須恵器	甕	—, —, —	砂粒を含む	赤 褐 色 灰 褐 色	叩目
11	須恵器	甕	—, —, —	砂粒を含む	暗 灰 色	叩目
12	土師器	甕	—, —, —	砂粒を含む	明灰褐色	叩目
13		土錘	—, —, —	砂粒を含む	褐 色	円形の穴が貫通している



第29図 9号住居址出土遺物 (1/3)

### <10号住居址> (第30図)

#### 〔遺 構〕

調査区北辺西側、溝状遺構の東に位置する。排土作業に際して、床面が検出されたので、壁の立ち上がりを捜した。規模は、東西約3.1m、南北約3.5mを測る。平面形は、胴張りの隅円長方形を呈する。削平により浅く、壁高は5cm前後を測る。床面は平坦。柱穴・周溝はない。カマドは検出されず、南側に焼土があった。

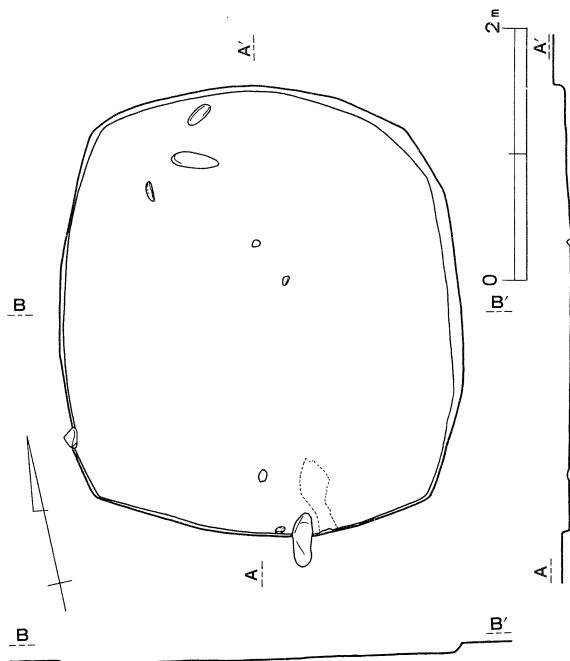
#### 〔遺 物〕

遺物の出土は極めて少なく、凶化しうるものはなかった。

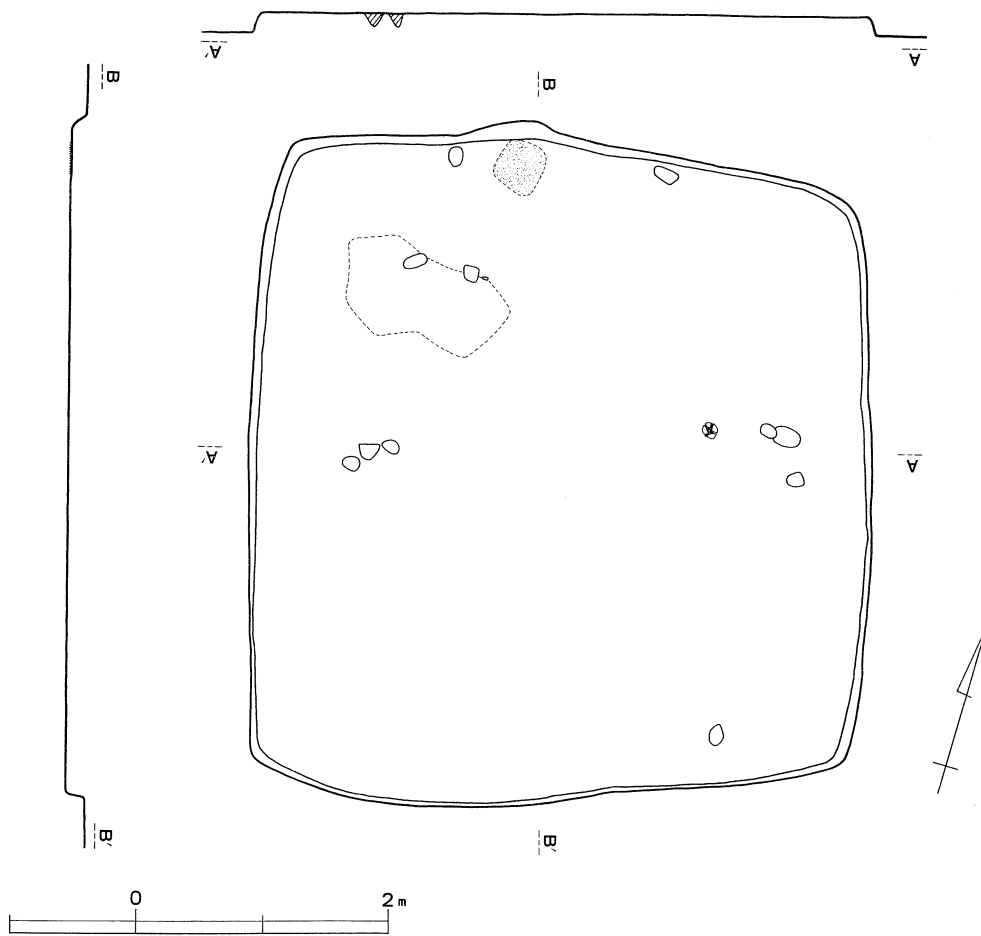
<11号住居址> (第31・32図)

〔遺構〕

調査区中央部に位置する。暗黄褐色土中に暗褐色土の落ち込みを発見し発掘する。規模は、一辺約5m前後を測る。平面形は不整の方形を呈する。壁はやや外傾し、高さ15cm前後を測る。床面は暗褐色土で、平坦。柱穴・周溝はない。カマドは北壁に構築されるが、破壊が著しく、燃烧部に焼土が確認されたのみであった。そこよりも南側の床



第30図 10号住居址 (1/60)



第31図 11号住居址 (1/60)



面上には焼土が散在していた。

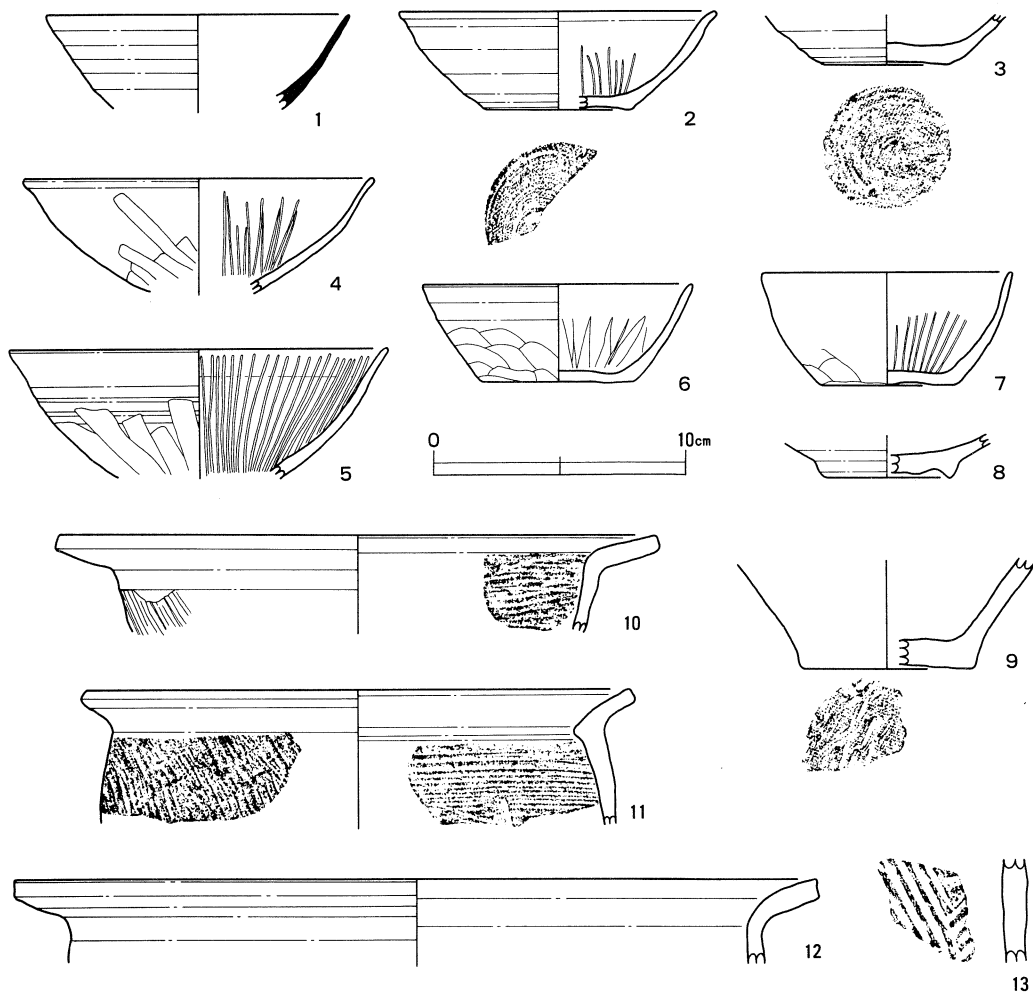
〔遺物〕

土器の破片ばかりであり、形状の推測できるものを図化した。

出土遺物一覧

(単位：cm)

番号	種類	器形	法 量		胎 土	色 (外面 内面)	整形・特徴・その他
			器高・口径・底径				
1	須恵器	坏	—, 7.0, —		白色粒子を含む	灰色	焼成不良で口縁部は赤灰色になっている 破片
2	土師器	坏	4.0, 12.5, 5.9		微砂粒を含む	黄白色 黒色	底部回転糸切り 内面 放射状暗文 2/3欠損
3	土師器	坏	—, —, 5.0		粗い砂粒を含む	赤褐色 薄茶色	底部 回転糸切り 内面 ヘラ磨き? 底部破片
4	土師器	坏	—, 13.8, —		赤色粒子を含む	黄赤褐色	外面 体部下半ヘラ削り 内面 花卉状暗文 破片



第32図 11号住居址出土遺物 (1/3)

番号	種類	器形	法 量		胎 土	色 調 (外面 内面)	整形・特徴・その他
			器高	口径・底径			
5	土師器	坏	—	15.0, —	赤色、白色 粒子を含む	白黄褐色 黒 色	外面 体部下半へら削り 内面 放射状暗文 破片
6	土師器	坏	4.0,	10.7, 6.0	赤色粒子 微砂粒を含 む	黄赤褐色 赤 褐色	外面 体部下半へら削り 内面 暗文 底部一部欠損 底部回転糸切り離し後外周へら削り
7	土師器	坏	4.6,	9.8, 5.3	赤色、白色 粒子を含む	薄 茶 色 白黄褐色	外面 体部下半へら削り 内面 放射状暗文 2/3欠損 底部回転糸切り離し後外周へら削り
8	土師器	坏	—	—, 5.0	やや粗い 砂粒を含む	茶 褐 色 暗茶褐色	底部 付高台 底部破片
9	弥 生 土 器	甕	—	—, 6.8	白色粒子 砂粒を含む	白灰褐色 白黄褐色	埋没土中より出土 弥生時代の所産である 内面は磨きかけられる 破片
10	土師器	甕	—	23.5, —	粗い金雲母 砂粒を含む	暗茶褐色	外面胴部 縦ハケ整形 内面胴部 横ハケ整形 口縁部破片
11	土師器	甕	—	21.4, —	やや粗い 金雲母 砂粒を含む	赤 褐 色	外面胴部 縦ハケ整形 内面胴部 横ハケ整形 口縁部破片
12	土師器	甕	—	31, 7, —	赤色粒子 微砂粒を含 む	明 肌 色	ロクロ整形の甕か 口縁部破片
13	縄 文 土 器		—	—, —	砂粒を含む	暗 褐 色	外面に半截竹管による沈線文が 施される。 破片

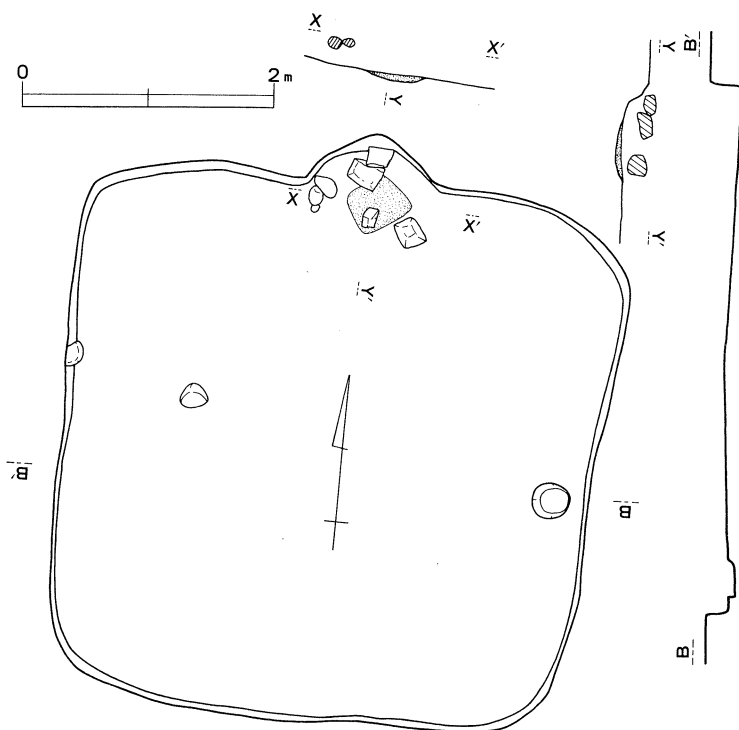
## <12号住居址> (第33・34図)

### 〔遺 構〕

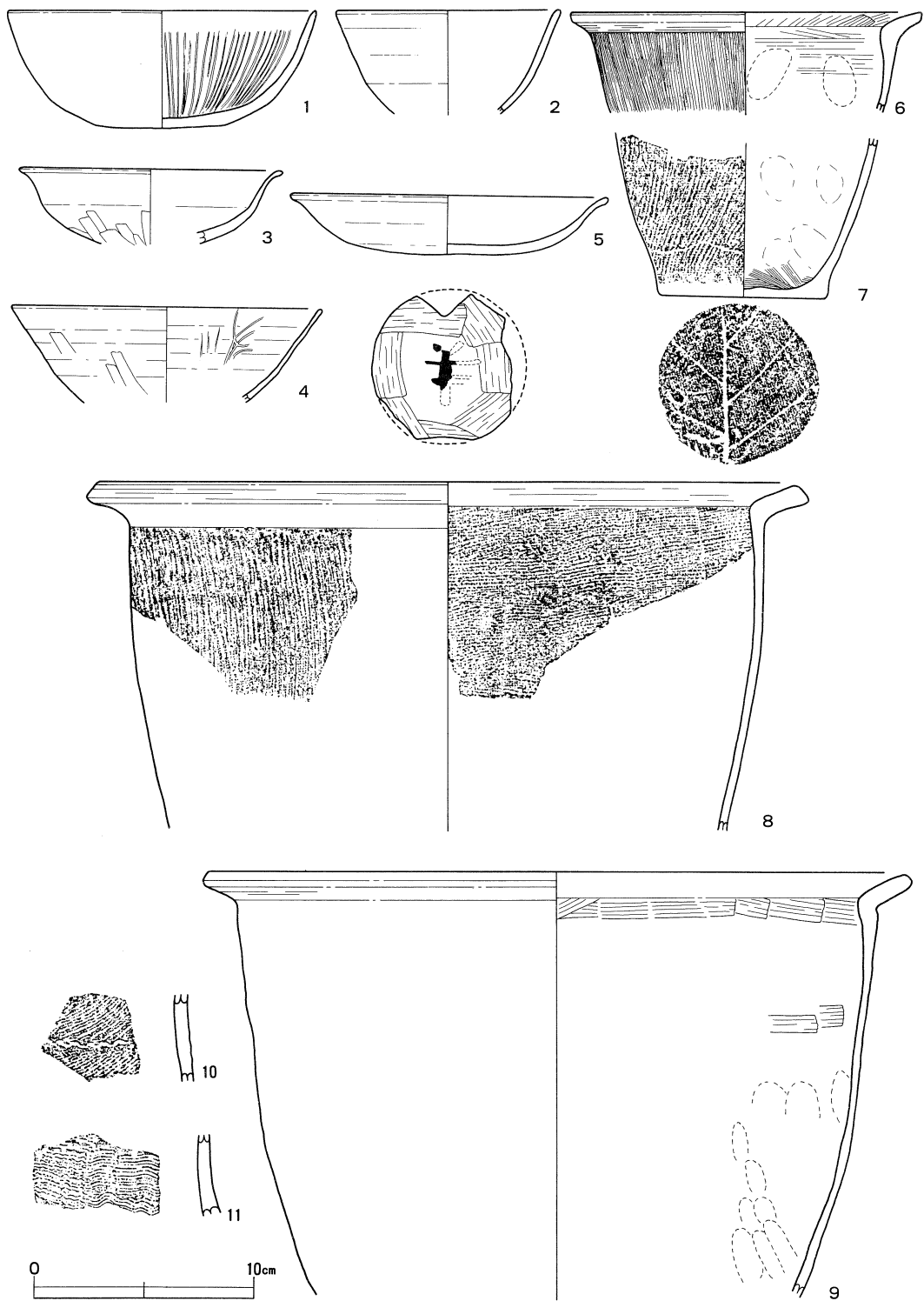
調査区中央部、11号住居址の西に位置する。暗黄褐色土中に暗褐色土の落ち込みを発見し発掘する。規模は、一辺約4.3m。平面形は隅円方形を呈する。床面は暗褐色土で、中央部がやや高い。壁は直に立ち上がり、高さ約20～25cmを測る。柱穴・周溝はないが、東壁近くに浅い小穴があった。カマドは、北壁に構築されるが、破壊が著しい。

### 〔遺 物〕

カマドを中心に甕などが出土。量は少ない。



第33図 12号住居址 (1/60)



第34图 12号住居址出土遺物 (1/3)

## 出土遺物一覧

(単位：cm)

番号	種類	器形	法 量		胎 土	色 調 (外面 内面)	整形・特徴・その他
			器高・口径・底径				
1	土師器	坏	5.4, 14.0, 6.0		砂粒を含む	薄茶色 黒色	外面横ナデ 内面放射状暗文 底部へラ削り 破片
2	土師器	坏	4.7, 10.0, —		砂粒を含む	淡橙褐色	磨滅により器面はザラつく 破片
3	土師器	坏	—, 12.0, —		砂粒を含む	淡茶褐色	外面下端へラ削り 破片
4	土師器	坏	—, 14.0, —		砂粒を含む	淡白黄褐色 内面黒	外面 体部下半へラ削り 内面 暗文あり 破片
5	土師器	皿	2.6, 14.0, 5.0		赤色 砂粒を含む	白赤褐色	外面 体部下端～底部へラ削り 底部墨書あり 2/3欠損
6	土師器	甕	—, 16.0, —		金雲母 砂粒を含む	褐色	外面 縦刷毛目 圧痕あり 内面 横刷毛目 破片
7	土師器	甕	—, —, 7.5		金雲母 砂粒を含む	褐色	外面 縦斜位刷毛目 内面は磨き・撫で 底部木葉痕 胴部上半欠損
8	土師器	甕	—, 32.0, —		金雲母 砂粒を含む	褐色	外面 縦刷毛目 内面 横刷毛目 破片
9	土師器	甕	—, 32.0, —		金雲母 砂粒を含む	暗茶褐色	内外面とも刷毛整形の後、撫で により仕上げ 口縁部～胴部破片
10	縄文器	鉢	—, —, —		砂粒を含む	明白褐色	S字結節による縄文が施文される 破片
11	弥生器	甕	—, —, —		砂粒を含む	灰褐色	外面 櫛歯状工具による波状文 内面へラ磨き

## 〈13号住居址〉 (第35・36図)

## 〔遺 構〕

調査区中央部、12号住居址の西に位置する。規模は東西約4m、南北約3.6mで、平面形は隅円長方形を呈する。壁は外傾し、高さ15cm前後を測る。床面は暗褐色土で平坦である。柱穴・周溝はない。カマドは東壁北寄りに構築されるが、袖部に使用された石と燃焼部焼土が確認されたにすぎず、遺存状態は悪かった。

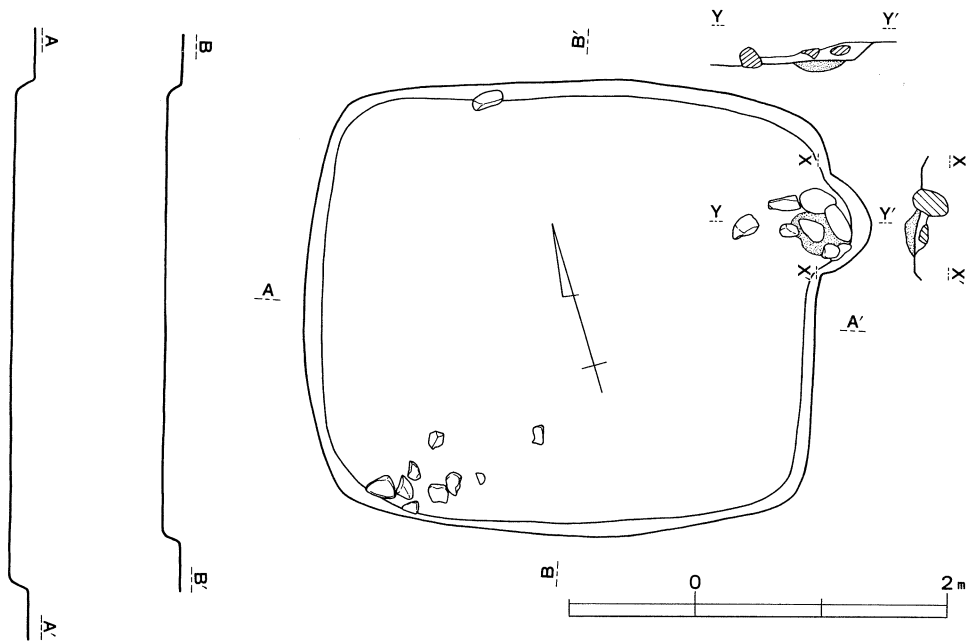
## 〔遺 物〕

出土遺物は少なく、土師器坏類が破片で何点か出土している。

## 出土遺物一覧

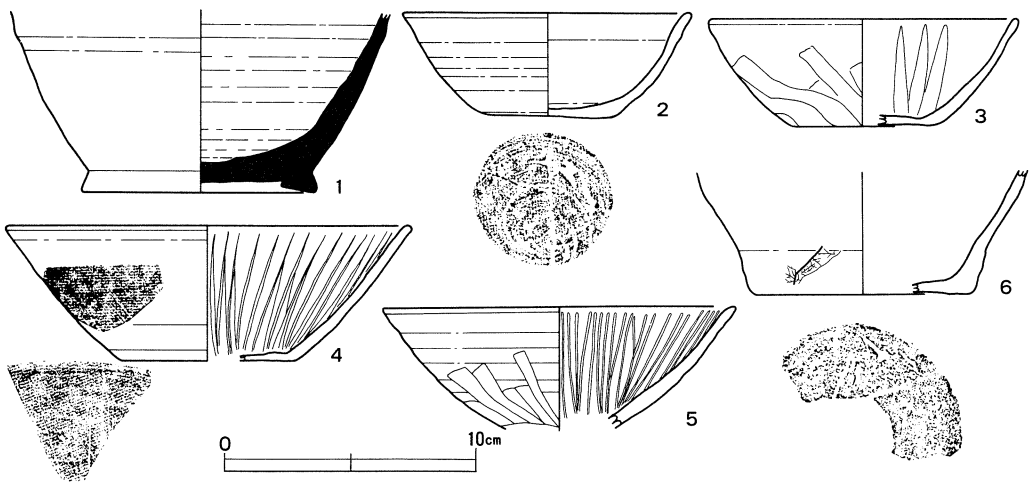
(単位：cm)

番号	種類	器形	法 量		胎 土	色 調 (外面 内面)	整形・特徴・その他
			器高・口径・底径				
1	須恵器	壺	—, —, 9.2		微砂粒を含む	暗灰色	付高台 内面底部 自然釉あり 底部破片
2	土師器	坏	4.1, 11.5, 5.0		やや粗い 砂粒を含む	白黄褐色 黒色	底部 回転糸切り 外面底部 一部黒く焼けている 1/4欠損



第35図 13号住居址 (1/60)

番号	種類	器形	法量	胎土	色調 (外面 内面)	整形・特徴・その他
			器高・口径・底径			
3	土師器	坏	4.3, 12.3, 5.7	赤色粒子 砂粒を含む	黄赤褐色	底部 ヘラ削り 外面 体部下半へラ削り 内面 花卉状暗文 2/3欠損
4	土師器	坏	5.4, 16.0, 7.0	精製 赤色粒子を 含む	暗黄褐色 黄黒色	外面 ひっかきすずあり 外面 体部下端～底部回転へラ削り 内面 放射状暗文 みこみ部円運動の暗文 1/2欠損
5	土師器	坏	—, 14.0, —	赤色粒子 砂粒を含む	暗黄褐色 黄黒色	外面 体部下半へラ削り 内面 放射状暗文 2/3欠損
6	土師器	甕	—, —, 8.6	金雲母を 多量に含む	暗茶褐色	底部 木葉痕 内面 圧痕あり 外面 撫で仕上げ 底部破片



第36図 13号住居址出土遺物 (1/3)

<14号住居址> (第37・38図)

〔遺構〕

調査区中央部西側、13号住居址の北に位置する。規模は東西約3.6m、南北約4mで、平面形は不整の長方形を呈する。壁高は約10~20cmを測る。床面は暗褐色土で平坦。柱穴・周溝はない。カマドは検出されなかったが、東壁近くに焼土があった。

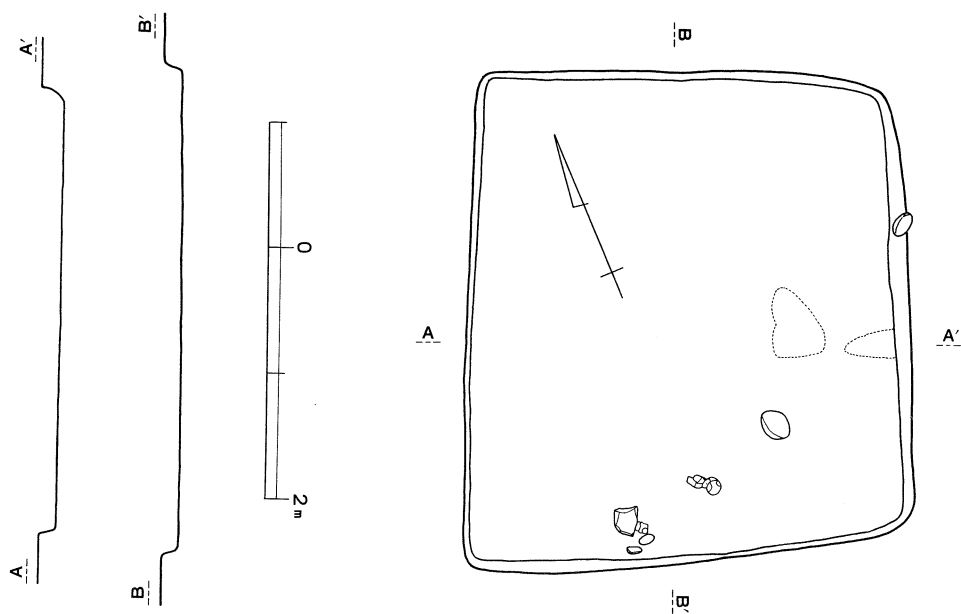
〔遺物〕

出土遺物は少ないが、土師器坏類が南側に集中して出土した。

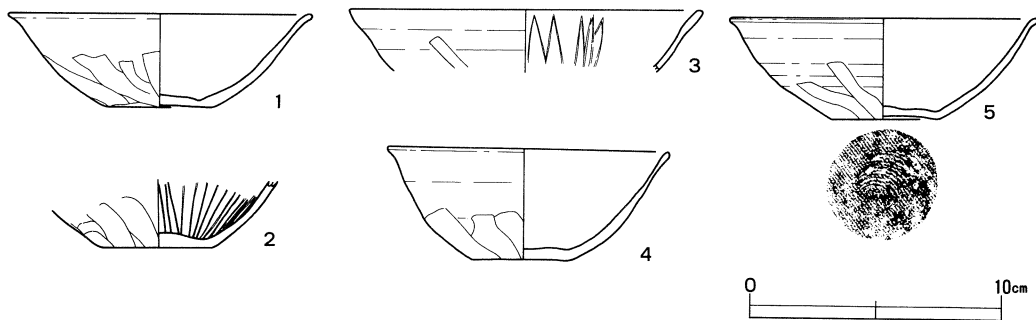
出土遺物一覧

(単位: cm)

番号	種類	器形	法量	胎土	色調 (外面 内面)	整形・特徴・その他
			器高・口径・底径			
1	土師器	坏	4.0, 17.2, 4.4	赤色粒子を含む	黄赤褐色 黄褐色	底部 糸切り後へら削り 外面 体部下半へら削り 1/3欠損



第37図 14号住居址 (1/60)



第38図 14号住居址出土遺物 (1/3)

番号	種類	器形	法量	胎土	色調 (外面 内面)	整形・特徴・その他
			器高・口径・底径			
2	土師器	坏	—, —, 4.5	赤色粒子 砂粒を含む	黄赤褐色 黄褐色	底部 へら削り 外面 へら削り 内面 放射状暗文 破片
3	土師器	坏	—, 13.9, —	赤色粒子を 含む	赤褐色 黒色	外面 体部下半へら削り 内面 花卉状暗文 破片
4	土師器	坏	4.4, 11.2, 4.0	赤色粒子 砂粒を多量 に含む	黄赤褐色 赤褐色	底部 へら削り 外面 体部下半へら削り 1/3欠損
5	土師器	坏	3.7, 12.0, 4.3	赤色・白色 粒子を含む	黄赤褐色 赤褐色	底部 回転糸切り後へら削り 外面 体部下半へら削り 2/3欠損

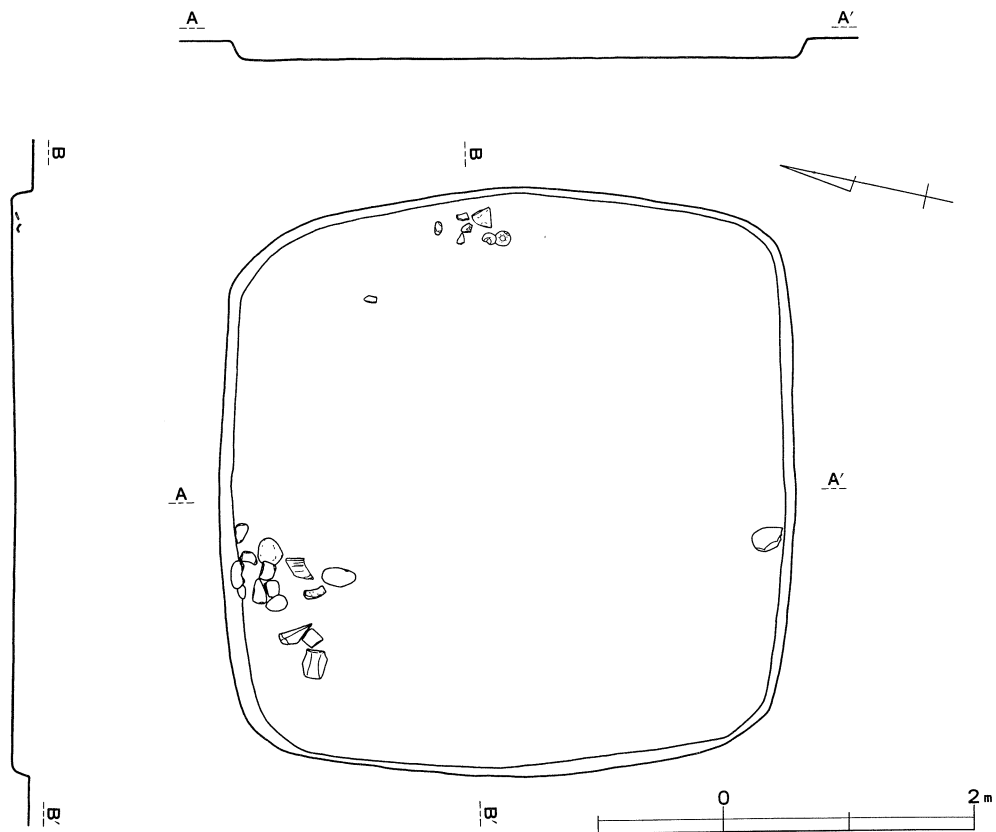
### <15号住居址> (第39・40図)

#### 〔遺構〕

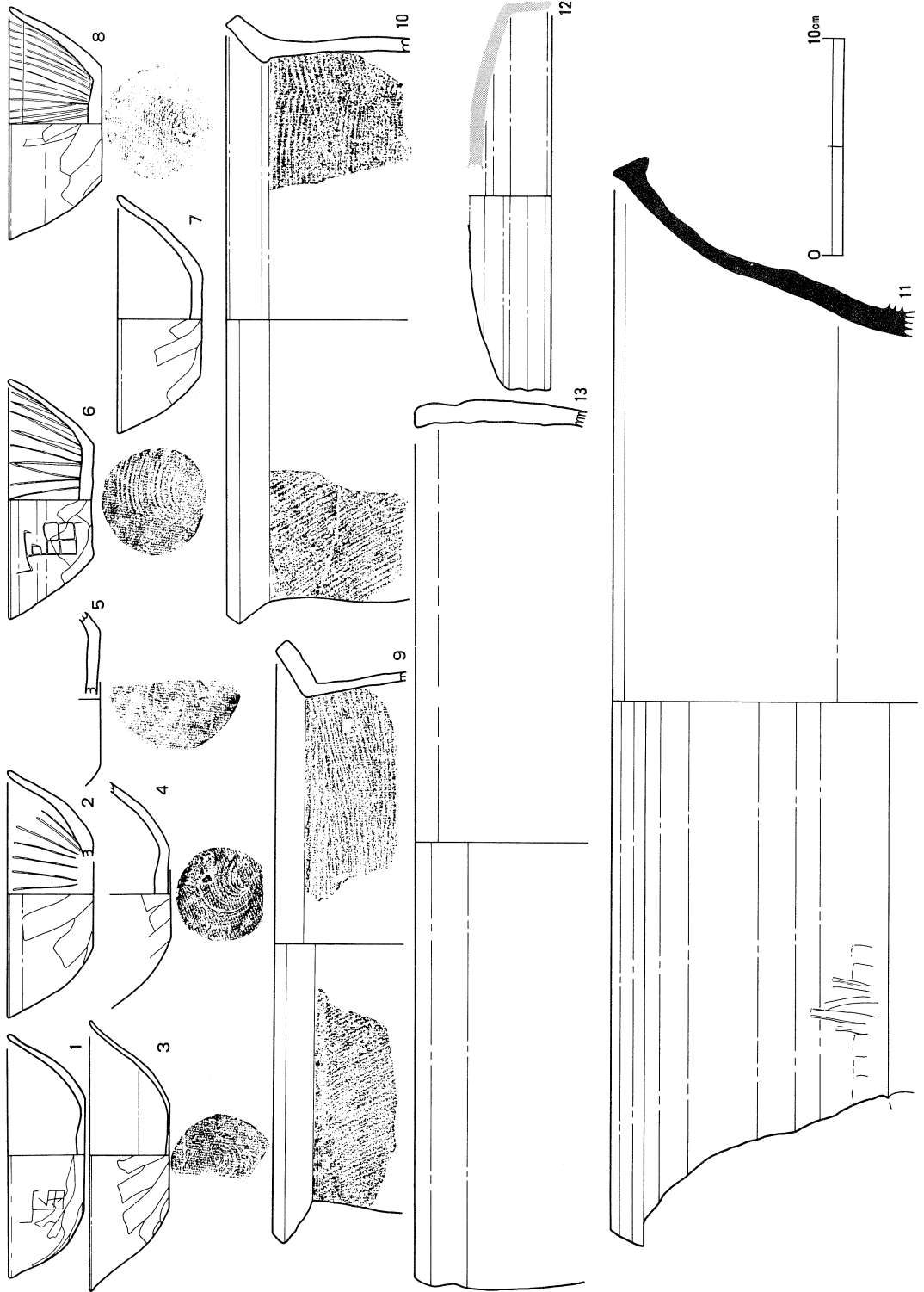
調査区中央部、12号住居址の北に位置する。暗黄褐色土中に暗褐色土の落ち込みを発見し発掘する。規模は一辺約4.5mで、平面形はやや胴張り気味の隅円方形を呈する。壁は外傾し、高さ15cm前後を図る。床面は平坦であるが、堅い面は明瞭ではなかった。柱穴・周溝はない。カマドラしき遺構は検出されなかった。

#### 〔遺物〕

遺物の出土は多くないが、東壁の近くに土師器坏類がまとまって出土した。



第39図 15号住居址 (1/60)



第40图 15号住居址出土遺物 (1/3)



出土遺物一覧

(単位：cm)

番号	種類	器形	法 量			胎 土	色 調 (外面 内面)	整形・特徴・その他
			器高	口径	底径			
1	土師器	坏	3.5, 11.3, 5.2			褐色粒子を含む	黄赤褐色	外面体部下半へら削り 底部へら削り 体部に刻書あり 完形
2	土師器	坏	4.0, 11.4, 4.9			砂粒を含む	黄赤褐色	外面体部下半へら削り 内面放射状暗文 破片
3	土師器	坏	3.7, 12.4, 4.8			砂粒を含む	黄赤褐色	外面体部下半へら削り 底部回転糸切り後外周へら削り 破片
4	土師器	坏	—, —, 4.0			砂粒を含む	黄褐色	外面体部下半へら削り 底部回転糸切り後外周へら削り 破片
5	土師器	坏	—, —, 6.1			砂粒を含む	黄褐色	底部回転糸切り後外周へら削り 刻書あり 底部破片
6	土師器	坏	3.8, 11.0, 5.1			砂粒を含む	黄赤褐色	外面体部下半へら削り 底部切り離し後外周へら削り 内面暗文あり 外面体部に刻書あり 口縁部若干欠損
7	土師器	坏	3.9, 11.0, 4.7			やや粗い 砂粒を含む	黄褐色	外面体部下半へら削り 底部へら削り 器面ザラつく 口縁部欠損
8	土師器	坏	4.2, 10.8, 5.1			褐色粒子を含む	黄赤褐色	外面体部下半へら削り 底部切り離し後外周深いへら削り 内面放射状暗文 1/3欠損
9	土師器	甕	—, 26.8, —			砂粒を含む	黄茶褐色	口縁部横撫で 外 縦ハケ整形 内 横ハケ整形 破片
10	土師器	甕	—, 27.2, —			やや粗い 砂粒を含む	黒茶褐色	口縁部横撫で 外 縦ハケ整形 内 横ハケ整形 破片
11	須恵器	甕	—, 48.6, —			砂粒を含む	黒灰色	口縁部破片
12	灰釉陶器	蓋	—, 17.8, —			砂粒を含む	緑灰色 淡灰色	外面 施釉 2/3欠損
13			—, 40.0, —			砂粒を含む	褐色 黒褐色	撫でにより仕上げ 縄文土器か? 口縁部破片

〈16号住居址〉 (第41・42図)

〔遺 構〕

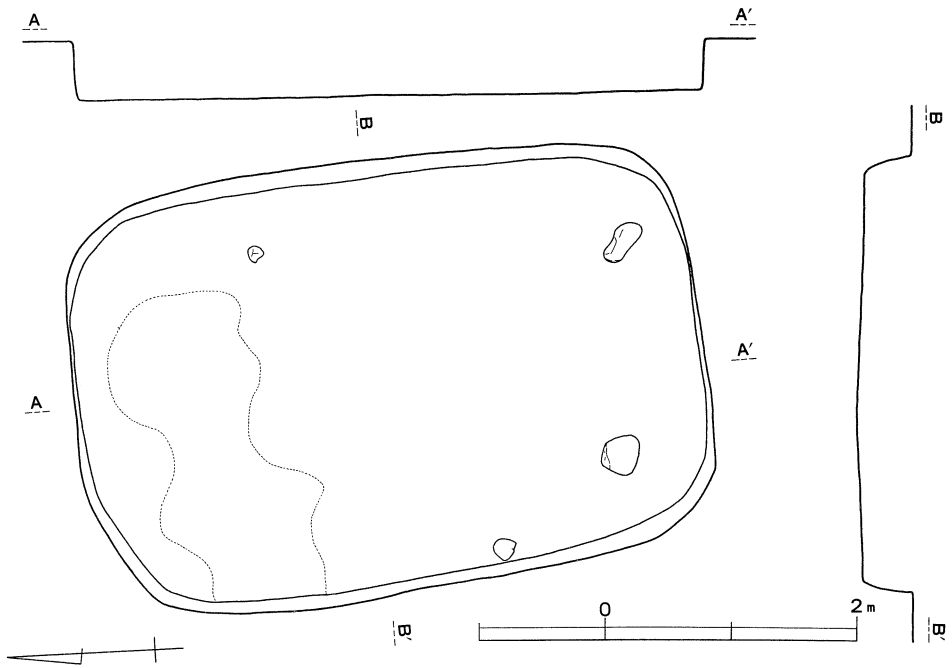
調査区南半部東側に位置する。暗黄褐色土中に暗褐色土の落ち込みを発見し発掘する。東西約3.4m、南北約5mの規模で、平面形は隅円長方形を呈する。壁は、高さ40cm前後を測り、比較的良好であった。床面は平坦で、堅く踏みしめられた部分は一部（破線内）であった。柱穴・周溝はない。炉は検出されなかった。

〔遺 物〕

土器片が僅かに出土。

壺形土器

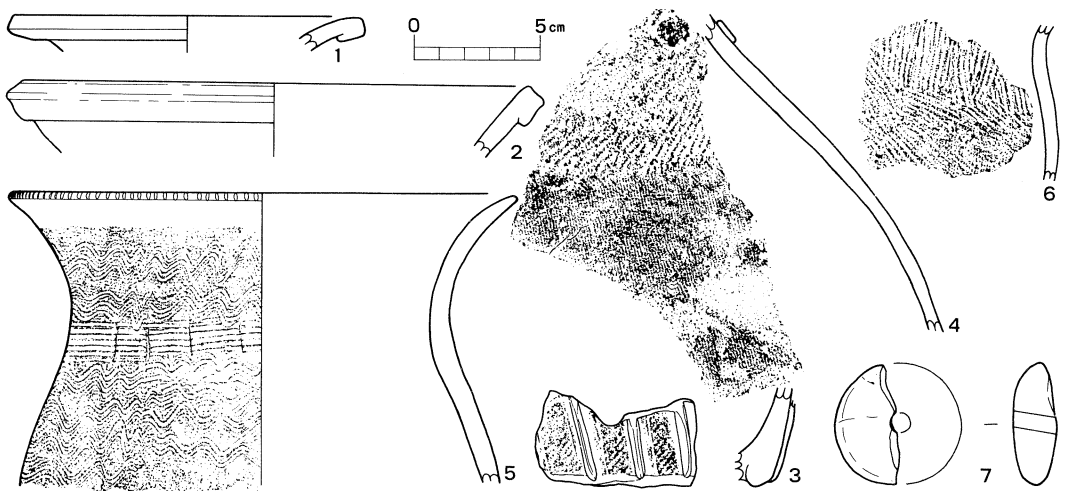
1. 口縁部小片。色調は白褐色を呈する。胎土には微砂粒・赤褐色粒子を含む。内側に刷毛目痕が僅かにみられる。折り返し口縁。



第41図 16号住居址 (1/60)

2. 口縁部小片。色調は褪褐色を呈する。胎土には砂粒を含む。折り返し口縁。
3. 口縁部破片。色調は暗褐色～赤褐色を呈する。胎土には白色粒子・砂粒を含む。複合口縁外側には、縄文と棒状浮文が施される。
4. 胴部破片。色調は外面明褐色、内面暗褐色を呈する。胎土には白色粒・赤色粒等の砂粒を含む。磨滅により器面はザラつくが、外面上半には縄文と円形貼付文が、下半には若干の刷毛目痕が認められる。

甕形土器



第42図 16号住居址出土遺物 (1/3)

5. 口縁部～胴部上半の破片。胎土には金色粒子・砂粒等を含む。外面暗褐色、内面白褐色の色調を呈する。口縁部は横撫でされ、端部に刻目が連続する。内面は篋磨きかけられる。外面頸部には櫛描簾状文がめぐり、その上下に櫛描波状文が施される。
6. 外面に刷毛目痕のある土器資料。外面白黄褐色、内面灰赤褐色を呈する。胎土には砂粒を含む。内面には刷毛目、篋磨きがみられる。

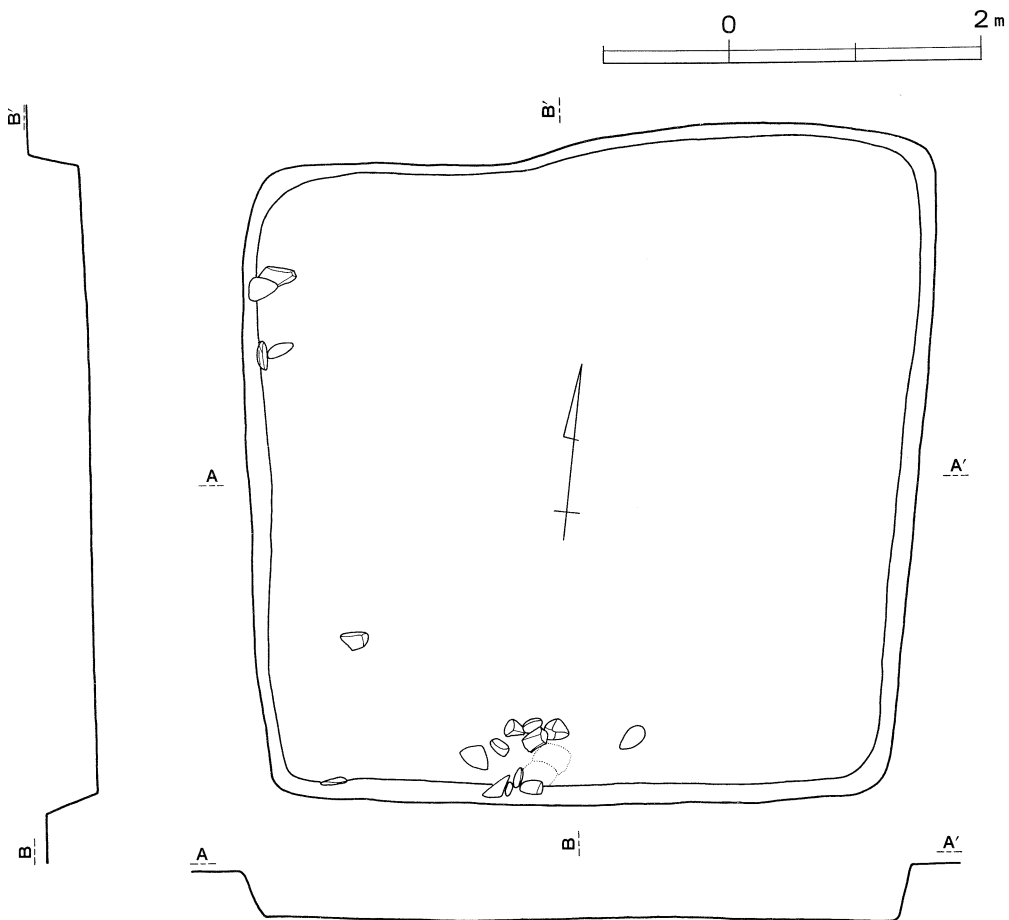
土製品

7. 紡錘車。2分の1欠損。直径約5cm、厚さ約1.5cm、孔の直径は7mm前後を測る。

〈17号住居址〉（第43・44・45図）

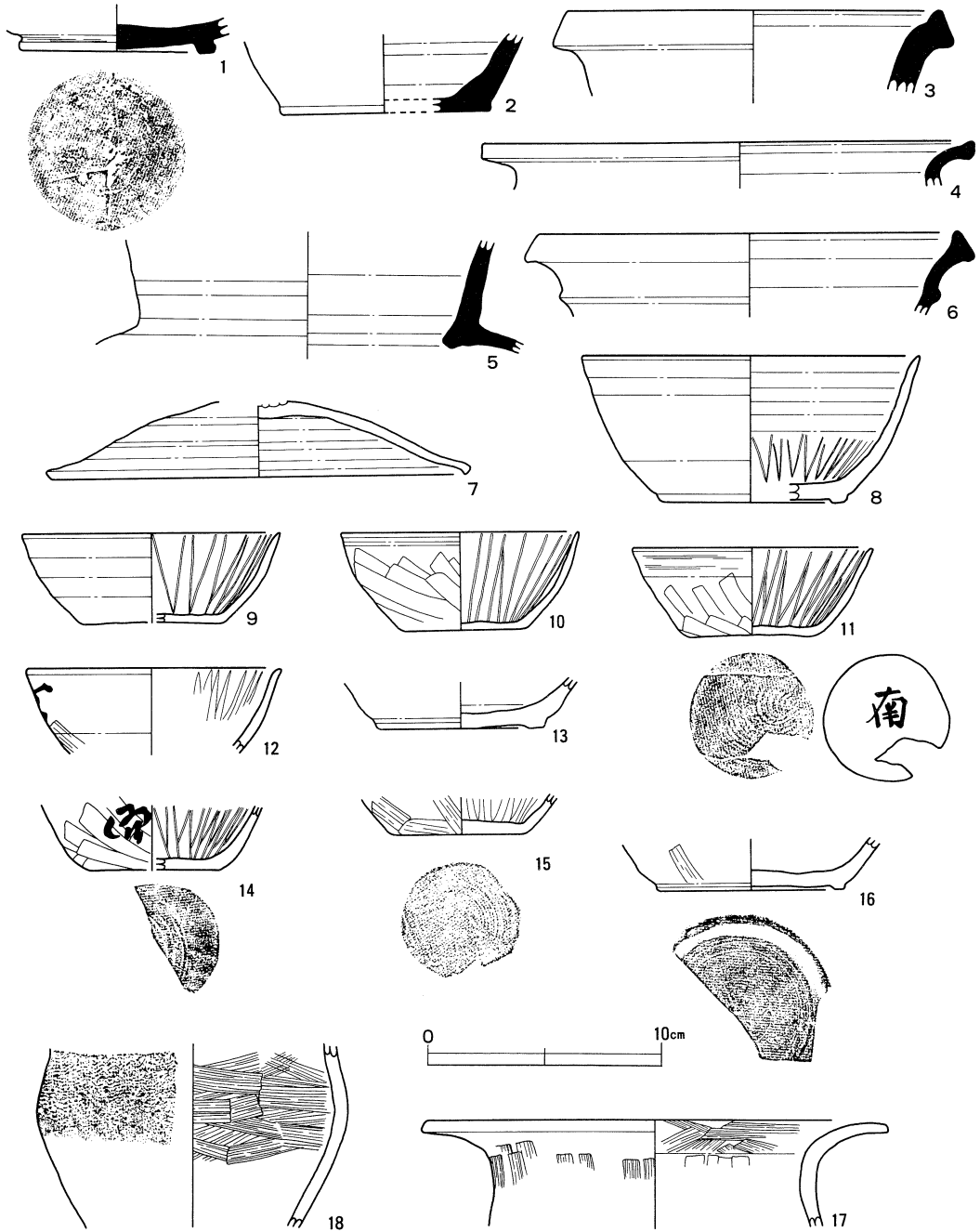
〔遺構〕

調査区南半部西側に位置する。暗黄褐色土中に暗褐色土の落ち込みを発見し発掘する。竖穴の深い良好な住居址ではあったが、掘り下げるにつれ埋没土に水分を多く含むようになり、床面検出の段階では水が湧出する始末で調査が非常に困難であった。規模は一辺約5mを測り、平面形は略方形を呈する。床面は堅く平坦であった。柱穴・周溝はない。西壁北寄りに石組が



第43図 17号住居址（1/60）

あり焼土が出土した。カマドと思われるが攪乱を受けており定かではない。別に、南壁に石組が検出され、焼土もしっかり遺存していたが、石組の開いてある方向が東西であり、カマドとしては本址にともなうものかどうか疑問が残り、不明白である。



第44図 17号住居址出土遺物 (1/3)

〔遺物〕

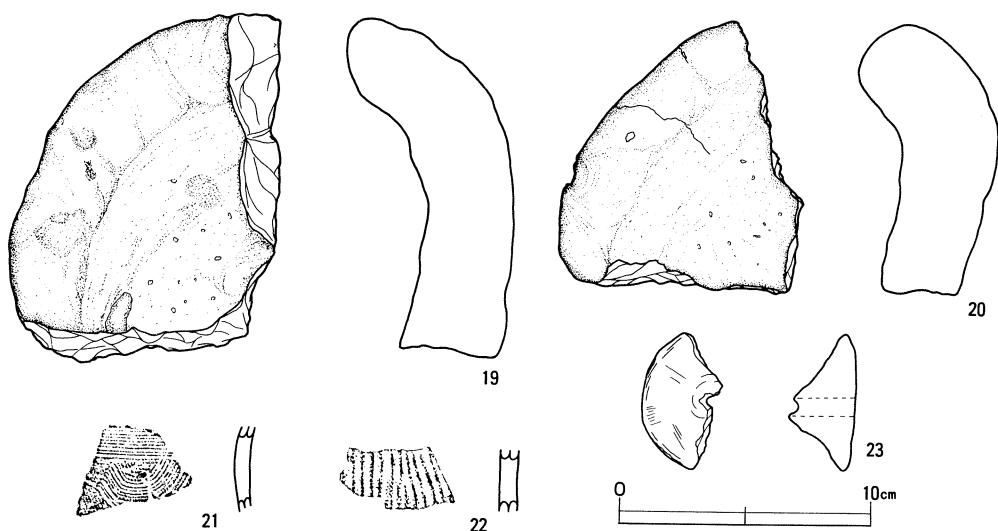
須恵器・土師器とも比較的良好に出土した。中には墨書の施されるものもあった。弥生時代の土器片も資料として掲げた。

出土遺物一覧

(単位：cm)

番号	種類	器形	法 量		胎 土	色 調 (外面 内面)	整形・特徴・その他
			器高・口径・底径				
1	須恵器	坏	—	—	8.2	白色・黒色 粒子を含む	青 灰 色 底部 付高台 底部破片
2	須恵器	甕	—	—	8.9	白色粒子を 含む	暗赤灰色 外面・内面 自然釉あり 底部破片
3	須恵器	甕	—	15.8	—	白色粒子を 含む	青 灰 色 口縁部横撫で 破片
4	須恵器	甕	—	21.0	—	白色粒子 やや粗い 砂粒を含む	白 灰 色 口縁部横撫で 破片
5	須恵器	壺	—	—	—	白色粒子を 多量に含む	灰 色 白 灰 色 横撫で 破片
6	須恵器	甕	—	17.8	—	微砂粒を含 む	白 灰 色 口縁部横撫で 破片
7	土師器	蓋	3.1	17.6	—	赤色粒子を 含む	暗赤褐色 内面・外面 ヘラ磨き 2/3欠損
8	土師器	坏	6.2	14.4	7.8	砂粒を含む	黄赤褐色 外面 下端回転ヘラ削り 内面 体部下半放射状暗文 底部 放射状暗文 削り出し高台 1/4破片
9	土師器	坏	3.8	11.0	—	砂粒を含む	黄 褐 色 外面 横撫で 内面 放射状暗文 2/3欠損
10	土師器	坏	4.2	10.2	5.2	赤色粒子 砂粒を含む	黄赤褐色 黄灰褐色 底部 ヘラ削り 炭が付着 外面 体部下半ヘラ削り 内面 放射状暗文 口縁部欠損
11	土師器	坏	3.3	10.3	5.2	赤色粒子を 含む	赤 褐 色 底部 回転系切り後外周ヘラ削り 外面 体部下半ヘラ削り 内面 暗文あり 「南」の墨書あり 1/3欠損
12	土師器	坏	—	10.8	—	赤色粒子を 含む	赤 褐 色 外面 墨書あり 内面 花卉状暗文あり 破片
13	土師器	坏	—	—	7.0	赤色粒子 砂粒を含む	淡黄褐色 削り出し高台か？ 底部破片
14	土師器	坏	—	—	—	赤色・黒色 粒子を含む	赤 褐 色 底部 回転系切り後外周ヘラ削り 外面 体部下半ヘラ削り 内面 放射状暗文 墨書あり 破片
15	土師器	坏	—	—	5.8	赤色粒子を 含む	白黄褐色 褪赤褐色 底部 回転系切り後外周ヘラ削り 外面 ヘラ削り 内面 放射状暗文 破片
16	土師器	坏	—	—	8.0	赤色粒子を 含む	赤 褐 色 削り出し高台 外面 ヘラ削り 底部破片
17	土師器	甕	—	19.6	—	砂粒を含む	白黄褐色 褪赤褐色 胴部外面縦位ヘラ削り 破片
18	弥生 土器	甕	—	—	—	金雲母 砂粒を多量 に含む	赤 褐 色 黒 褐 色 外面 櫛描波状文～刷毛目 内面 撫で+削り 破片資料

番号	種類	器形	法 量		胎 土	色 調 (外面 内面)	整形・特徴・その他
			器高・口径・底径				
19	石 器	皿			砂粒を含む		溶融物付着
20	石 器	皿					溶融物付着
21	弥 土 生 器	甕	—, —, —		砂粒を含む	暗 褐 色 白 褐 色	外面に櫛描波状文・簾状文が施 される 破片
22	須恵器	甕	—, —, —		砂粒を含む	青 灰 色	外面 叩目 破片
23	土 製	紡錘車	中心厚さ 5.8	直径 2.6	白色粒子 砂粒を含む	褐 色 系	

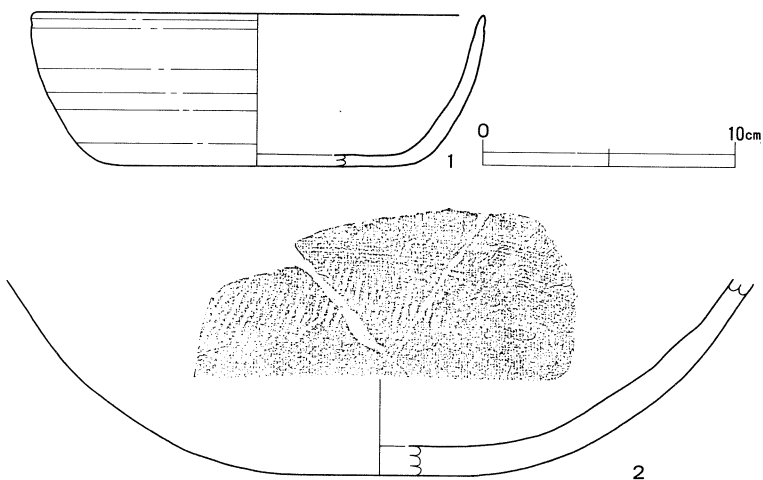


第45図 17号住居址出土遺物 (1/3)

<18号住居址> (第46・47図)

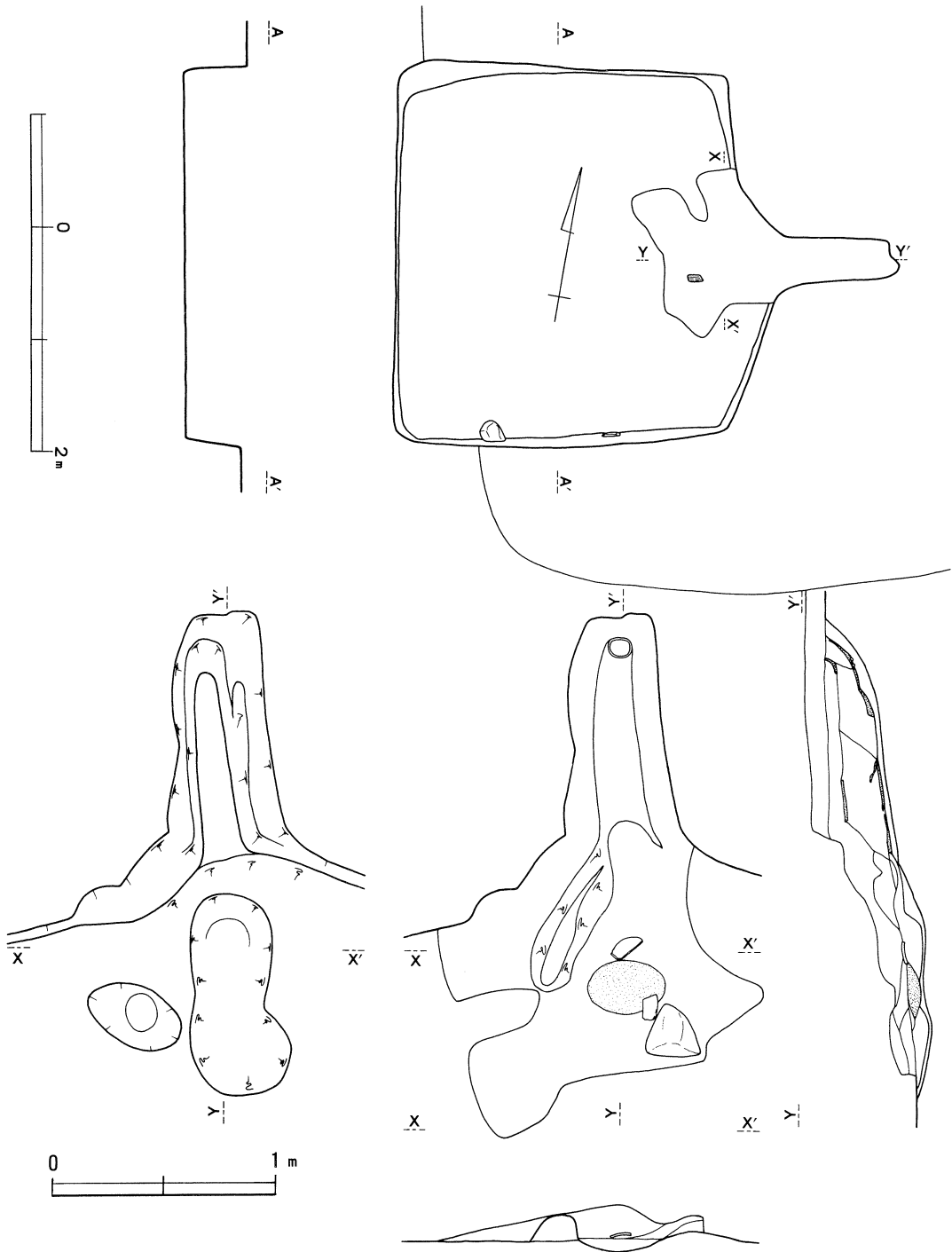
〔遺 構〕

調査区南辺部北側に位置する。暗黄褐色土中に暗褐色土の落ち込みを発見し発掘する。規模は東西約3m、南北約3.4mを測る。平面形は略方形を呈する。壁は良好な立ち上がりを見せ、高さは50cm前後を測る。小型の深い竪穴となっている。床



第46図 18号住居址出土遺物 (1/3)

面は堅く平坦。柱穴・周溝はない。カマドは東壁中央に構築される。規模は長さ約2 m、幅約1 mで、粘土をもってつくられる。 combustion部の焼土範囲は、約25×35cmの楕円形を呈する。煙道は、粘質土を管状に施し、住居址よりも約1 m程突出してつくられている。



第47図 18号住居址 (1/60) カマド (1/30)

〔遺物〕

遺物の出土は非常に少なく、図化したもののほかに外面に叩目のある須恵器片などがみられた。図化したものはカマドからの出土である。

出土遺物一覧

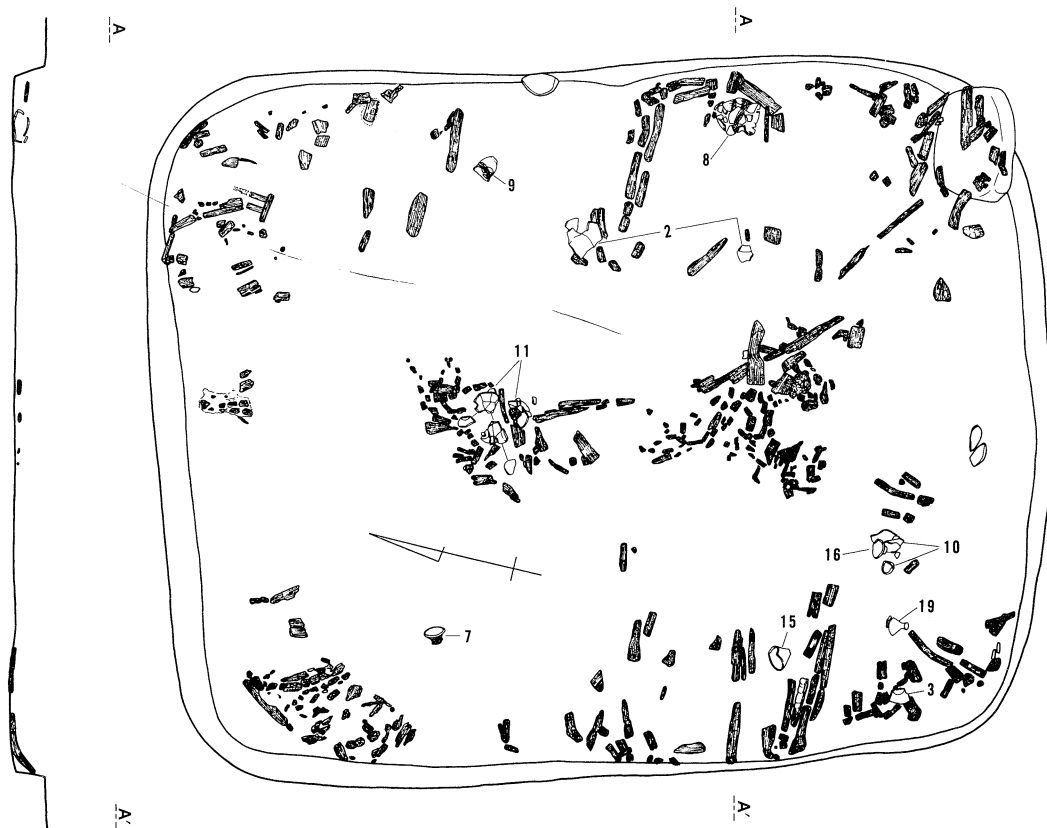
(単位：cm)

番号	種類	器形	法量	胎土	色 (外面 内面)	整形・特徴・その他
			器高・口径・底径			
1	土師器	坏	6.0, 18.0, 12.3	赤褐色粒子 砂粒を含む	暗赤褐色	口縁部外側に凹線がめぐる 底部篋削り 体部内外面及びみこみ部は篋磨きが顕著 2/3欠損
2	土師器	甕	—, —, 8.0	砂粒・赤褐色 粒子を含む	褐色	外面には横位の刷毛目(?)叩目 がみられる 内面は撫で 底部破片

<19号住居址> (第48・49・50・51・52・53図)

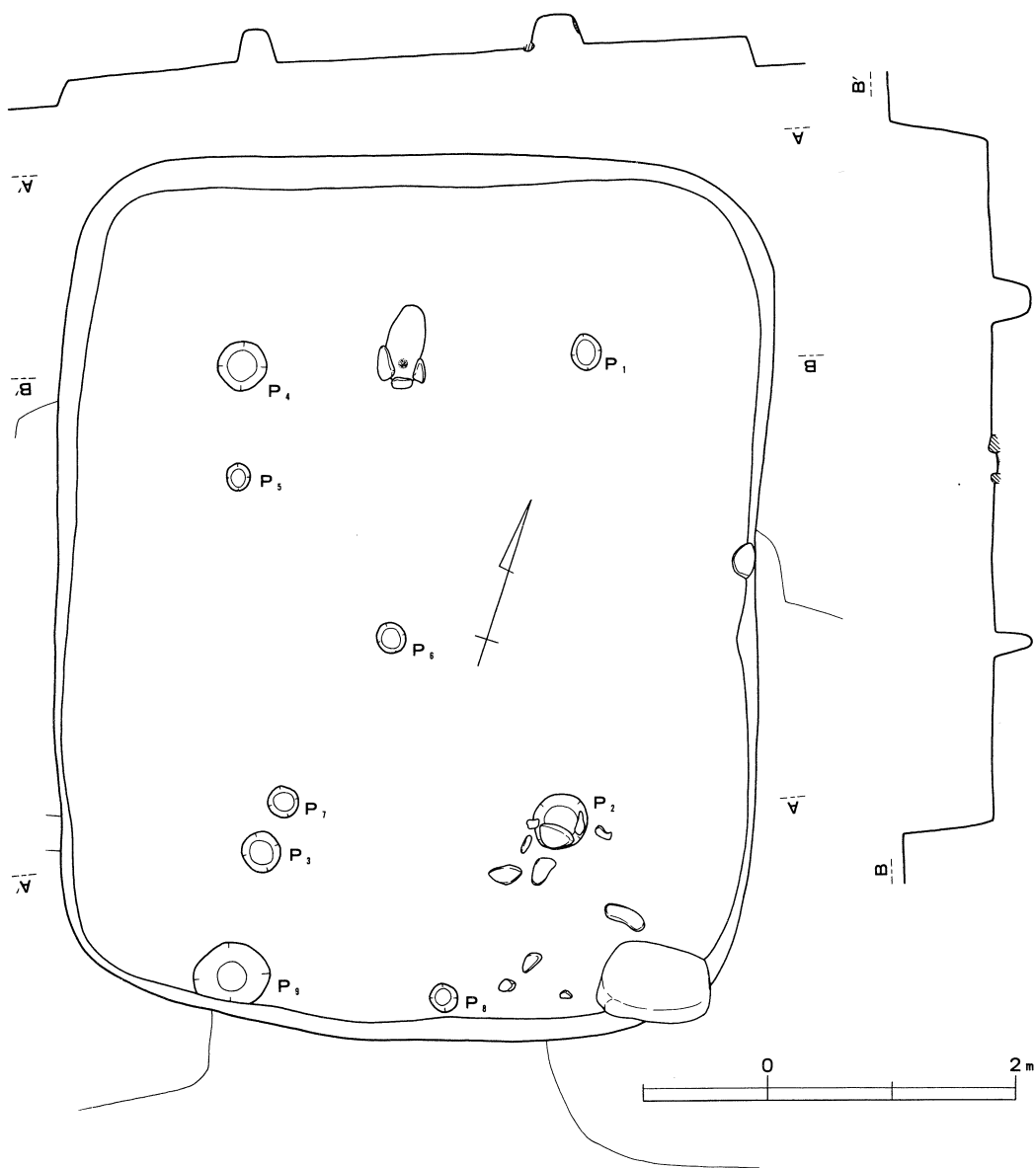
〔遺構〕

調査区南辺北側、18号住居址の下に位置する。18号住居址の壁及び周辺の土中に炭化物が多くみられたので、何らかの遺構があると判断し、18号住居址の周辺を掘り下げた所、炭化材・遺物が出土し床面が検出されたので、19号住居址として、拡張を行い遺構を確認し発掘した。壁は直立気味に立ち上がり、排土作業での遺構確認面までの高さは約70~80cmを測り、18号住



第48図 19号住居址遺物出土状態 (1/60)



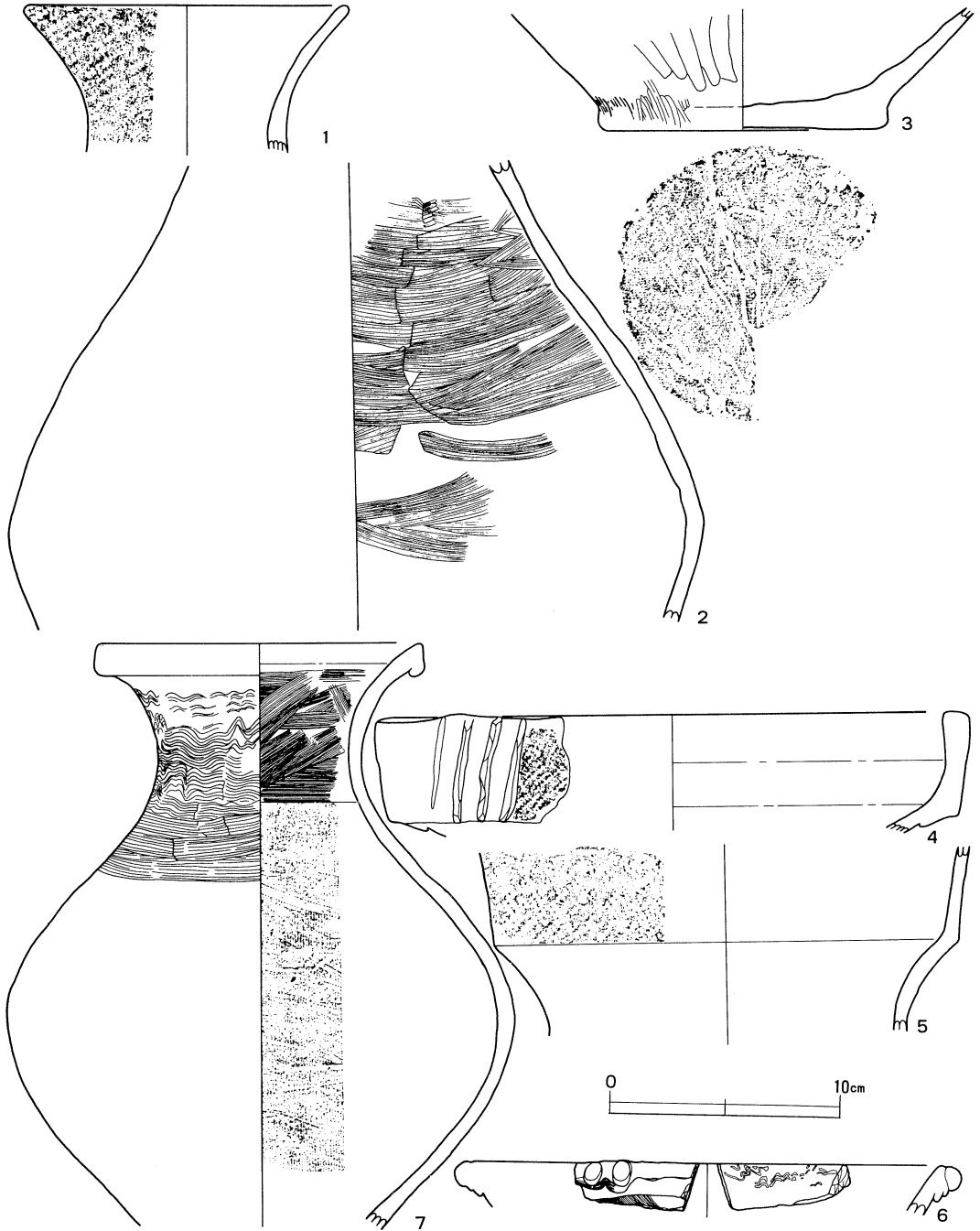


第49図 19号住居址 (1/60)

居址の床面までは約25cmを測る。竪穴の深く大型な住居址で、規模は東西約5.7m、南北約7mを測る。平面形は隅円長方形を呈する。床面は暗黄褐色土で、堅く平坦であった。柱穴は、4本主柱穴で、長方形に配されたP<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>があたり、床面からの深さは30cm前後を測る。この他小穴が何ヶ所か確認され、床面からの深さは、P<sub>5</sub>15cm・P<sub>6</sub>5cm・P<sub>7</sub>10cm・P<sub>8</sub>7cmを測る。別に南壁西側に、壁に接し床面からの深さ約23cmで約50×60cmの楕円形に穴P<sub>9</sub>が検出された。炉は、北側の主柱穴P<sub>1</sub> P<sub>4</sub>を結ぶ線上の略中央にあり、拳2～4個大の石を東南西の三方に「コ」の字形に配し、床面より若干掘り窪んでつくられる。焼土の範囲は、直径約8cm厚さ約3cmであった。主軸の方向は、N-15°-W。

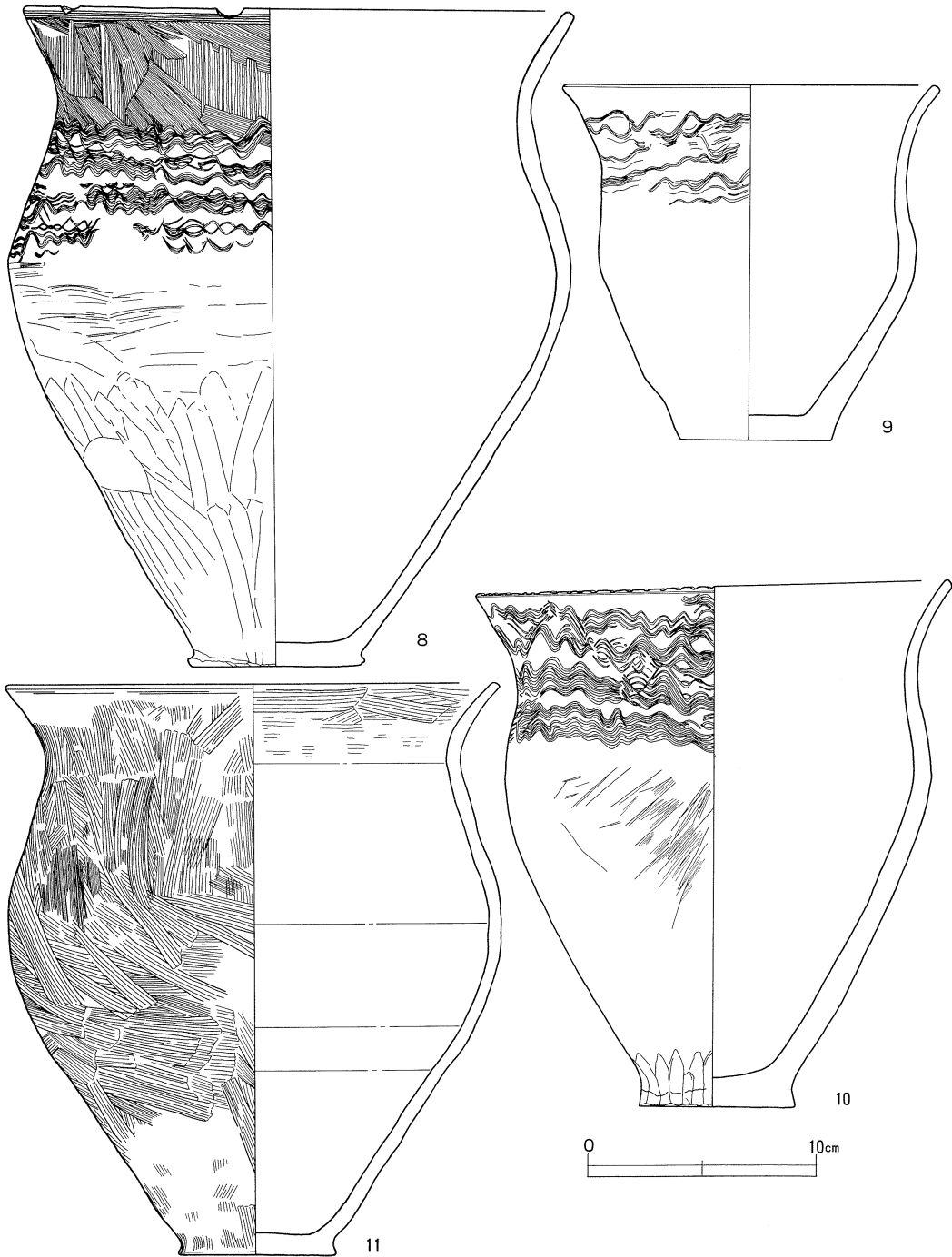
〔遺物〕

炭化材は、丸太材乃至角材と思われるもので、周囲の壁から中心に向うように、中央部は主軸の方向にそうように検出された。また、炭化材の周りに焼土が散在しており、本住居址は、

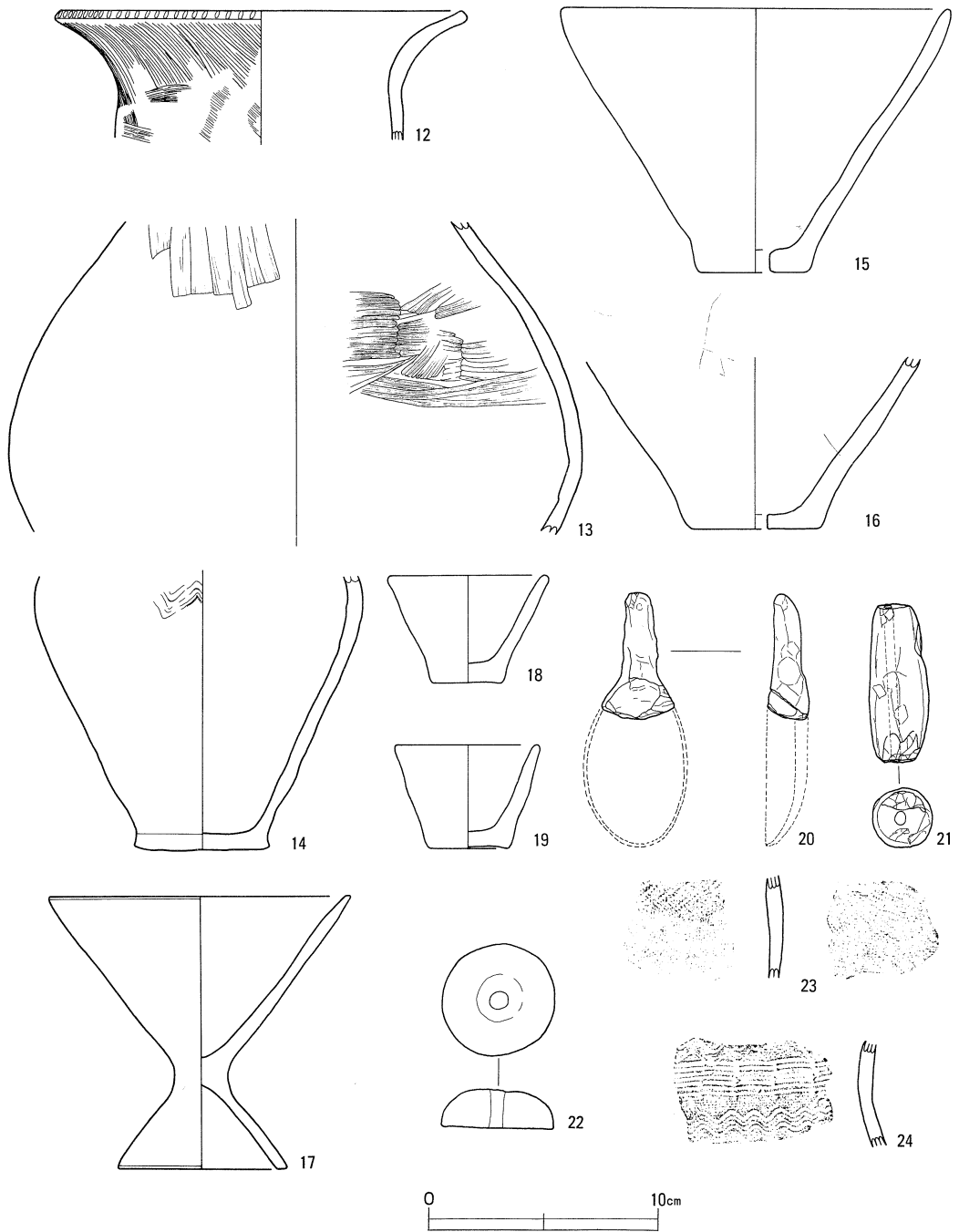


第50図 19号住居址出土遺物 (1/3)

火災を受け廃絶されたものであろう。他の出土遺物は土器が主体となっており、出土状態は床面直上からが大部分であり、それらは東壁側・南西隅・中央と大まかな片寄りがみられる。出土土器は、本住居址にともなうものにとらえられ、編年的に同一時期の一括資料として良好な



第51図 19号住居址出土遺物 (1/3)

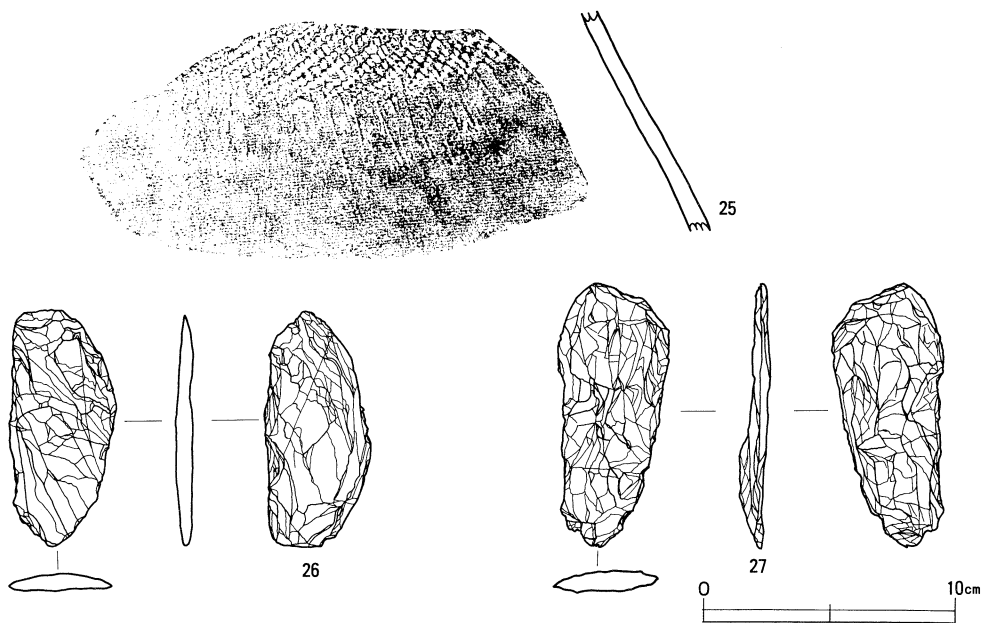


第52図 19号住居址出土遺物 (1/3)

ものとなろう。

壺形土器

1. 口縁部破片。色調は外面褪黄褐色、内面灰淡褐色を呈する。胎土には白色粒・砂粒を含む。



第53図 19号住居址出土遺物 (1/3)

器面は磨滅によりザラつく。外面に縄文が施文される。

2. 胴部破片。色調は外面黄白褐色、内面褪褐色を呈する。胎土には赤褐色粒・砂粒を含む。外面は刷毛整形の後篋磨き。内面は上半～下半に刷毛目～篋撫でが施される。磨滅により若干ザラついた器面となっている。
3. 底部破片。色調は外面赤褐色、内面黄灰褐色を呈する。底部は木葉痕。外面下端に刷毛目がみられる。内面は剥落が著しい。胎土には粗い砂粒・赤褐色粒を含む。
4. 口縁部破片。色調は外面黄褐色、内面茶褐色を呈する。胎土にはやや粗い砂粒・赤褐色粒を含む。複合口縁外側には、4本1単位の棒状浮文と縄文が施される。
5. 口縁部破片。色調は外面淡黄褐色、内面暗黄白褐色を呈する。胎土には黒色粒子・砂粒を含む。複合口縁外側に縄文が施される。
6. 口縁部破片。色調は外面暗薄茶色・内面黒色を呈する。胎土には微砂粒を含む。外面には細かな刷毛目がみられる。折り返し口縁端には円形貼付文が付される。内側には楕描波状文がみられる。
7. 胴部一部～底部欠損。色調は白褐色を呈する。胴部に黒斑あり。胎土には砂粒を含む。折り返し口縁部横撫で、外面胴部は粗い撫で整形。外面頸部直下を境に、上半は楕描波状文、下半は断続する楕描文が横走る。内面は削りと撫で整形。
13. 胴部破片。色調は褪赤褐色を呈する。胎土には砂粒を含む。外面は磨きがかけられ、内面は刷毛目痕がある。
25. 胴部破片。色調は外面黄白褐色、内面灰淡褐色を呈する。胎土には黒色小粒子・砂粒を含

む。外面に縄文が施される。

#### 甕形土器

8. 略完形品。色調は、暗淡白褐色を呈する。胎土には微砂粒・赤褐色粒子を含む。内面は、比較的丁寧な磨きで仕上げ。外面上半は刷毛状工具による撫で整形がなされ、頸部から下に橢描波状文が施される。外面胴部下半は篋削りされる。最大径をもつ胴部外面に煤附着。
9. 口縁部と胴部若干欠損。色調は赤褐色を呈する。黒斑あり。胎土には砂粒を含む。外面頸部に橢描波状文がめぐる。
10. 胴部その他若干欠損。色調は赤褐色を呈する。黒斑あり。内面は篋磨きかけられる。口縁部は横撫でされ、刻目が連続する。外面頸部を中心に上下に橢描波状文が施される。胴部外面は刷毛目がみられ、削りと磨きがなされるが、磨滅・剥落が顕著である。
11. 胴部その他若干欠損。色調は暗白褐色を呈する。黒斑あり。胎土には砂粒を含む。内面は篋磨きされるが、口縁部に若干刷毛目痕がみられる。口縁部横撫で。外面は刷毛目が顕著である。
12. 口縁部付近破片。色調は暗茶褐色を呈する。胎土には金雲母・砂粒を含む。口縁部は横撫でされ、刻目がめぐる。内面は篋磨きされる。外面には刷毛目がみられる。
14. 胴部～底部の破片。色調は暗褐色を呈する。胎土には砂粒を含む。内面は篋磨き。外面上位に橢描波状文が施される。

#### 甗形土器

15. 口縁部3分の1欠損。色調は赤褐色～白褐色を呈する。胎土には粗い砂粒を含む。内面は粗い撫でと磨きがなされる。底に単孔があく。
16. 胴部上半欠損。色調は赤褐色を呈する。胎土には砂粒を含む。内面には刷毛目が薄くみられる。外面は篋削りされる。底に単孔があく。

#### 高坏形土器

17. 坏部2分の1欠損。色調は赤茶褐色を呈する。胎土には微砂粒を含む。器面は磨きにより仕上げてある。

#### 小型土器・土製品・その他

18. 完形品。色調は外面赤褐色、内面明黄褐色を呈する。胎土には砂粒を含む。撫でと磨きにより仕上げられる。
19. 口縁部若干欠損。色調は黄赤褐色を呈する。胎土には砂粒を含む。撫でと磨きにより仕上げられる。
20. 土製の匙。匙部欠損。色調は暗褐色を呈し、胎土には砂粒・赤褐色粒子を含む。手こねでつくられる。
21. 土製の錘。長さ約6.5cm、最大径約2.5cm。色調は白褐色系を呈する。胎土には砂粒を含む。中心に単孔が貫通している。

22. 土製紡錘車。直径約4.8cm、中心部厚さ約1.7cm。色調は暗褐色を呈する。胎土には微砂粒を含む。中心に単孔があく。
23. 壺形土器の破片。色調は橙褐色を呈する。胎土には砂粒を含む。内面には刷毛目痕あり。外面には、櫛歯状工具あるいは刷毛状工具による疑似縄文が施される。
24. 甕形土器の破片。色調は白褐色系を呈する。胎土には砂粒を含む。内面は磨き。外面には櫛歯による波状文・簾状文が施される。

#### 石器

26. 打製石斧。石材は粘板岩。
27. 打製石斧。石材は粘板岩。

#### 〔炭化材について〕（表1・図版1・図版2）

本住居址からは炭化材が多量に採集されたが、取り上げに際しその出土地点を明確にせず一括してビニール袋に入れたため相関関係等が不明となってしまう、材の同定・用途等を考慮する上で非常に不都合となってしまった。しかしながら、その中から無作為に12点の炭化材片を採取し同定を行うこととした。以下は、高橋利彦氏の報告によるものである。

#### 1. 試料

試料はNo.1～12の12点で、弥生時代後期後半のものと考えられる19号住居址から検出されたものである。いずれも焼失家屋の建築材の一部と思われるが、詳細は不明である。なお、No.10試料には針葉樹と広葉樹の2種類の材が認められたため、これを10a・10bとして区別し、13点について同定作業を行った。

#### 2. 方法

試料を乾燥させたのち、木口・柾目・板目三断面を作成、双眼実体鏡ならびに走査型電子顕微鏡で観察・同定した。同時に、顕微鏡写真図版（図版1・2）も作成した。

#### 3. 結果

同定結果を一覧表（表1）で示す。

つぎに、各試料の主な解剖学的特徴や一般的性質を種類ごとに述べる。

#### ● モミ属の一種 (*Abies* sp.) マツ科 No.8, 10b

早材部は圧縮・変形しており、年輪界で割れているため晩材部の観察しかできない。樹脂道はなく、放射仮道管の有無は確認できないが、放射柔細胞の末端壁にはじゅず状の肥厚が認められる。分野壁孔は、晩材部の壁孔の孔口が大きいことからみて、スギ型(Taxodioid)のようである。放射組織は単列、20細胞高を越えるものがある。

モミ属には、モミ(*Abies firma*)、ウラジロモミ(*A. homolepis*)、アオモリトドマツ(*A. mariesii*)、シラベ(*A. vetchii*)、アカトドマツ(*A. sachalinensis*)の5種があり、アカトドマツを除く4種はいずれも日本特産種である。モミは本州(秋田・岩手県以南)・四国・九州

表1 堂の前遺跡19号住居址出土炭化材同定結果

試料番号	種名
1	<u>Quercus</u> (subgen. <u>Lepidobalanus</u> sect. <u>Cerris</u> ) sp. [コナラ属(コナラ亜属クヌギ節)の一種]
2	<u>Quercus</u> (subgen. <u>Lepidobalanus</u> sect. <u>Cerris</u> ) sp.
3	<u>Quercus</u> (subgen. <u>Lepidobalanus</u> sect. <u>Cerris</u> ) sp.
4	<u>Quercus</u> (subgen. <u>Lepidobalanus</u> sect. <u>Cerris</u> ) sp.
5	<u>Quercus</u> (subgen. <u>Lepidobalanus</u> sect. <u>Cerris</u> ) sp.
6	<u>Quercus</u> (subgen. <u>Lepidobalanus</u> sect. <u>Cerris</u> ) sp.
7	<u>Quercus</u> (subgen. <u>Lepidobalanus</u> sect. <u>Cerris</u> ) sp.
8	<u>Abies</u> sp. (モミ属の一種)
9	<u>Quercus</u> (subgen. <u>Lepidobalanus</u> sect. <u>Cerris</u> ) sp.
10 a	<u>Quercus</u> (subgen. <u>Lepidobalanus</u> sect. <u>Prinus</u> ) sp. [コナラ属(コナラ亜属コナラ節)の一種]
10 b	<u>Abies</u> sp.
11	<u>Quercus</u> (subgen. <u>Lepidobalanus</u> sect. <u>Cerris</u> ) sp.
12	<u>Quercus</u> (subgen. <u>Lepidobalanus</u> sect. <u>Cerris</u> ) sp.

の低地～山地に、ウラジロモミは本州中部（福島県以南）・紀伊半島・四国の山地～亜高山帯に、アオモリトドマツは本州（福島県以北）の亜高山～高山帯に、シラベは本州中部（福島県以南）・奈良県・四国に、アカトドマツは北海道に分布する常緑高木である。モミを除いては山地～高山・寒冷地に成育する。モミの材はやや軽軟で、強度は小さく、割裂性は大きい。加工は容易で、保存性は低い。棺や卒塔婆など葬祭具に用いられるほか、建具・器具・家具・建築材など各種の用途が知られている。

- コナラ属（コナラ亜属コナラ節）の一種 [Quercus (subgen. Lepidobalanus sect. Prinus) sp.] ブナ科 No.10 a

環孔材で孔圏部は4列、孔圏外で急激に管径を減じのち漸減しながら火炎状に配列する。大道管は管壁は厚く、横断面では楕円形、小道管は管壁は中庸～薄く、横断面では多角形、



ともに単独。単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合組織よりなる。柔組織は周囲状および短接線状。年輪界は明瞭。

コナラ節は、コナラ亜属（落葉ナラ類）の中で、果実（いわゆるドングリ）が1年目に熟するグループで、モンゴリナラ (*Quercus mongolica*) とその変種ミズナラ (*Q. mongolica* var. *grosseserrata*)、コナラ (*Q. serrata*)、ナラガシワ (*Q. aliena*)、カシワ (*Q. dentata*) といくつかの変・品種を含む。モンゴリナラは北海道・本州（丹波地方以北）に、ミズナラ・カシワは北海道・本州・四国・九州に、ナラガシワは本州（岩手・秋田県以南）・四国・九州に分布する。このうちコナラは樹高20mになる高木で、古くから薪炭材として利用され、植栽されることも多かった。材は重硬で、加工は困難、器具・機械・樽材などの用途が知られ、薪炭材としてはクヌギ (*Q. acutissima*) に次ぐ優良材である。枝葉を緑肥としたり、虫えいを染料とすることもある。

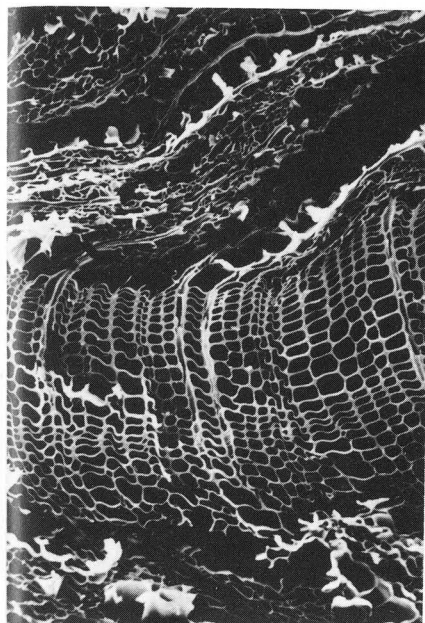
- コナラ属（コナラ亜属クヌギ節）の一種 [*Quercus* (subgen. *Lepidobalanus*, sect. *Cerris*) sp.] ブナ科 No.1～7, 9, 11, 12

環孔材で孔圏部は1～2列、孔圏外で急激に管径を減じのち漸減しながら放射状に配列する。大道管は管壁は厚く、横断面では円形～楕円形、小道管は管壁は中庸～厚く、横断面では角張った円形、ともに単独。単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合組織よりなる。柔組織は周囲状および短接線状。年輪界は明瞭。

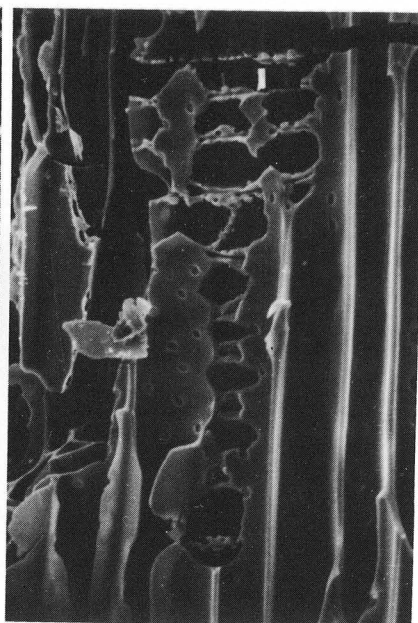
クヌギ節は、コナラ亜属の中で、果実が2年目に熟するグループで、クヌギとアベマキ (*Q. variabilis*) の2種がある。クヌギは本州（岩手・山形県以南）・四国・九州に、アベマキは本州（山形・静岡県以西）・四国・九州（北部）に分布するが、中国地方に多い。材の解剖学的特徴のみで両者を区別することはできないが、試料はクヌギである可能性が高い。クヌギは樹高15mになる高木で、材は重硬である。古くから薪炭材として利用され、人里近くに萌芽林として造林されることも多かった。黒炭で知られる佐倉炭・池田炭も本種で作られ、薪炭材として国産材中第一の重要材である。このほかに器具・杭材・櫓木などの用途が知られる。樹皮・果実はタンニン原料となり、果実は染料・飼料ともなった。

#### 4. 考察

同定された13点の樹種は、クヌギ節（クヌギと考える）が10点、コナラ節1点、モミ属2点であった。時期的にはやや新しくなるとされるが、隣接する坂井南遺跡での建築炭化材の同定結果でも、クヌギ節の多い傾向が得られている（前報<sup>註</sup>）。ただ、同定試料とされた炭化材には、大径材、炭化材として残存しやすいもの、量的に多く使われていたものなどが選択されたものと思う。クヌギは重硬な材であるから、柱などの構造材として使用した可能性は否定しないが、今回同定試料として採取できなかった炭化材の中には、坂井南遺跡で得られたような多くの樹種が含まれていたものと考えている。



木口 x70

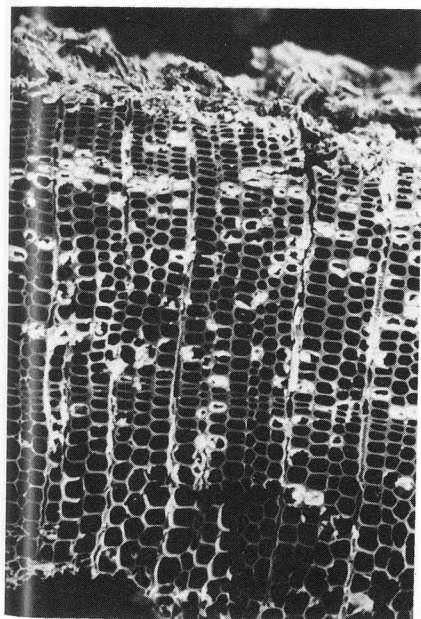


柁目 x280

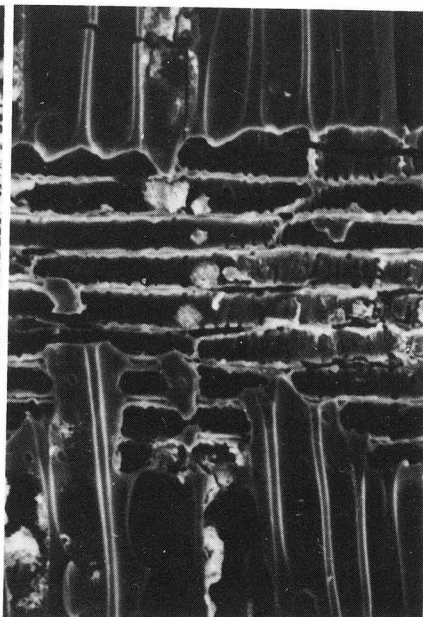


板目 x140

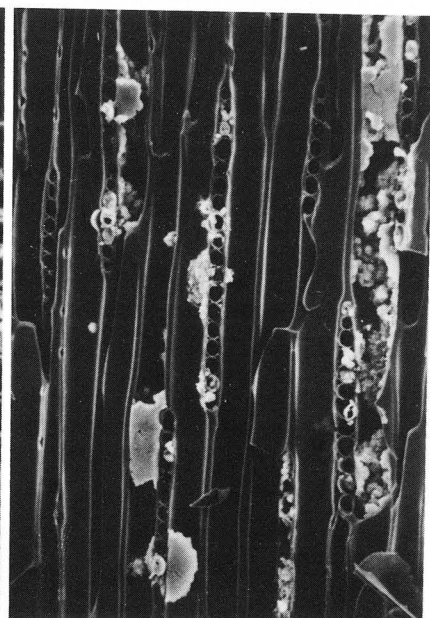
*Abies* sp. No. 8



木口 x70

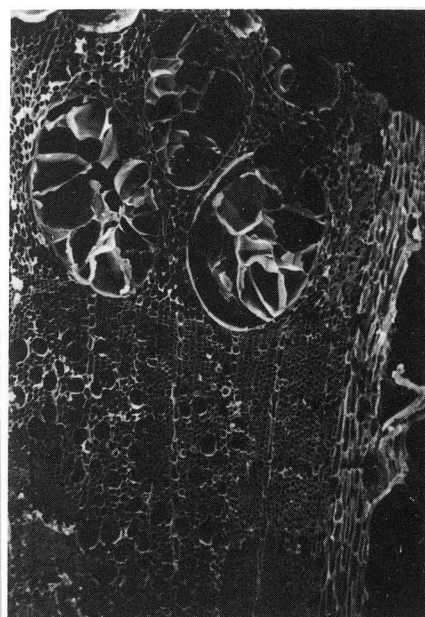


柁目 x280

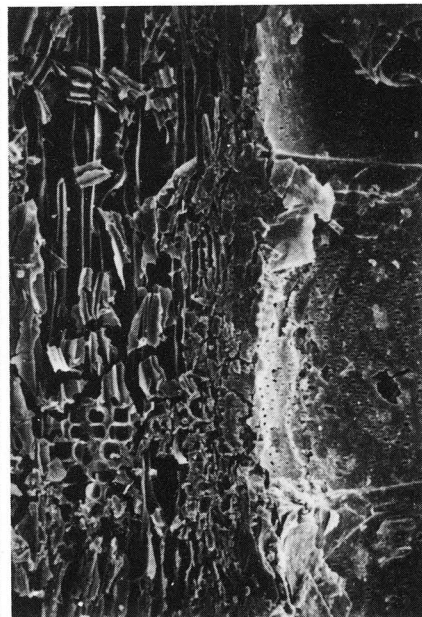


板目 x140

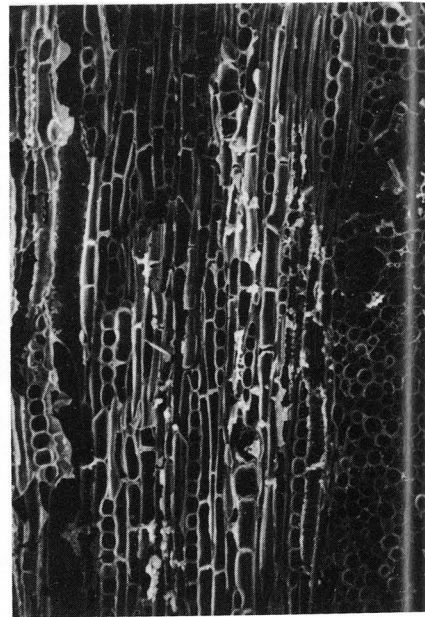
*Abies* sp. No. 10b



木口 x70



柁目 x140

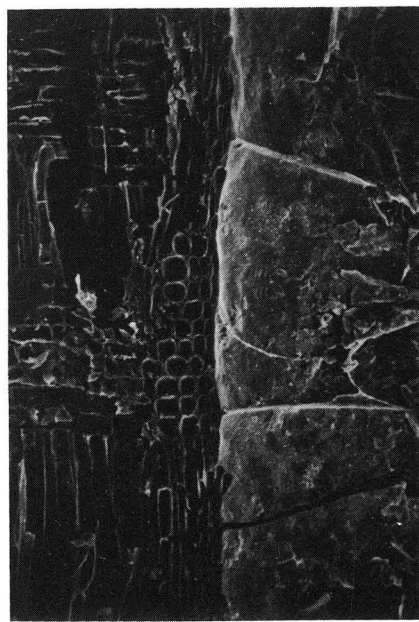


板目 x140

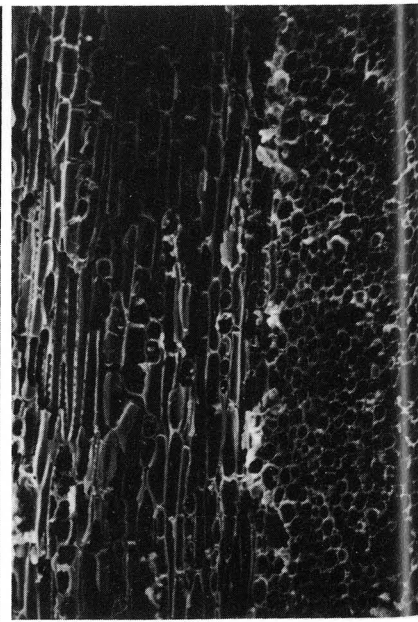
*Quercus* (subgen. *Lepidobalanus* sect. *Prinus*) sp. No. 10a



木口 x35



柁目 x140



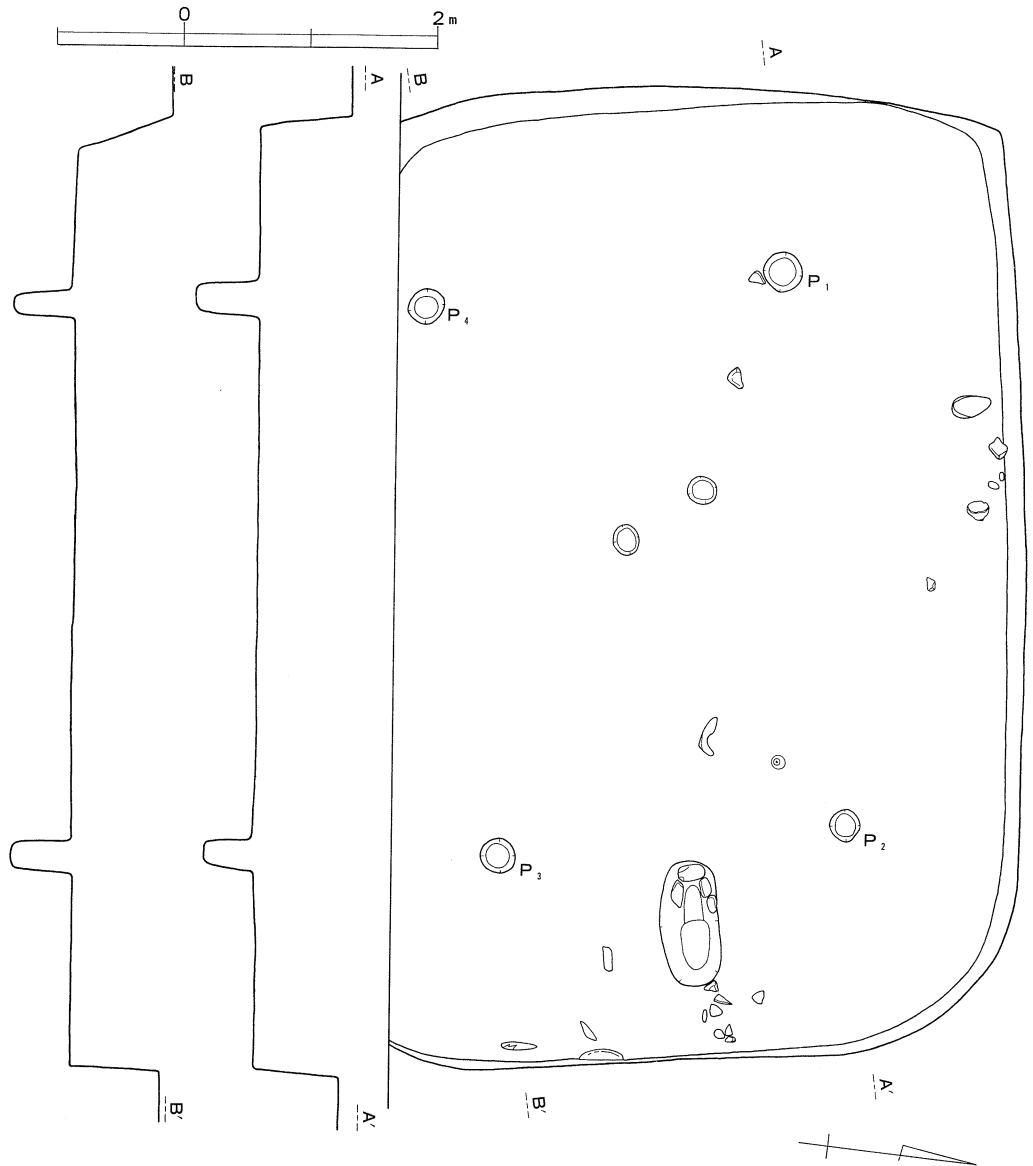
板目 x140

*Quercus* (subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerris*) sp. No. 3

〈20号住居址〉（第54・55・56図）

〔遺構〕

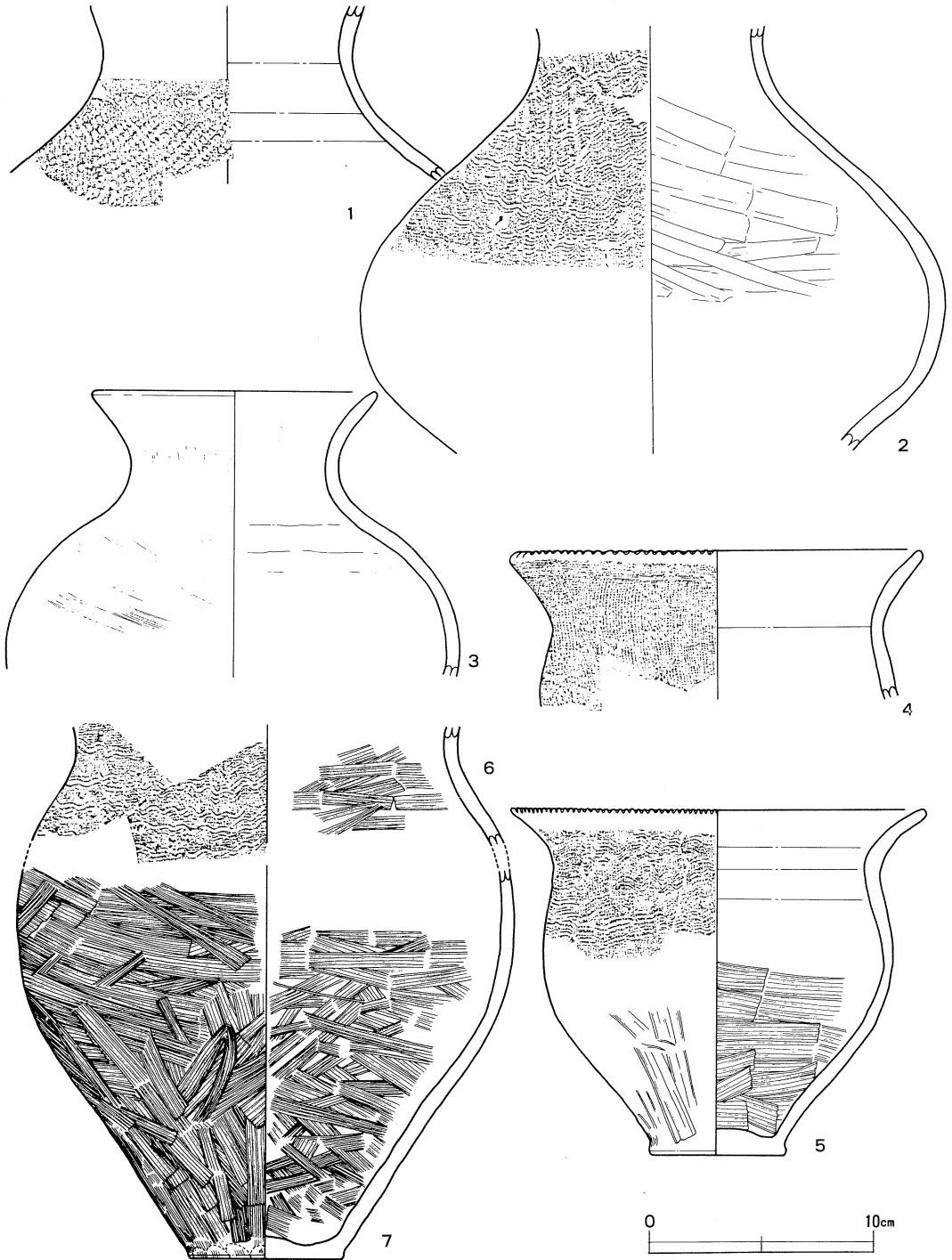
調査区南端に位置する。暗黄褐色土中に暗褐色土の落ち込みを発見し発掘する。大型の深い住居址ではあるが、南側は調査区域外で完掘できなかつた。規模は東西約7.6mで、平面形は隅円長方形を呈すると思われる。壁は略直立気味に立ち上がり、高さ70cm前後を測る。床面は暗黄褐色土で、堅く平坦であった。柱穴は、4本支柱穴で、長方形に配されたP<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>が当り、床面からの深さは、P<sub>2</sub>がやや浅く約40cmで他は50cm前後を測る。この他に床面中央に浅い小穴が2個検出された。炉は東側の支柱穴P<sub>2</sub> P<sub>3</sub>を結ぶ線上よりも外側にあり、拳2～4個大の石を西



第54図 20号住居址 (1/60)

南北の三方に「コ」の字形に配してつくられている。焼土は明瞭に形成されていなかった。主軸の方向は、 $N-78^{\circ}-E$ 。

〔遺物〕



第55図 20号住居址出土遺物 (1/3)

遺物の出土は少ない。土器が主体で、床面直上乃至若干浮上して出土しており、本住居址にともなうものあるいは同一時期の範疇に入るものであろう。

#### 壺形土器

1. 胴部破片。色調は暗肌色を呈する。胎土には砂粒・僅かの赤褐色粒を含む。内面は磨き。外面に縄文が施される。
2. 頸部～胴部破片。色調は白茶褐色を呈する。胎土には砂粒・赤褐色粒子を含む。外面は篋磨きされ、頸部下胴部上半に楡描波状文が施される。内面は磨き、撫でが施され、刷毛目に似た痕跡がみられる。
3. 胴部下半欠損。色調は薄茶色系を呈する。胎土には砂粒・黒色小粒を含む。器面は磨滅によりザラつく。外面には薄く刷毛目がみられる。

#### 甕形土器

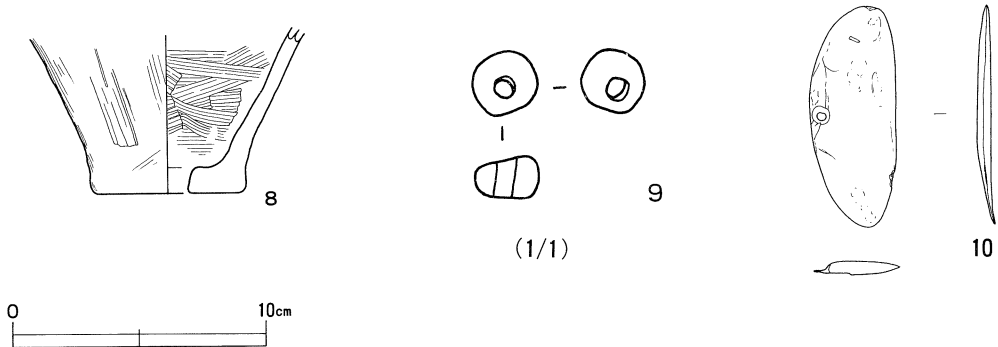
4. 口縁部付近破片。色調は内面暗褐色、外面白褐色～淡赤褐色を呈する。胎土には砂粒・黒色小粒子を含む。内面は磨き。外面は刷毛目。口縁部は横撫でされ刻目がめぐる。
5. 3分の1欠損、色調は白褐色を呈する。胎土には砂粒を含む。器面には削り・撫でが施される。口縁部には刻目が連続する。外面頸部を中心に上下に楡描波状文がめぐる。
6. 胴部破片。色調は黒褐色を呈する。胎土には微砂粒を含む。外面は雑な篋磨きされ、楡描波状文が施される。内面は篋磨き。
7. 胴部～底部の破片。色調は外面暗褐色、内面黒褐色を呈する。胎土には微砂粒を含む。内外面ともに木目の残る雑な篋磨きが施される。

#### 甑形土器

8. 胴部上半欠損。色調は褐色系を呈する。胎土には微砂粒・赤褐色粒を含む。内面は撫でと刷毛目状の痕がみられる。外面は磨き。底部に単孔があく。

#### ガラス製品・石器

9. ガラス玉。中央に単孔があく。色調はマリンプルー。
10. 石包丁。石材は粘板岩。長さ約8.7cm、幅約3.8cm、厚さ約0.5cmを測る。形状は、肩部に円孔をもち刃部が直線となる半月形を呈する。紐孔は両挟りの単孔である。



第56図 20号住居址出土遺物 (1/3)

〈水没住居址〉（第57図）

〔遺構〕

調査区北半部西側、6号住居址の西に位置する。暗褐色土の落ち込みを掘り下げ床面を確認したのであるが、掘り進むにつれ埋没土中に水分を多く含むようになり、床面検出の段階では水が湧出する程であった。このため発掘調査は遅滞として進まず、そればかりか竪穴は池のようになってしまう始末で結局調査を途中で断念した。東側にカマドを有する竪穴式住居址と思われるが、詳細は不明。

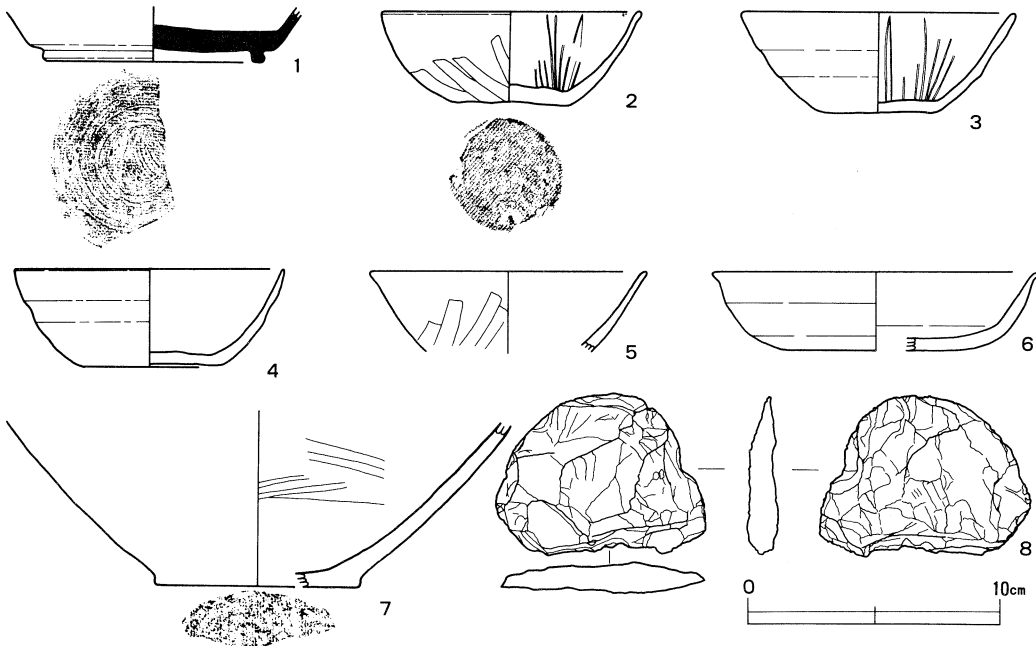
〔遺物〕

発掘は出来なかったが、若干の遺物を採集した。

出土遺物一覧

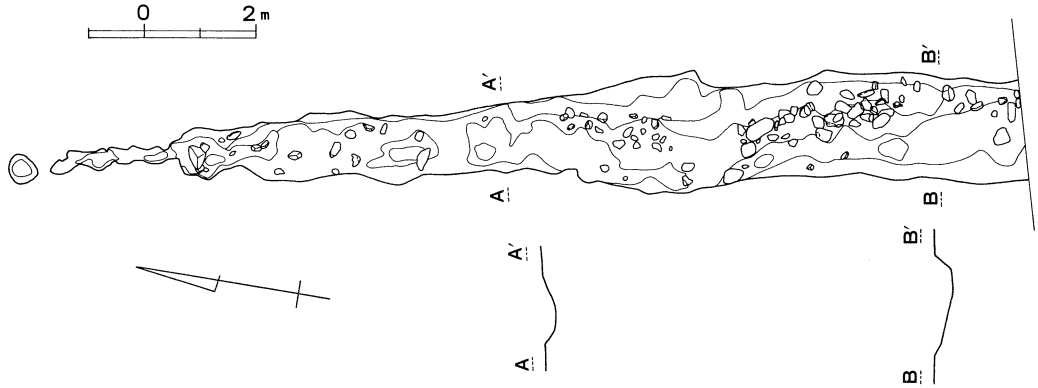
(単位：cm)

番号	種類	器形	法量		胎土	色調 (外面 内面)	整形・特徴・その他
			器高・口径・底径				
1	須恵器	坏	—, —, 8.6		白色 粒子を含む	灰褐色	底部回転糸切り痕あり 付高台 底部破片
2	土師器	坏	3.5, 10.9, 4.4		微砂粒 を含む	暗赤褐色系	底部 糸切り後へら削り 外面 体部下半へら削り 内面 暗文あり 1/4欠損
3	土師器	坏	4.0, 0.9, 4.4		白色粒子 を含む	淡黄褐色	底部 へら削り 内面 暗文あり 2/3欠損
4	土師器	坏	3.9, 10.2, 5.5		褐色粒子 を含む	淡白黄褐色	外面 器体部下半～底部へら削り されるが、磨滅により明瞭ではない。
5	土師器	坏	—, 11.0, —		砂粒を 含む	明赤褐色 白黄褐色	外面 体部下半へら削り 破片



第57図 水没住居址出土遺物 (1/3)

番号	種類	器形	法 量	胎 土	色 調 (外面 内面)	整形・特徴・その他
			器高・口径・底径			
6	土師器	坏	3.1, 13.0, 6.8	褐色白色粒子を含む	黄赤褐色	外面 体部下端～底部 ヘラ削り 内面にヘラ磨きが施されるが 磨滅により明瞭ではない。 2/3欠損
7	土師器	甕	-, -, 8.1	金雲母を多量に含む	黒 茶褐色	底部木葉痕 内面 横ハケ整形 破片
8	石器					打製石斧 粘板岩製 破片



第58図 溝状遺構

### <溝状遺構> (第58・59図)

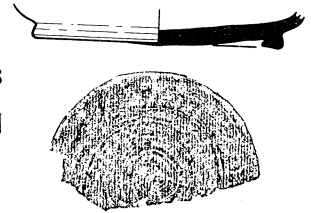
#### 〔遺 構〕

調査区北辺西側に位置する。北から南に流れをもつ溝。長さ約18m、幅約30cm～2m、確認面からの深さは北から南へ5～30cmを測り、南半部で溝幅・深さとも大きくなっている。

#### 〔遺 物〕

須恵器・土師器片が主体に出土しているが、磨滅を受けている。第59図 溝状遺構出土遺物(1/3)  
ここでは、須恵器の内古手とみられるものが1点あったので図化しておいた。

高台付坏の底部破片で、底径は約10cmを測る。胎土には白色粒子が目立つ。付高台で、坏自身の底が、台部の接地線よりも下に出る。底は回転のヘラ削りがなされる。

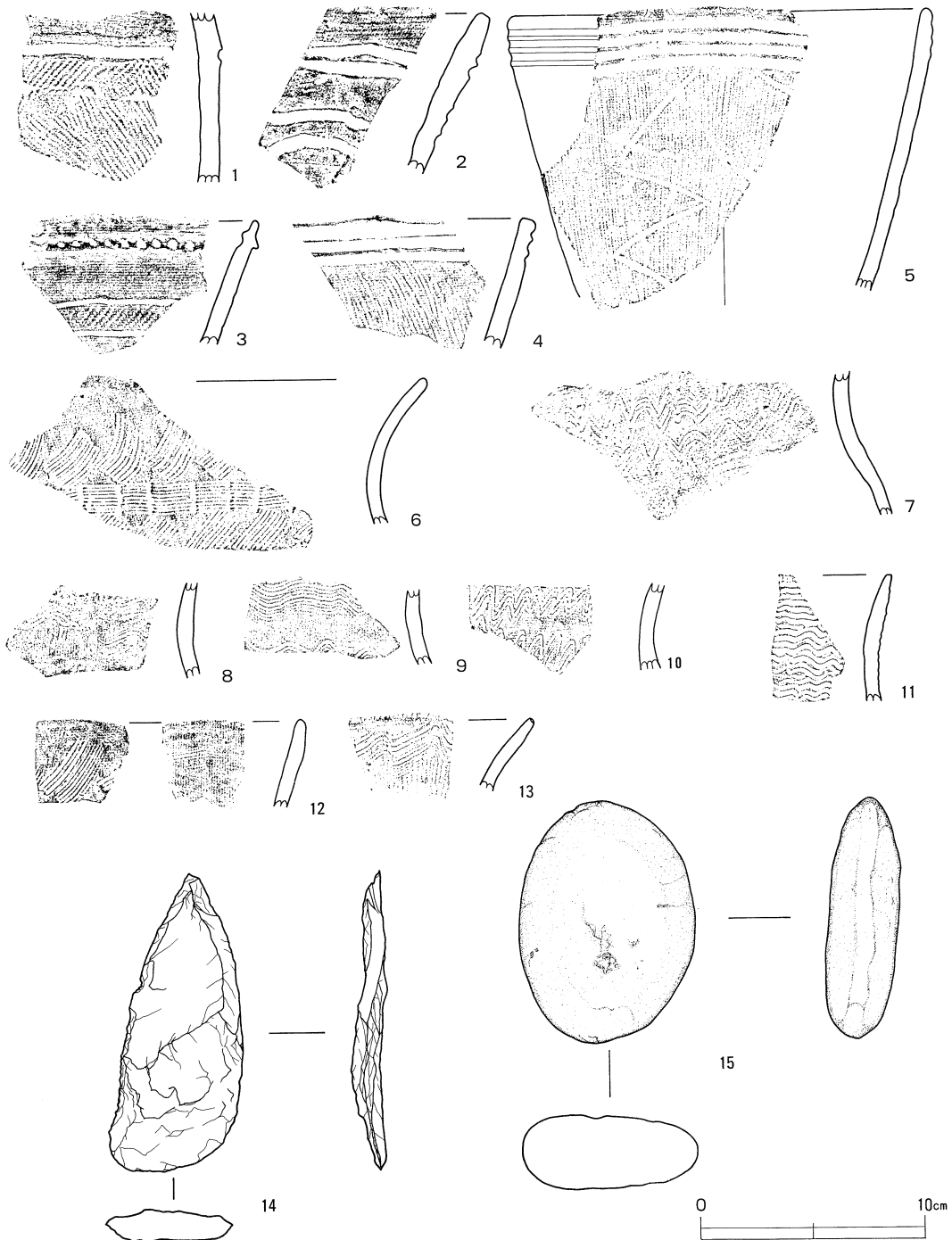


### <遺構外出土遺物> (第60・61図)

本遺跡からは、遺構外からも遺物の出土があったが、以下に縄文時代・弥生時代の土器等を何点か紹介してみよう。

1. 比較的深い沈線により、無文帯と縄文を分ける。色調は外面暗褐色、内面白褐色を呈する。胎土には砂粒を含む。縄文時代中期末葉～後期初頭のものであろう。
2. 口縁部破片。色調は外面白黄褐色、内面赤褐色を呈する。胎土には砂粒を含む。外面には比較的太い沈線による雑な文様が施される。
3. 口縁部破片。色調は外面薄白黄褐色、内面薄茶色系を呈する。胎土には砂粒を含む。口縁部内側に上下に二段の沈線がめぐる。外面には、刻目のある隆線、浅い沈線間に充填縄



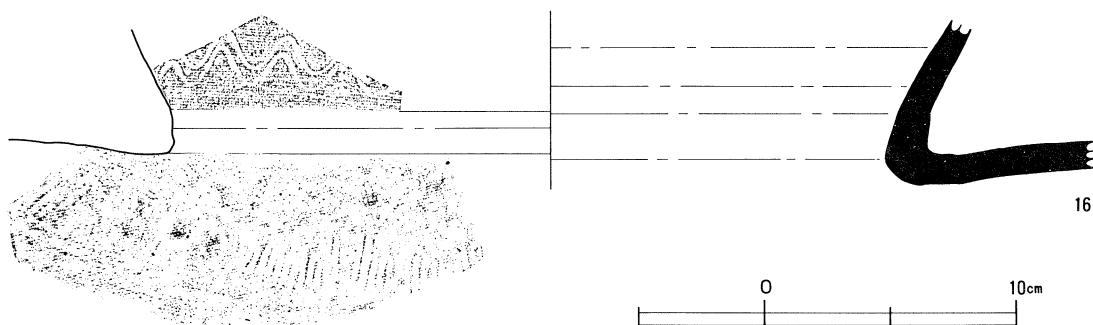


第60図 遺構外出土遺物 (1/3)

文が施される。縄文時代後期、掘之内2式である。

4. 口縁部破片。色調は外面暗褐色、内面褐色を呈する。胎土には砂粒を含む。外面、口縁部に沈線がめぐり、斜位の条痕文が施される。縄文時代晩期後半～末葉のものであろう。

5. 深鉢形土器の口縁部～胴部破片。色調は外面褐色、内面黒褐色を呈する。胎土には白色粒子が目立つ。外面、口縁部に沈線がめぐり、胴部に縦位の条痕文を施し稲妻文を垂下させる。縄文時代晩期後半～末葉に位置づけられるものである。
6. 甕形土器の口縁部付近の破片。色調は褪明褐色を呈する。胎土には砂粒、若干の赤褐色粒子を含む。内面は篋磨き。外面、頸部に櫛描簾状文、その上下に斜位の弧文風の櫛描文が施される。
7. 胴部破片。色調は褪褐色を呈する。胎土には砂粒を含む。内面は篋磨き。外面に櫛描波状文が施される。
8. 胴部破片。色調は外面暗褐色、内面薄茶色を呈する。内面は篋磨き。外面には乱れた櫛描波状文が施される。
9. 胴部破片。色調は外面淡黄褐色、内面暗灰白褐色を呈する。胎土には砂粒を含む。外面に櫛描波状文がある。
10. 胴部破片。色調は外面黒褐色、内面淡褐色を呈する。胎土には砂粒を含む。外面にはやや雑な櫛描波状文が施される。
11. 口縁部破片。色調は外面暗灰褐色、内面暗茶褐色を呈する。内面には、篋削り痕がみられ、煤付着。外面は幅広の条を有する波状文が施される。
12. 口縁部破片。色調は外面暗灰褐色、内面暗白褐色を呈する。胎土には砂粒を含む。内面は篋削り。外面には櫛描文が施される。
13. 口縁部破片。色調は外面暗赤褐色、内面暗灰褐色を呈する。胎土には砂粒を含む。外面に櫛描波状文がある。口唇部に刻目が連続しているのが認められる。6～13は、弥生時代後期に位置づけられよう。
14. 短冊型打製石斧。若干欠損。石材は粘板岩
15. 凹み石。石材は安山岩。表裏に僅かに凹みあり。



第61図 遺構外出土遺物 (1/3)

この他に、大型の須恵器甕の破片があったので、掲げておく。

16. 頸部を中心とした破片。色調は暗青灰色を呈する。器面には自然釉が顕著。外面、肩部は叩目、頸部の上に波状文が施される。焼成時の歪みがみられる。

## 〔総括〕

### I 発掘調査の成果とまとめ

#### 1. 中本田遺跡

今回の調査は、縄文時代後期を中心とした土器片が多量に出土したのみであった。

藤井平における縄文時代の遺跡は、あまり明確になっていない。藤井小学校周辺で、道路工事に伴い偶然に中期中葉の土器と炉址が発見されたことが、『葦崎市誌』にのっているだけであり、近年の圃場整備事業に伴う発掘でも、中田小学校遺跡で中期後半の竪穴式住居址1軒と土壙群、中道遺跡で晩期終末の竪穴式住居址1軒が報告されたにすぎない。しかしながら、これらの遺跡内においても中本田遺跡と同様に、中期末葉～後期中葉の土器片が多量に出土している。このことは藤井平における該期の遺跡の傾向と言えるものであるが、遺跡の立地等の諸条件を含め、低位における該期の集落・社会構造を解明する上ではまだ不明な部分が多く、今後の遺構の調査・発見に期待をするものである。

第5群とした縄文時代晩期の土器片の出土は、藤井平における弥生文化の波及を考える上で重要であり、同時期の土器片を多く出土した中道遺跡の北に本遺跡があり、その波及の広がりをとらえる上で良好な資料となろう。

#### 2. 堂の前遺跡

今回の調査で発見された遺構は、弥生時代後期の竪穴式住居址4軒（6・16・19・20号住居址）、平安時代の竪穴式住居址16軒（1～5・7・9～15・17・18号住居址）、溝状遺構1基である。

弥生時代の住居址から出土した土器群、特に甕・壺などは、櫛描波状文を特徴とするもので、おおまかに後期後半に位置づけられる。中でも19号住居址から出土したものは、一括遺物として、編年的に良好な一組となろう。さらに、同住居址出土の炭化材も当時の住居を知る上でひとつの手がかりとなることであろう。これら弥生時代後期後半の遺構・遺物の存在は、水稻耕作に代表される藤井平の農業の歴史の古さを物語るものであり、穀倉地帯藤井五千石の基盤を形成するもので、今回の発見は意義のあったものであると言えよう。

平安時代の住居址は、出土遺物から中田小V期以降に位置づけられ、9世紀後半～10世紀前半が当てられ、調査区域を含め本地域には該期の集落が形成されていたことが窺える。また、溝状遺構から8世紀前半代の須恵器杯の底部が、幻の8号住居址からは盤状の杯が出土しており、開墾・耕作などによる破壊を考慮すれば、奈良時代の遺構が存在した可能性が推察され、調査区周辺には当然8世紀代の遺跡の存在が予想される。決めつけるのは尚早ではあるが、本地域には、8世紀代から9世紀、10世紀に至るまで連綿と集落が営まれていたのであろうか。

中本田遺跡からも出土しているが、遺構外から縄文時代晩期末葉の土器片が出土したことは、藤井平における弥生文化波及の広がりをとらえる上で良好な資料となろう。

## II 藤井平の弥生時代後期の土器推移

堂の前遺跡からは先述したように、弥生時代後期の竪穴式住居址が4軒発見され、良好な遺物の出土がみられた。そこでこれまでに藤井平で発掘調査された報告をもとに、該地における弥生時代後期の土器変遷を辿り概観し、本遺跡出土の弥生土器の編年的位置づけを試みてみよう。

### 1. 器種分類

#### 壺形土器

A類 単純口縁のもの。無文のものと、外側に縄文の施されるものがある。

B類 折り返し口縁のもの。無文のものと、内側に櫛描波状文の施されるものがある。

C類 複合口縁の土器。刷毛整形のみで文様のないもの、外側に縄文が施文されるもの、複合口縁外側に棒状浮文を貼付するものに分けられる。

D類 口縁部形態の不明な胴部のみもの。縄文のあるもの、櫛描波状文の施されるもの、無文乃至刷毛整形のみものなどがあり、いずれもA～B類の範疇に入るものである。

#### 甕形土器

A類 櫛描波状文・簾状文の施される（文様帯は外面頸部を中心としその上下）土器。最大径が胴部にあるA<sub>1</sub>類、最大径が口縁部にあるA<sub>2</sub>類に分け、口縁部に刻目が連続するものをA'とする。

B類 刷毛整形が施され無文のもの。最大径が胴部にあるB<sub>1</sub>類、最大径が口縁部にあるB<sub>2</sub>類に分け、口縁部に刻目の連続するものをB'とする。

#### 甑形土器

単純口縁で鉢形を呈し、底部に単孔があく。

#### 高坏形土器

坏部が直線的に開くもの。

#### 鉢形土器

口縁が直線的に開く、小型の浅鉢型土器。

### 2. 土器の時間的推移

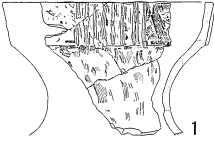


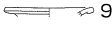




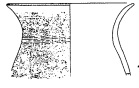





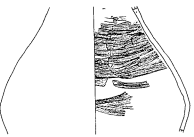

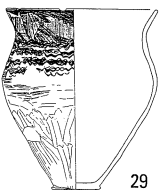
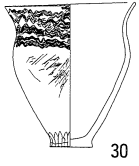
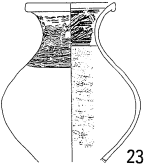
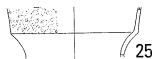
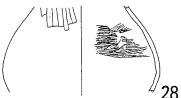

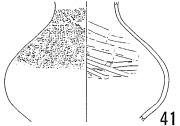

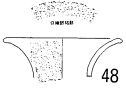
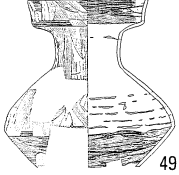
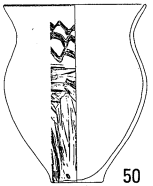
編年にあたっての時間差は、型式学的な方法により、壺・甕の形態・文様構成の消長変化を考慮し位置づけを行った。

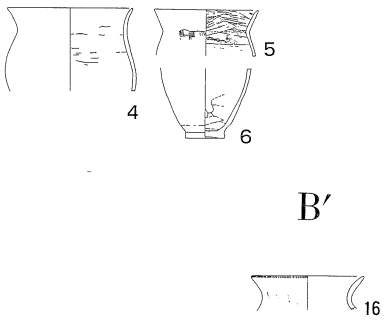
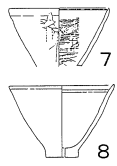
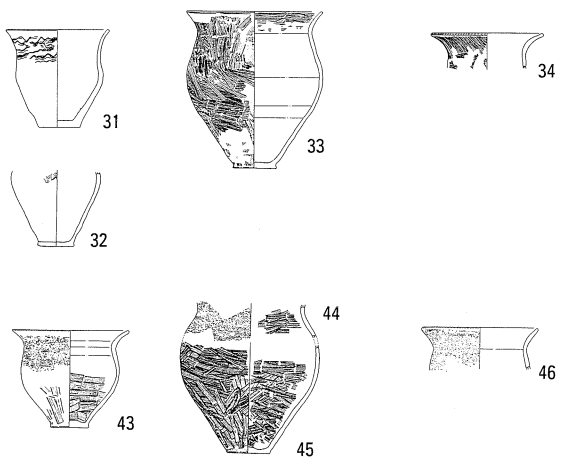
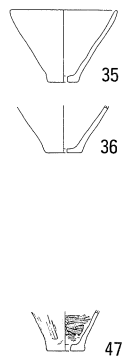


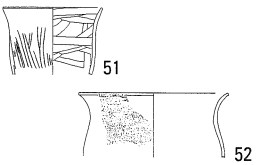

#### I 期

壺形土器B・C・D類、甕形土器A・B類、甑形土器で構成。

壺B類は、破片であるが口唇部断面が四角形を呈するもの。壺C類は、刷毛目痕のみられるもの、棒状浮文の間隙に縄文の施されるもの。壺D類は、胴部上半に縄文と円形貼付文のあるもの、胴部上半を欠損するもの、円形貼付文のあるものの破片がみられる。

藤井平の弥生時代後期土器編年(試案) [1:12]

器種 時期	壺						
	A	B	C	D	A <sub>1</sub>	A <sub>2</sub>	
I 期							
		 		 			
II 期		<p>1~8 中田小学校遺跡21号住居址出土                      9~13 堂の前遺跡16号住居址出土                      14~16 北下条遺跡3号住居址出土                      17~20 堂の前遺跡6号住居址出土                      21~39 堂の前遺跡19号住居址出土                      40~47 堂の前遺跡20号住居址出土                      48~52 中田小学校遺跡26号住居址出土</p>					
			 	 			
III 期							
							
IV 期							

甕	甑	高 杯	鉢
<p style="text-align: center;">B<sub>1</sub>      B<sub>2</sub></p>  <p style="text-align: center;">B'</p>			
			
			

甕A類の内、A<sub>1</sub>類は口縁部が張るため頸部のくびれが深いものと、口唇部が若干内湾するものがある。尚頸部の櫛描簾状文について見れば、前者は文様がしっかりしており、後者は流れている。A<sub>2</sub>類の櫛描簾状文はしっかりしている。甕B類は、刷毛目痕の明瞭なものとならないものがある。

甕形土器は、内面を丁寧に磨くものと、刷毛目痕のあるものがある。

北下条遺跡3号住居址、中田小学校遺跡21号住居址、堂の前遺跡16号住居址出土の遺物を資料とする。北下条遺跡3号住居址出土のものは時間的に後出するものと考えられる。

## II 期

壺形土器A類、甕形土器A・B類で構成

甕A類に大きな変化がみられ、A<sub>2</sub>類に於て櫛描簾状文が消滅する。甕B類は、口縁部に刻目の連続するもので、口唇部断面がI期にみられた先細りから幅をもつようになる。

堂の前遺跡6号住居址出土遺物を資料とする。

## III 期

壺形土器A・B・C・D類、甕形土器A・B類、甕形土器、高坏形土器、鉢形土器で構成。

壺A類は、無文のもの、縄文のものがある。壺B類は、幅広の折り返し口縁のもの、外側に円形貼付文の付されるもの。壺C類は、棒状浮文と縄文のあるもの、縄文のみのもの。壺D類は、縄文の施されるもの、櫛描波状文の施されるもの、無文のものがある。

甕A類は、比較的雑な櫛描波状文となり、口唇部断面が幅を持つ。甕B類は刷毛目痕が明瞭である。

高坏形土器は1点の出土で、丹彩された可能性がある。

堂の前遺跡19号住居址・20号住居址出土遺物を資料とする。

## IV 期

壺形土器B・C類、甕形土器A・B類、鉢形土器で構成。

壺B類は、縄文の施されるものでIII期にみられた円形貼付文はみられない。壺C類は、装飾性の欠けたもの。

甕A類は、ほんの少し胴部の方が大きいA<sub>1</sub>類で、III期までにみられた数帯の櫛描波状文は本期では3帯と減少し、しかも波間が大きく流れている。

鉢形土器は、磨きにより仕上げられ丹彩される。

中田小学校遺跡26号住居址出土遺物を資料とする。

以上、簡単に藤井平の弥生土器をI～IV期に分け、土器の推移を概観したが、次に補足を加え壺形土器・甕形土器の形態等の消長変化をみてみよう。

壺形土器は、資料が破片でまた断片的であるので明確なことは言えないが、胴部上半に縄文のあるものは、I期では円形貼付文が付き、III期では付されなくなっており装飾性の漸減傾向が窺える。また、III期の中で、無文のもので胴部最大径が下半にあるものと、中位付近にあ

るものがあり、頸部以下に櫛描波状文と櫛描横走文を施すものと、櫛描波状文のみのものがあることは、ともに前者よりも後者の方が後出的な様相を呈しているといえよう。

甕形土器A類は、全期を通じて存在。I期でみられた櫛描簾状文は、横線化し、II期に消滅する。II期からIII期への変化は急激ではないが、III期の口唇部断面はI・II期に比し幅を持つようになり、櫛描波状文の波の振幅が漸次小さくなり文様の省略化が進む。IV期では、櫛描波状文の帯数が3本と減り、波間が大きくなり流れるようになる。甕型土器B類はあまり大きな変化をみせないが、III・IV期頃になると刷毛目痕と刻目が目立つ。

### 3. 編年の位置付け

I～IV期に分けた土器群は、甕形土器の櫛描波状文・簾状文の文様消長を主体として区分されたものであり、I期はおおむね南信地方の座光寺原期～中島期前半、南関東地方の朝光寺原式期前半にあたり、弥生時代後期前半に位置付けられよう。II期はそれに続く弥生時代後期中葉に位置付けられようか。III期は東・北信地方の箱清水式～御屋敷式に併行するものと考えられ、弥生時代後期後半に位置付けられる。このIII期に存在する縄文施文の胴張り気味の壺は、埼玉県の吉ヶ谷式土器に類例があり、吉ヶ谷式では後半に属し南関東の弥生町式に併行するものにとらえられている。IV期は弥生時代後期後半から末葉と考えられ、南信地方の中島期後半に比定される岡谷市橋原遺跡III期に対応できようか。

堂の前遺跡出土の弥生時代土器と他の遺跡の弥生時代土器を用い、藤井平における弥生時代後期の土器様相の変化をみてきたが、本遺跡のものはI～III期にあてはまり、弥生時代後期前半～後半という年代観が与えられる結果となった。

### 4. まとめ

数少ない資料で、しかも限られた地域内での編年作業を行ってきたわけであるが、この編年(試案)は数多くの問題を内包している。例えば、壺形土器の取り扱いで、複合口縁の壺の存在及び、胴部の最大径の位置による形状などの型式学的な考察が全くなされなかったことなどは弁解のしようもない。さらに器種分類の曖昧さなど、上げれば切りがない。その他に、住居址等の遺構の検討も必要であり、編年の再考を含め今後に残された課題は大きいと言えよう。しかし、県内において、該期の資料の少ないなかで、ひとつのまとまった資料を提示することは決して無意義ではないと考える。

本文中には註をつけなかったが、引用・参考文献として一括して掲げておく。

#### 【引用・参考文献】

- 坂本美夫・他 『シンボジウム奈良・平安時代土器の諸問題』『神奈川考古』第14号  
橋原功一 『豆生田第3遺跡』大泉村教育委員会 1986  
保坂康夫 『駒井遺跡発掘調査報告書』山梨県教育委員会 1966  
山下孝司 『中田小学校遺跡』1985『金山・下木戸・中道遺跡』1986 藤崎市教育委員会  
山下孝司 『奈良時代における甲斐の土器編年』『山梨考古学論集Ⅰ』山梨考古学協会 1986  
新津 龍 『住吉遺跡-弥生時代集落址の調査-』甲西町教育委員会 1981  
田代 孝 『中山遺一「耐久保遺跡出土の弥生土器」』『丘陵』第11号  
山下孝司・榎本 勝 『北下条遺跡略報-櫛描文を有する弥生土器-』『丘陵』第12号  
『橋原遺跡-中部山岳地の弥生時代後期集落址-』長野県岡谷市教育委員会 1981  
『巨川遺跡群』長野県飯田市教育委員会 1986  
中山誠二 『甲府盆地における古墳出現期の土器様相』『山梨考古学論集Ⅰ』山梨県考古学協会 1986  
『第2回弥生時代シンボジウム発表要旨-長野大会-』長野・群馬・埼玉弥生時代研究グループ・千曲川水系古代文化研究所 1981

註……坂井南遺跡は昭和60年に藤崎市教育委員会によって第三次調査が行われ、58軒の古墳時代前期の竪穴式住居址が発見され調査された。その内、炭化材を出土した住居址が19軒あり、材の同定をバリノ・サーヴェイ株式会社 に依頼し、その結果報告がなされているが、現在はまだ市教育委員会において遺物等の整理作業中であり、報告書刊行までに至っていない。



# 図 版

中本田遺跡遠景



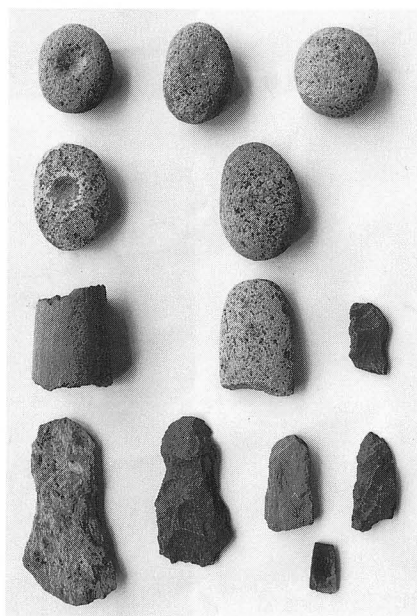
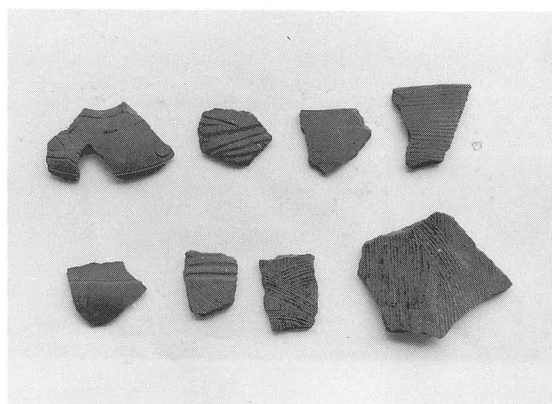
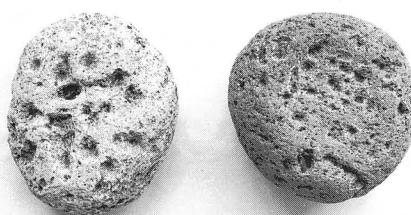
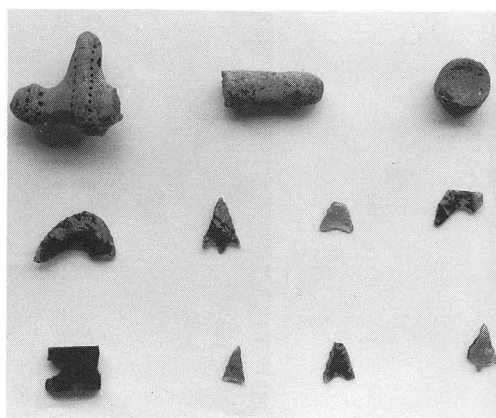
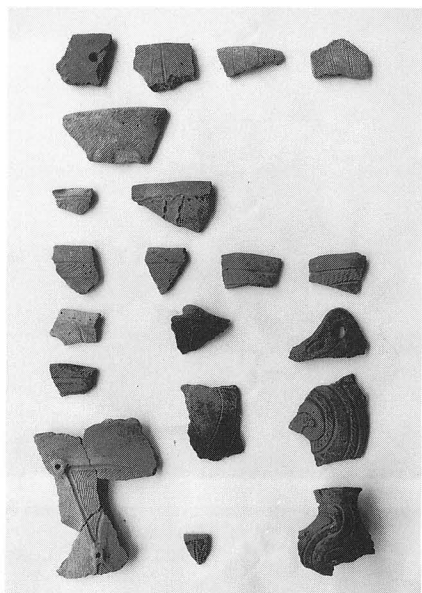
中本田遺跡  
発掘風景



中本田遺跡全景



図版 4



中本田遺跡出土遺物

堂の前遺跡風景



堂の前遺跡  
1号住居址



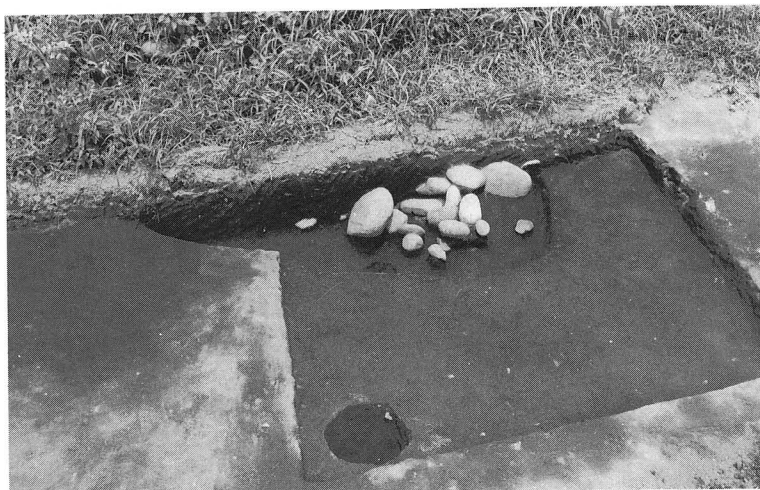
堂の前遺跡  
2号住居址



堂の前遺跡  
3号住居址



堂の前遺跡  
4号住居址

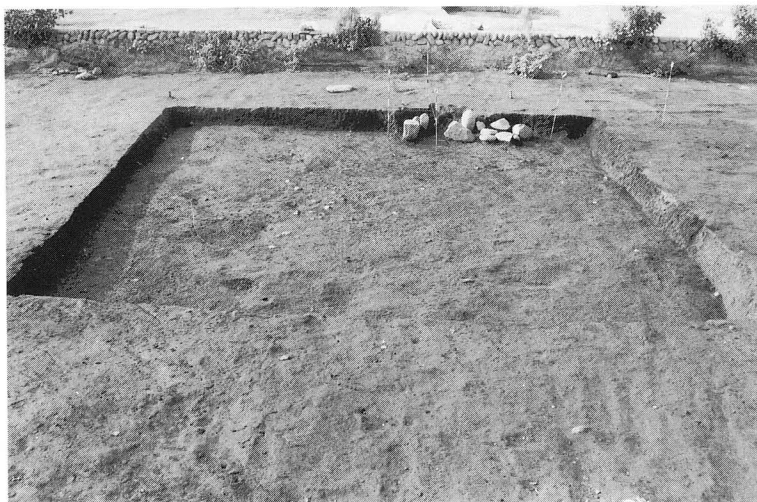


堂の前遺跡  
5号住居址





堂の前遺跡  
6号住居址



堂の前遺跡  
7号住居址

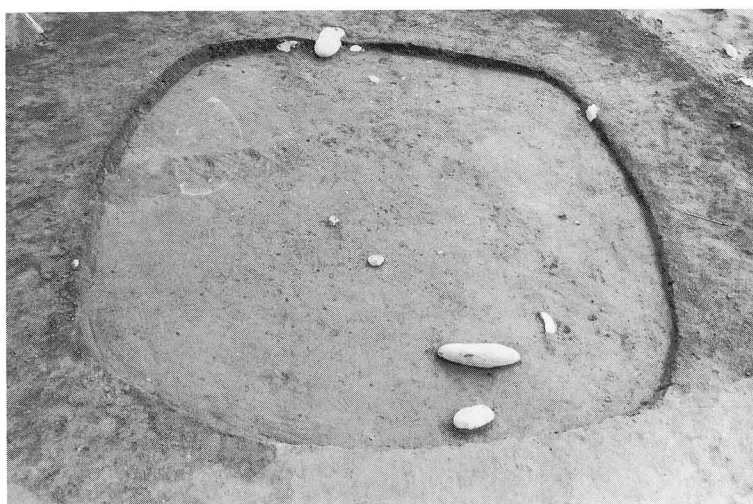


堂の前遺跡  
7号住居址カマド

堂の前遺跡  
9号住居址



堂の前遺跡  
10号住居址



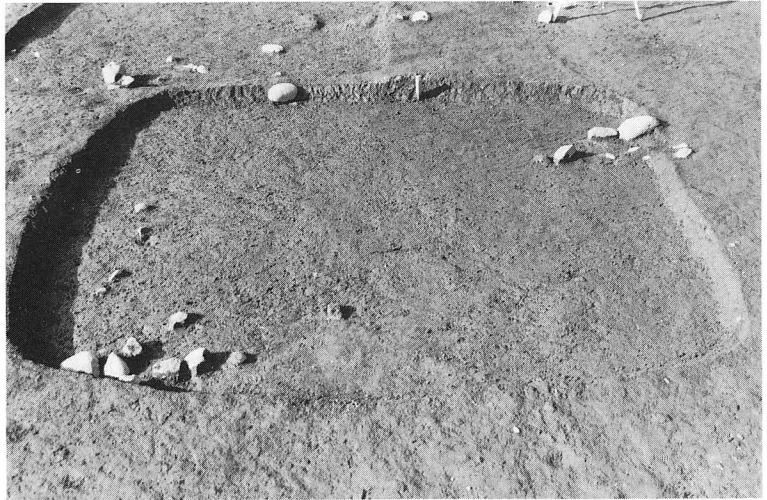
堂の前遺跡  
11号住居址



堂の前遺跡  
12号住居址



堂の前遺跡  
13号住居址



堂の前遺跡  
14号住居址

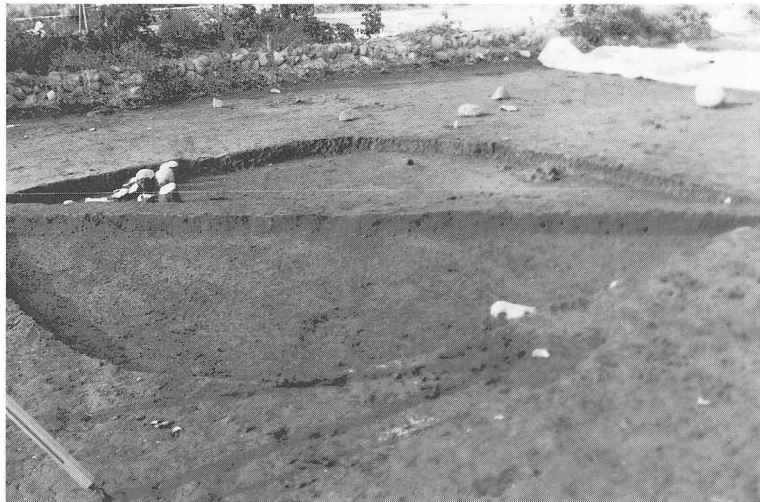




堂の前遺跡  
15号住居址遺物



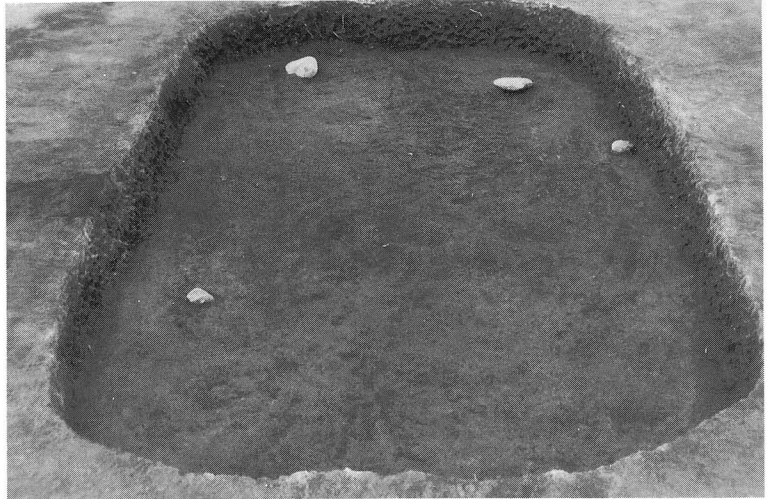
堂の前遺跡  
15号住居址



堂の前遺跡発掘風景



堂の前遺跡  
16号住居址



堂の前遺跡  
17号住居址



堂の前遺跡  
18号住居址



堂の前遺跡  
18号住居址カマド



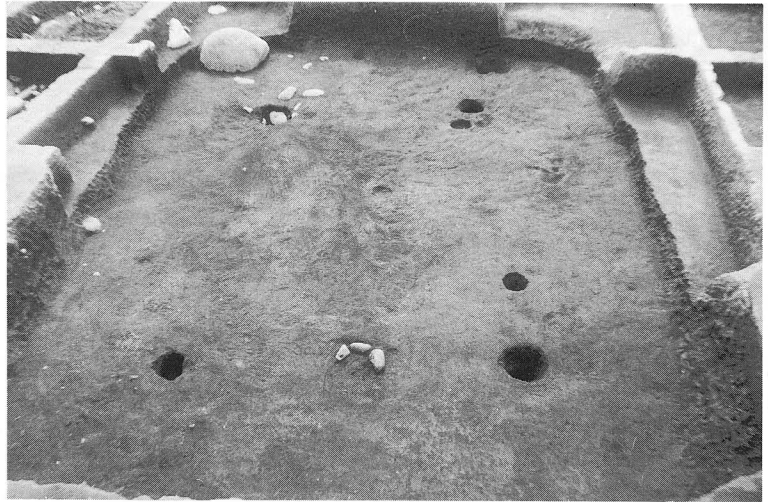
堂の前遺跡発掘風景



堂の前遺跡  
19号住居址



堂の前遺跡  
19号住居址



堂の前遺跡  
20号住居址



堂の前遺跡  
溝状遺構



4



5



7

堂の前遺跡 1号住居址出土遺物

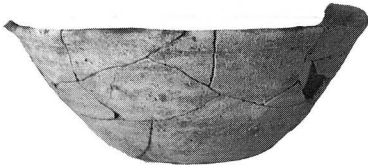


2

堂の前遺跡 2号住居址出土遺物



2



5



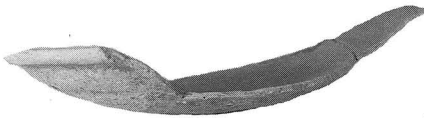
6



4



9



10

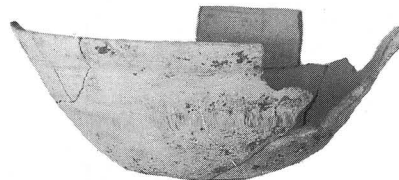


11

堂の前遺跡 3号住居址出土遺物



11

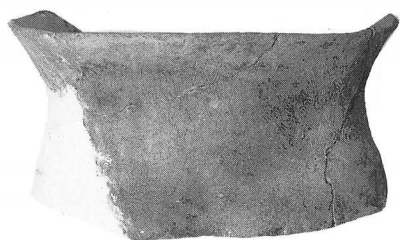


13



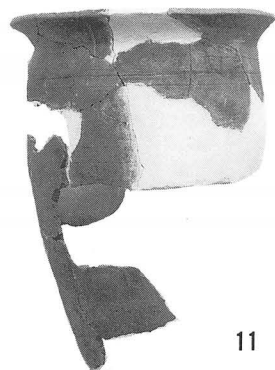
12

堂の前遺跡 5号住居址出土遺物



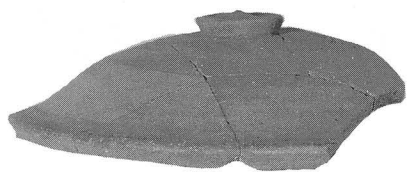
4

堂の前遺跡 6号住居址出土遺物

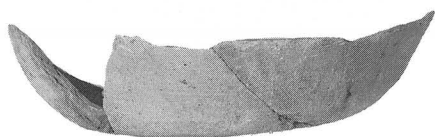


11

堂の前遺跡 7号住居址出土遺物



1

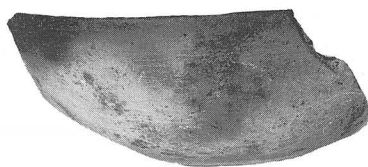


2



14

堂の前遺跡 幻の 8号住居址出土遺物



1



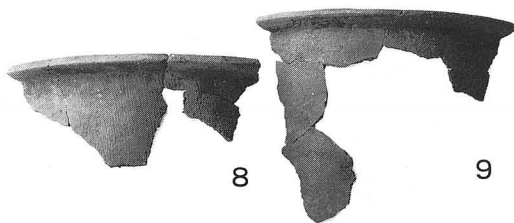
5



5



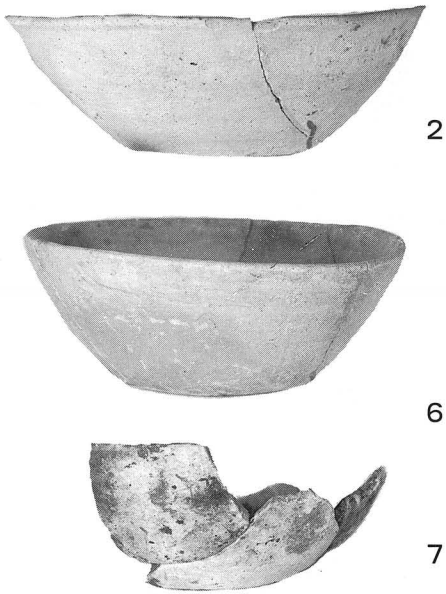
7



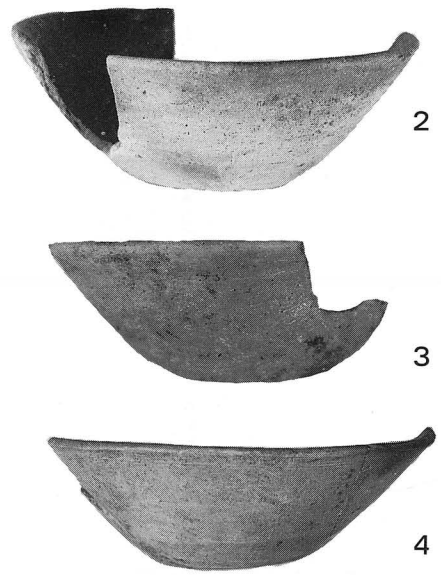
8

9

堂の前遺跡 12号住居址出土遺物



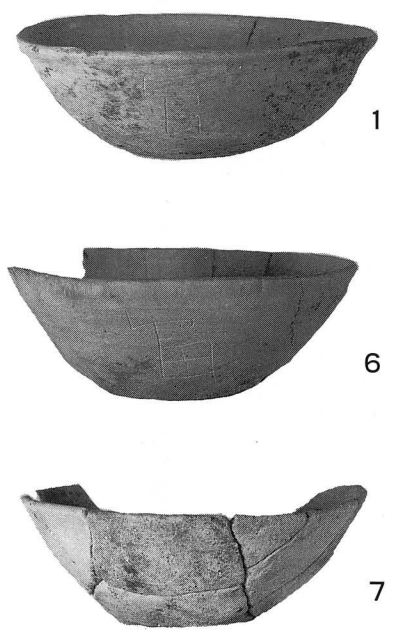
堂の前遺跡11号住居址出土遺物



堂の前遺跡13号住居址出土遺物



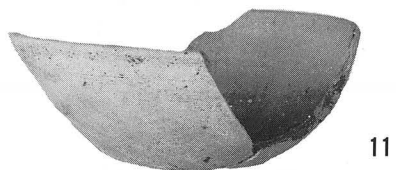
堂の前遺跡14号住居址出土遺物



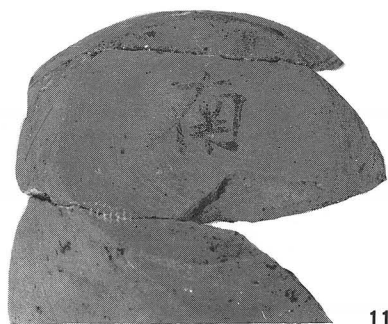
堂の前遺跡15号住居址出土遺物



10



11



11



14



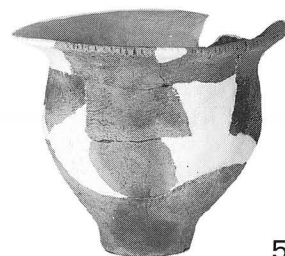
1

堂の前遺跡18号住居址出土遺物

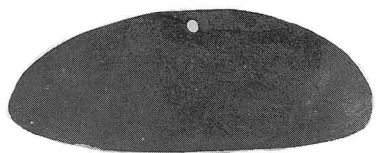
堂の前遺跡17号住居址出土遺物



3

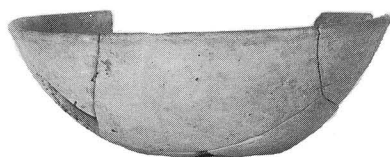


5

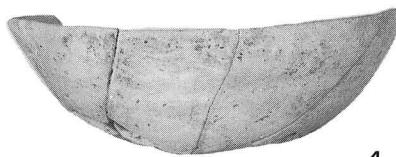


10

堂の前遺跡20号住居址出土遺物



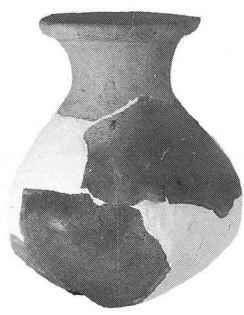
2



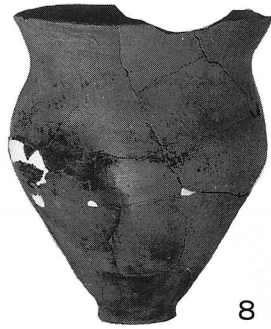
4

堂の前遺跡水没住居址出土遺物

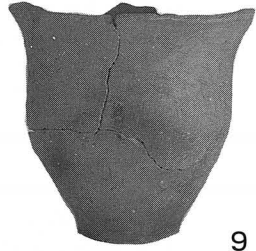




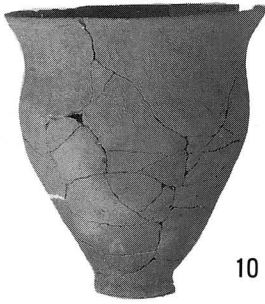
7



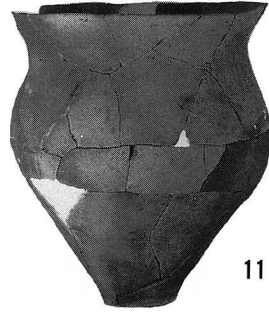
8



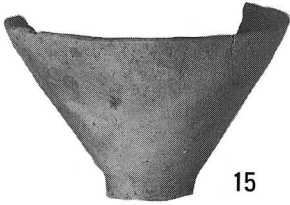
9



10



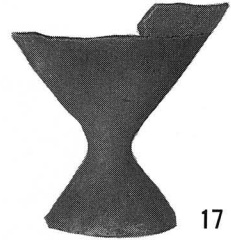
11



15



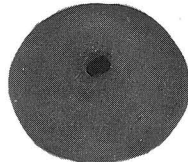
16



17



21



22



18



19

堂の前遺跡19号住居址出土遺物

---

---

中 本 田 遺 跡  
堂 の 前 遺 跡

発行日 昭和62年3月31日

発 行 韮崎市教育委員会

〒407 山梨県韮崎市水神・丁目3番1号

TEL 0551-22-1111(代)

印 刷 (株)まいづる印刷

---

---

